

成、策の聲聞を聞き、舒より來り、策に勸めて、居を舒に徙さしむ。堅の死するに及び、策還つて、葬り、江を渡つて、江都に居り、豪傑に結納し、復讐の志あり、壽春に至つて、袁術を見る、術甚だ之を奇とし、堅の餘兵千餘人を以て策に還し、表して、懷義校尉に拜し、次いで、九江太守となすを許す、然れども、策、術が己を用ふること專ならざるを以て、望を失ふ、これより先、劉岱の子、繇、詔を奉じて、揚州刺史となり、丹陽太守、吳景、都尉、孫賁、皆策の姻戚なり、之を迎へて、曲阿に至る、繇、この二人、元と袁術の用ふるところなるを以て、乃ち追逐して去らしむ、二人、退いて、歷陽を保つ、繇、將をし、て、横江(和州東南)に屯して、之を攻めしむ、二人、連りに攻むれども、克たず、こゝに至り、孫策、術に説き、乞うて、景等を助けて、江東を平定せむとす、術、乃ち策を表して、折衝校尉となし、兵千餘人、騎數十匹を將らしむ、歷陽に至る、比、衆五六千、周瑜、兵を將ゐて、之を迎へ、助くるに、資糧を以てし、進んで、横江を攻めて、之を拔き、江を渡つて、轉闘し、向ふところ、皆破る、百姓、孫郎の至るを聞いて、皆魂魄を失ふ、雞犬、菜茹、一も犯すところなきを以て、乃ち大に悦び、競うて、牛酒を以て、軍を勞し、遂に、劉繇を曲阿に攻む、繇の兵、敗走す、策、曲阿に入り、將士に勞賜し、恩を發し、令を布き、諸縣に告

諭し、從軍を樂むもの、一身行いて、復た門戸を除し、樂まざるものは、強むず、旬日の間、四面雲集、見兵二萬餘人を得、その威、江東に震ふ、術、策を表して、殲寇將軍となす、策、張紘を以て、正義校尉となし、張昭を長史となし、常に一人をして居守し、一人をして征討に從はしめ、昭を待つに、師友の禮を以てし、文武の事、一に之に委す、繇、丹徒に走り、遂に江を渡り、南豫章を保つ。

すてにして、孫策、兵を引いて、浙江を渡る、會稽の虞翻、その太守王朗に勸めて、之を避けしむ、朗、從はず、兵を發して、拒戦して、敗績し、海に浮んで、東冶に至る、策、追擊して、大に之を破り、朗乃ち降る、こゝに於て、策、自ら會稽より、太守を領し、復た翻に命じて、功曹たらしめ、待つに、交友の禮を以てす。

その翌、建安二年、袁術、讖に、漢に代るもの、當塗高といへるを以て、自ら名字之に應ずとなし、遂に、僭逆の謀あり、孫堅、かつて、傳國の璽を得たるを聞き、堅の妻を拘へて、之を得、尊號を稱せむことを議す、策、術に書を與へて曰く、今主上、天下に惡あるに非ず、徒だ幼少を以て、強臣に脅かさる、湯武の時に異なり、且つ、董卓、貪淫、驕陵、その志、紀極なきも、主を廢して、自ら興るに至つては、亦た猶ほ未だし、而かも、天下

袁術帝と稱す

心を同うして、之を疾む。況んや、之より甚しきに於てをや。と、術はじめ、策必ず己と會せむを計る。其書を得るに及び、愁沮して疾を發す。策遂に之と絶つ。こゝに至り、術、號を壽春に僭し、自ら仲家と稱し、百官を置き、天地を郊祀す。陳登の父沛相、陳珪少にして、術と遊ぶ。術書を以て之を召せども、應ぜず。これより先、呂布、劉備に歸し、すてにして下邳に據り、攻めて之を破る。備去つて、操に歸し、因つて豫州牧に除せられ、行いて沛に屯す。すてにして、術、使を遣し、帝と稱せしことを以て、布に告げしめ、因つて婦を迎ふるを求む。陳珪、徐揚合縱難を爲し、未だ已まざらむを恐れ、布に説いて、之を沮む。布、亦た素より術を怨む。女すてに塗に在り、乃ち追うて還し、婚を絶ち、その使を械送し、許市に梟首す。珪、その子登をして、曹操に詣らしむ。布、會するを肯ぜず。詔して、布を以て左將軍と爲す。操、復た布に手書を遣りて、深く慰納を加ふ。布、大に喜び、乃ち登を遣し、奉章して恩を謝し、并に操の書に答ふ。登、操を見、因つて、布の勇にして謀なく、去就を輕ずるを陳し、早く之を圖るべしといふ。操、乃ち珪に秩中二千石を増し、登を廣陵太守に拜し、徐、かに、部衆を合し、以て内應を爲さしむ。すてにして、夏五月、袁術、布の約に背きしを怒り、その大將張勳等を遣し、韓、暹、楊

呂布の敗死

奉とともに歩騎數萬、七道より布を攻む。布、大に懼る、すてにして、珪の策を用ひ、還奉に書を與へ、己と力を并せて術を撃たしめ、悉く軍資を以て、之に與ふ。還奉、大に喜び、乃ち布に従つて軍を進め、勳の營を去ること百步、還奉の兵、同時に叫呼す。勳等散走す。布、追撃し、大に之を破つて、殺傷し、水に墮ちて死するもの、殆んど盡く。後に還奉、徐揚の間に縱暴し、奉は劉備の誘殺するところとなり、還は奔つて并州に還らむとし、道にして人の殺すこととるなる。その翌三年秋九月、布復た術と通じ、その將高順をして備を攻め、沛城を破り、備の妻子を虜にす。備、單身走る。曹操、夏侯惇をして、備を救はしめ、却つて順の敗るところとなる。操、乃ち自ら布を撃ち、備と梁に遇ふ。廣陵太守陳登、郡兵を率ゐて、操の先驅となり、進んで下邳に至る。布、屢ば戰つて皆敗れ、城を保して、敢て出でず。人を遣し、救を袁術に求む。術、救ふ能はず。たゞ兵を嚴にし、布の爲に聲援を作す。操、下邳を圍むこと久しく、破敵して還らむと欲す。荀攸、郭嘉曰く、呂布、勇にして謀なし、屢ば戰ひ、皆北げ、銳氣衰ふ。陳宮、智あつて遅し、今布の氣、未だ復せず。宮の謀、未だ定らざるに及びて、急に之を攻むれば、布、拔くべきなり。と、乃ち沂泗を引いて、城に灌ぐ。布、益す困迫す。布の將魏續等、ともに陳

宮高順を執へ、その衆を率ゐて降る。布、白門樓に登る、兵之を圍むこと急、布左右をして、其首を取つて操に詣らしむ。左右忍びず、乃ち操に降る。布、操を見て曰く、明公の思ふるところ、布に過ぎず、今すでに服す、若し布をして騎に將とし、明公歩に將たらば、天下は定むるに足らざるなりと、願みて劉備に謂つて曰く、玄德卿は座上の客たり、我は降虜たり、我を縛縛すること急、ひとりの言せざるべけむや、操笑つて曰く、虎を縛する急ならざるを得ずと、乃ち命して布の縛を緩めしむ。劉備曰く、不可なり、明公、呂布が丁建陽董太師に事へしを見ずやと、操之を頷く。布、備を目して曰く、大耳兒、最も信ならずと、こゝに於て布及び陳宮高順を殺し、皆首を傳へて許に送り、然る後に、之を葬る。備、操に従つて、許に還り、操重く之を禮す。

孫策兼併の志

呂布の敗、袁術之を救はざるに因る。孫策、すでに術に嫌らず、こゝに於て、張紘を遣し、方物を許都に獻せしむ。操、之を撫納せむと欲し、策を表して、討逆將軍となし、吳侯に封じ、佐を以て、侍御史となす。袁術、又周瑜を以て、居巢長となし、魯肅を東城長となす。瑜、肅、術の終に成すところなきを知り、皆官を棄て、策に従ふ。策、自ら將として、祖郎を陵陽に討ち、之を禽にし、即ち械を被つて、門下賊曹に署し、又太史慈を勇由に討ち、之を禽にし、即ち門下督に署す。軍還るや、二人ともに、前導の軍に在り、人皆之を榮とす。これより先、劉繇死し、華歆豫章を守る。策、その餘衆を撫安し、遂に兼併の志あり。

袁紹、公孫瓚を攻殺す

袁術、すでに帝と稱し、淫侈滋す甚しく、媵御數百、羅紈を兼ね、梁肉に飽かざるなく、而かも、士卒凍餒、之を簡恤するなし。すでににして、呂布の敗るところとなり、又次いで曹操の敗るところとなり、資食空盡、自立する能はず、遂に宮室を焼いて奔り、又その部曲陳簡の拒むところとなり、士卒散走、憂慮して爲すところを知らず。乃ち使を遣し、帝號を袁紹に歸せしむ。これより先、袁紹、連年公孫瓚を攻めて、克つ能はず。瓚と憾を釋いて、連和せむと欲せしも、瓚答へざるに因り、守備を増修す。時に黒山の賊帥、瓚を救うて、未だ至らず。瓚、ひそかに人をして書を齎し、火を起して、應をなし、瓚内より出て、戦はむとす。紹、その書を得、乃ち期の如く、火を擧げて、瓚を誘ひ、伏を設けて、之を撃ち、大に敗る。之に次いで、紹、地道を爲つて、その樓下を穿ち、之を燒き、樓板も傾倒す。瓚、遂に、その姉妹妻子を殺し、然る後、火を引いて自殺し、その

袁術の死

將田楷亦た戰死す。袁紹すてに瓚を破り、次いで、烏桓の蹋頓、單于を擁立し、その歡心を得、勢愈よ盛たり。こゝに於て、祿すてに漢室を去り、袁氏當に興るべしといへる術の甘言を聞き、陰かに之を然りとし、四年六月、その子袁譚をして、青州より之を迎へしむ。術、下邳より北に過ぎむと欲す。曹操、劉備をして、之を邀へしむ。術、復た壽春に走り、江亭に至り、寶牀に坐して嘆じて曰く、袁氏乃ち是に至るか。と、因つて憤慨し、血を嘔いて死す。妻子皖城に走る。故の廣陵太守徐璆、傳國の璽を得て、之を獻す。

袁曹官渡に拒

袁術、すてに亡び、袁紹、なほ河北にあり。曹操、すてに帝を挾みて、許都に據り、之と對立す。紹、すてに、公孫瓚に克ち、心益す。騎、賁御、稀簡、精兵十萬、騎萬匹を簡し、以て許を攻めむと欲す。沮授諫めて曰く、曹操、天子を決んで、以て天下に令す。今師を擧げて、南向すれば、義に於て違ふ。且つ、廟勝の算、疆弱に在らず。操、法令すてに行はれ、士卒精練、公孫瓚坐して攻を受くるものに非ず。竊に公の爲に之を懼ると、紹、從はず。諸將紹の將に許を攻めむを欲するを聞き、皆懼る。操曰く、吾、紹の人と爲り、志大にして、智小、色厲にして、膽薄く、克つを忌んで、威少く、兵多くして、分盡明ならず。將

孫策の死

騎つて政令一ならざるを知る。土地廣しと雖も、糧食豊なりと雖も、適ま以て吾が奉と爲すに足るなり。と、八月、操、軍を黎陽に進め、威、胡等をして、青州に入らしめ、子禁をして、河上に屯せしめ、九月、操、許に還り、兵を分つて、官渡(河南開封府中牟縣東北)を守る。

これより先、廬江太守劉勳、新に袁術の部曲を得たり。孫策、その兵の強きを惡み、勳に勸めて、上淥を攻取せしむ。勳、すてに行き、策、周瑜と輕軍を以て、廬江を攻め、悉く其衆を降す。勳、北に走つて、許に歸る。策、遂に西して、黃祖を破り、次いで豫章太守華歆を降し、皆その地を并す。策、皖城に入るや、袁術の妻子を撫視し、豫章に入るに及び、劉繇の喪を收載し、善くその家を遇す。士大夫、是を以て之を稱す。その翌、建安五年、策、袁曹官渡に相守るを以て、その虛に乗じて、許を襲はむと欲し、部署して未だ發せず。先に殺すところ、吳郡太守許貢の客、策が出て、獵するに困り、篋竹中に伏して、之を射、頰に中り、創甚し。乃ち張昭等を召して、謂つて曰く、中國方に亂る、吳越の衆、三江の固を以て成敗を觀るに足る。公等善く吾弟を相けよ。と、その弟孫權を呼び、佩ばしむるに、印綬を以てし、之に謂つて曰く、機を兩陳の間に決し、天下

と衡を争ふは、卿、我に如かず、賢を挙げ、能を任じ、各その心を盡さしめ、以て江東を保つは、我、卿に如かず、と、遂に卒す。時に二十六、權悲號して、未だ事を視ず。昭曰く、孝廉、これ寧ろ哭するの時か、と、乃ち權の服を易へ、扶けて馬に上り、出て、軍を巡らしめ、表を朝廷に上り、下屬城に移り、中外將校、各職を奉ぜしむ。周瑜、巴邱より兵に將として、喪に赴き、留つて、張昭と衆事を掌る。時に流寓の士、皆安危を以て、去就を意となし、未だ君臣の固あらず。昭、瑜等と謂ひ、權ともに大事を成すべしとなし、遂に心を委して服事す。

劉備袁紹と通ず

曹操の許に在るや、政を專にし、天子たゞ虚器を擁するのみ、董承、帝の衣帶中の密詔を受けたりと稱し、劉備とともに曹操を誅せむを謀り、未だ發せず。操、從容備に謂つて曰く、今天下の英雄、使君と操とのみ、本初の徒、數ふるに足らざるなり、と。備、方に食して匕箸を失ひ、雷の震ふに値ふ。備、因つて曰く、聖人云ふ、迅雷風烈、必ず變ず、まことに以あるなり、と。遂に承及び种輯等と謀を同うす。操、備をして、袁術を邀へしむるに會し、備、遂に徐州刺史を殺し、關羽を留めて下邳を守り、太守の事を

劉備袁紹に歸す

行はしめ、自ら小沛に還る。郡縣多く操に叛いて、備の爲めにす、こゝに於て、備の衆數萬人、使を遣して、袁紹と兵を連ぬ。操、長史劉岱をして、之を撃たしむれども、克たず。

建安五年春正月、董承等、謀洩る。曹操、之を殺し、皆三族を夷す。操自ら劉備を撃たむと欲す。諸將皆之を諫む。操曰く、劉備は人傑なり、今撃たずむば、必ず後患をなさむ。郭嘉曰く、紹の性、遲にして疑多し、來る必ず速ならず。備新に起り、衆心未だ附かず、急に之を撃たば、必ず敗れむ、と。操の師、遂に東す。田豐、袁紹に説いて曰く、曹劉兵を連ぬ、未だ卒かに解くべからず、公、軍を擧げて、其後を襲はば、一往して定むべし、と。紹、辭するに子の疾を以てす。豐、杖を擧げ地を撃つて曰く、嗟乎、遇ひ難き時に遇ひ、嬰兒の疾を以て、其會を失す、惜いかな、事去れり、と。操、劉備を撃ち、之を破り、その妻子を得、進んで下邳を抜き、關羽を擒にす。備、青州より袁紹に走る。紹、鄆を去る三百里、之を迎ふ。

袁紹二將を失ふ

その二月、操、官渡に還る。紹乃ち議して、許を攻めむとす。田豐、諫れども聽かず、之を強ゆるや、紹、豐を械繫す。こゝに於て、檄を州郡に移して、操の罪惡を數へ、軍を黎

陽に進む。紹、その將顏良をして、白馬を攻めしむ。四月、操軍を引いて兼行し、白馬に趣く。良來つて迎へ戦ふ。この時、關羽操に従つて、其軍に在り。良の麾蓋を望み見るや、馬に策ち、良を萬馬の内に刺し、其首を斬つて還る。紹の軍能く當るものなく、遂に白馬の圍を解き、其民を徙して西す。紹、河を渡つて之を逐ふ。軍、延津の南に至る。操兵を勅し、營を南阪に駐め、令を下し、騎は鞍を解き、馬を放ち、荀攸の計を用ひ、輜重を陳して、敵に餌す。紹の騎將文醜、劉備と五六千騎に將として、前後して至る。頃くして、或は分つて輜重に趣くや、操、その兵をして、皆馬に上らしめ、縱擊して、大に之を破り、醜を斬る。顏良、文醜ともに河北の名將にして、紹の依頼せしところ、再戰して皆斬らる。紹の軍、爲に氣を奪はる。すてにして、關羽備の在るところを知り、書をして、告辭して、備に袁軍に奔る。はじめ、操、羽の留意なきを察し、張遼をして、其情を以て、之に問はしむ。羽歎じて曰く、吾極めて曹公の我を待つ厚きを知る。然れども、吾、劉將軍の恩を受け、誓ふに、共に死するを以てす。之に背くべからず。要するに、效を立て、以て曹公に報じ、乃ち去るべきのみと。操之を義とす。こゝに於て、左右之を追はむと欲す。操曰く、彼各その主の爲にす。追ふこと勿れと。因つて其志を成さ

袁紹の敗

しむ。

紹の軍、次いで、陽武(河南開封府)に軍し、營を進めて、稍や前み、東西數十里に亘る。操亦た營を分つて相當り、遂に戰ひ、操の軍勝たず、復た還つて壁を堅うす。操衆少く、糧盡き、士卒疲乏す、乃ち荀彧に書を與へ、議して許に還らむと欲す。彧報じて、其變を待たしむ。すてにして、紹、穀車數千乘を運して、官渡に至る。操、擊つて之を燒く。十月、紹復た軍を遣し、穀を運び、淳于瓊等をして、兵に將として、之を送らしむ。瓊、烏巢(延津縣東南)に宿し、紹の營を去ること四里、會ま許攸、紹を怒り、操に奔り、之に説いて、瓊を襲はしむ。操、大に喜び、自ら歩騎五千を將る。袁軍の旗幟を用ひ、枚を銜み、馬口を縛し、夜、間道より、人を出し、束薪を抱いて、屯に至り、火を放たしむ。瓊の營、驚亂す。操、急に之を撃つ。紹、その將張郃等をして、操の營を攻め、別に輕騎を遣し、瓊を救うて、烏巢に至る。操の士卒、殊死して戰ひ、大に之を破り、遂に瓊等を斬り、盡くその糧穀を燔く。張郃等、之を聞いて、皆操に降る。こゝに於て、紹の軍大に潰ゆ。紹、その子譚等と八百騎を以て、河を渡る。操、之を追へども及ばず。盡くその輜重、圖書、珍寶を收め、餘衆降るもの、盡く之を阬にし、前後殺すところ、七萬餘人。紹走つて黎陽の

北に至り、餘衆稍や復た之に歸す。遂に田豐を殺す。紹の人と爲り外寛雅にして、局度あり、喜怒色に形はれず、而かも性矜愼、自ら高しとし、善に従ふに短、故に敗に至る。

袁紹の死

七年正月、曹操復た軍を官渡に進む。袁紹慙憤、病を發し、血を嘔いて卒す。はじめ紹三子、譚、淵、尚あり。紹の後妻劉氏、尚を愛し、紹亦た以て後となさむと欲し、譚を以て父の後を繼がしめ、出して青州刺史となす。その謀臣逢紀、審配、素より譚の疾むところ、辛評、郭圖は、皆譚に付き、因つて紀配と隙あり。こゝに於て、配等、紹の遺命を矯つて、尚を奉じて、嗣となす。譚、至れども、立つを得ず。自ら車騎將軍と稱して、黎陽に屯す。曹操、譚を攻む。尚、自ら將として、之を助け、操と戦ひ、數ば敗亡す。八年二月、譚尚敗走し、鄴に還る。操追うて至る。郭嘉曰く、袁紹その二子を愛し、適を立つるなし、今權力相伴しく、各黨與あり、之を急にすれば、相保せむ、之を緩くすれば、爭心生ぜむ。如かず、南、荊州に向ひ、以て其變を待たむには、と、操之に従ひ、賈信を留めて、黎陽を守らしめ、兵を引いて還る。譚、尚に謂つて曰く、今操の軍退き、人勝志を懷く、その未だ濟らざるに及び、兵を出して、之を掩へば、大に潰えしむべし、この策、失ふべからざるなり、と、尚疑うて許さず。譚、大に怒つて、尚を攻め、却つて敗れ、兵を引いて南皮に還る。

譚尚相攻む

九年正月、曹操、河を濟り、淇水を遏めて、白溝に入らしめ、以て糧道を通ず。二日尚復た譚を攻む。審配諫むれども、聽かず。乃ち配を留めて、居守せしむ。四日、操、鄴に至り、土山地道を爲つて、之を攻め、又攻めて糧道を絶つ。五月、塹を鑿つて、城を圍み、周

曹操鄴城を下す

四十里、はじめ故らに淺さを示して、之を誘ふ。配望見して笑ひ、出て、利を争はず。操、一夜之を濬すれば、廣深二丈、漳水を引いて、之に灌す。城中餓死するもの過半、七月尚還つて救ひ、鄴を去ること十七里、營を爲り、夜火を擧げて、城中に示す。配、兵を城北に出し、以て應ず。操之を逆へ撃ち、敗れて還る。遂にして尚、亦た破れて走り、曲漳に營し、降を乞へども、聽かれず。その衆とともに中山に潰奔す。審配、なほ城中に在り、士卒をして、堅守死戦せしめ、弩を伏せて、操を射、幾んど中つ。その兄の子榮、門を開いて、操兵を納れ、城陷る。配執へられ、屈せずして斬らる。こゝに於て、操城に入り、紹の墓を祀り、之を哭して流涕し、その妻を慰勞す。九月、詔して、操を以て冀州牧を領せしむ、操讓つて、兗州を還へす。

袁紹諸子の死

袁譚、さきに尙と相善からず、因つて操に通ぜしも、又之に叛く。十年正月、操南皮を攻め、遂に之を斬る。紹の仲子袁熙、幽州に在り、その將吏の逐ふところとなり、尙とともに遼西に奔り、烏桓に投ず。烏桓の蹋頓、單于、素より袁紹の厚うするところ、こゝに至りて、袁尙兄弟を受け、數ば塞に入つて、寇を爲し、尙を助けて、故地を復せしめむと欲す。十二年、操自ら將として、之を撃ち、先づ平虜、泉州の二渠を鑿ち、以て運を通ず、塹、田疇をして、其衆を將ゐて、郷導たらしめ、徐無山により、山を廻り、谷を廻むること五百餘里、白檀を經、平岡を歷、鮮卑の庭を涉り、東、柳城を指し、未だ至らざるること二百里、虜乃ち之を知り、尙熙、蹋頓等と數萬騎を率ゐて、逆へ軍す。八月、操白狼山(八溝界)に登り、卒に虜と遇ひ、兵を縱つて、之を撃ち、虜衆大に潰え、蹋頓を斬り、降るもの二十餘萬。尙熙、遼東に走る。九月、操引いて還る。遼東太守公孫康、尙熙を誘うて、之を斬り、その首を送る。袁氏、こゝに亡ぶ。この時に方り、荊州には劉表あり、益州には劉焉の子劉璋あり、ともに帝室の親を以て、聲望なほ一世に高く、江東には孫權あり、父兄の業を墜さずと雖も、曹操天子を挾んで號令し、天下殆んど之に歸す。

### 第四十八章 赤壁の戰

劉備、劉表に投ず

劉表、荊州の治

劉備、かつて袁紹の處に在り、紹、之をして汝南を略せしめ、郡縣多く之に應ず、操曹仁をして、之を撃たしむ。備因つて走り還り、陰かに紹を離れて、大に成すあらむと欲し、乃ち紹に説いて、南、劉表に連ねしむ。紹備を遣し、本兵に將として、復た汝南に至らしむ。建安六年、備、曹操の爲に敗られ、遂に走つて表に投ず。表、之を聞き、自ら出でて郊迎し、上賓の禮を以て、之を待ち、其兵を益して、新野に屯せしむ。備、荊州に在ること數年、かつて表の座に於て、起つて厠に至り、慨然流涕す。表、怪んで備に問ふ。備曰く、吾、かつて身鞍を離れず、髀肉皆消ゆ、今復た騎せず、髀裏肉生ず、日月流るゝが如く、老將に至らむとす、而かも、功業建つ能はず、之を以て悲むのみと。

劉表、かつて八及の一に算せられ、固より重名あり、その荊州に據守するや、民を愛し、士を養ひ、從容自ら保ち、境内無事、學者之に歸するもの、千を以て數ふ。表、乃ち學校を建立し、經術を講明し、故の雅樂郎杜襲に命じて、雅樂を作らしむ。然れども、やゝ弱にして、大事を作すに足らず。操の北伐するや、劉備之に勸めて、許都を襲は



しむ。表用ふる能はず。操の戦勝つて歸るや、表悔恨して止まず。備に謂つて曰く、君の言を用ひず故にこの大會を失ふを爲す。備曰く、今天下分裂、日に干戈を尋ね、事會の來る、豈に終極あらむや。若し能く之を後に聽かば、これ未だ恨となすに足らざるなり、と。

諸葛亮の天下三分策

はじめ瑯琊の諸葛亮難を避けて、襄陽の隆中山名湖北襄陽府襄陽縣西に寓居し、毎に自ら管仲樂毅に比す、時人之を許すなきなり。惟だ潁川の徐庶、兗州平之之を然りとす。備かつて士を襄陽の司馬徽に問ふ。徽曰く、儒生俗士、豈に時務を識らむや。時務を識るものは、俊傑に在り、この間、自ら伏龍鳳雛あり。備問ふ、誰と爲す。曰く、諸葛孔明、龐子元なり、と。徐庶亦た備に謂つて曰く、諸葛孔明は臥龍なり、將軍豈に之を見るを願はむや、と。備曰く、君ともに來れ。庶曰く、この人、就いて見るべく、屈して致すべからざるなり。將軍宜しく駕を枉げて之を顧るべし、と。これに由つて亮に詣る、凡そ三往、乃ち見る。因つて人を屏けて曰く、漢室傾頽、姦臣命を竊ひ、孤徳を度り、力を量らず、大義を天下に信べむと欲す、而かも、智術短淺、遂に用つて猖獗たらしめ、今日に至る。然れども、志猶ほ未だ已まず、君の計、將に安くに出てひと謂

ふ、と。亮曰く、今曹操すでに百萬の衆を擁し、天子を挟み、諸侯に號令す、これ誠に與に鋒を争ふべからず。孫權すでに江東を據有し、三世を歴たり、國險にして民附き、賢能これが用をなす、これ與に助となすべく、而かも、圖るべからざるなり。荆州は、北、漢沔に據り、利、南海に盡き、東は吳會に連り、西は巴蜀に通ず、これ武を用ふるの國、而かも其主守る能はず、これ殆んど、天、將軍に資する所以なり。益州は險塞、沃野千里、天府の土、劉璋闇弱、張魯北に在り、民殷にして國富む、而かも存郵を知らず、知能の士、明君を得むことを思ふ。將軍すでに、帝室の胄、信義四海に著はる、若し荆益を跨有し、その巖阻を保ち、西、諸戎を和し、南、夷越を撫し、外、孫權に結び、内、政理を修むれば、天下變あらむか、一上將に命じ、荆州の軍を將ゐて、宛洛に向はしめ、將軍自ら益州の衆を率ゐ、秦川より出づれば、百姓孰か敢て箝食盡漿して將軍を迎へざるものあらむ。まことに、是の如くすれば、霸業成るべく、漢室興すべし。備曰く、善し、と。こゝに於て亮と情好日に密、關羽張飛、悦ばず。備之を解いて曰く、孤の孔明ある、猶ほ魚の水ある如きなり、願くは、諸君復た言ふ勿れ、と。羽飛乃ち止む。蓋し亮の神算は、將來の變を洞視せしものにして、實は支那本部の地勢上より考察して得た

る自然の立案に外ならず。春秋より、戦國に至るの間、秦は關中に在り、晋齊は北に在り、吳楚は南に在り、まさしく鼎立の勢をなせり。これにその後、楚漢攻戰の時、韓信もし反すれば、天下は直に三分せしならむ。その後、王莽の亂の時、光武は北に在り、巴蜀關中には隗囂、公孫述あり、南方には諸種の賊あり、亦た殆んど同一の形勢を現出せむとせり。そも、漢末の争亂は、光武の中興平定の後に出でし漢末再度の大變局にして、積鬱久しきを経、その勢愈よ盛にして、到底收率すべからず、時勢の急迫は、遂に之を激成せり。而して、その之を實現せしは、後年赤壁の一戰の結果に外ならず。

曹操荆州に入

建安十三年、孫權、甘寧の獻策を容れ、西の方、劉表の麾下に屬する江夏太守黃祖を撃ち、遂に之を斬り、父の讐を報じ、江上の兵戈、愈よ急ならむとす。その八月、劉表病んで卒す。はじめ、表二子琦、琮あり、その後妻とともに琮を愛して、琦を惡む。琦、諸葛亮の謀に従ひ、黃祖の死するや、遂に其任に代るを求めて、江夏太守となる。ここに於て、琮、嗣いて立つ、未だ幾ならず、曹操自ら將として、來り侵し、九月、新野に至る

や、琮遂に州を擧げて降り、操兵を進む。この時、劉備樊襄陽縣北に屯し、もとより操の軍の至るを意はず、その始めて之を知るや、遂に其衆を將ゐて去り、襄陽を過ぐ、或は備に勧め、琮を攻むれば、荆州得べきをいふ。備曰く、忍びざるなり、と。すでにして、琮の左右及び荆州の人、備を慕うて、歸するもの多く、當陽に至る比、衆十餘萬、輜重數千輛あり、日に行くこと十餘里、別に關羽を遣し、船に乗じて、江陵に會せしむ。操に江陵軍實あるを以て、備が之に據らむことを懼れ、乃ち輜重を釋て、精騎を將ゐて、急に之を追ひ、當陽の長阪に至る。備、妻子を棄て、諸葛亮、張飛、趙雲等、數十騎と走る。張飛後を距ぎ、水に據つて橋を斷ち、目を瞋らし、矛を横へて曰く、身は是れ張翼徳なり、來つて共に死を決すしべし、と。操の兵、敢て近づくものなし。趙雲并に備の子禪を抱く、適々關羽の船と會し、沔を濟るを得、劉琦の衆萬餘人に遇ひ、ともに夏口に至る。

曹操、すでに劉琮を下し、劉備を逐ひ、因つて必ず之を窮追し、然る後、一擧して、吳を擧げ、東南半壁の地を并さむと欲し、乃ち急に兵を江陵に進め、遂に流に順つて東下す。時に魯肅、孫權の爲に襄陽に使せしも、相及ばず。劉備と同じく樊口(湖北武

諸葛亮、孫權に説く

昌府西北に往く。こゝに於て諸葛亮備に謂つて曰く、事急なり、請ふ命を奉じて、救を孫將軍に求めむと、遂に肅と俱に孫權に詣り、柴桑(江西九江府德化縣)に見え、説いて曰く、海内大に亂れ、將軍兵を江東に起す、劉豫州、兵を漢南に起し、曹操と並に天下を争ふ、今、操大難を交夷し、略ぼ已に平ぎ、遂に荊州を破り、威、四海に震ひ、英雄武を用ふるの地なし、故に豫州遁逃して此に至る、願くは、將軍力を量つて、之を處せよ、若し能く吳越の衆を以て、中國と抗衡せば、早く之を絶つに如かず、若し能はざれば、何を兵を按じ、甲を束ね、北面して之に事へざる、權曰く、苟くも、君の言の如くせば、劉豫州、何を遂に之に事へざる、亮曰く、田横は、齊の壯士のみ、猶ほ義を守つて辱かしめられず、況んや、豫州は王室の胄、英才世を蓋ひ、衆士仰慕す、若し事の濟らざるは、乃ち天なり、安んぞ復た之が下とならむや、と、權勃然として曰く、吾、全吳の地、十萬の衆を擧げて、制を人に受くる能はず、吾が計、決せり、劉豫州に非ざれば、以て曹操に當るべきものなし、然れども、豫州新に敗る、安んぞ能く此難に抗せむや、亮曰く、豫州さきに長阪に敗ると雖も、今戰士還るもの、及び關羽の水軍數萬人、劉琦江夏の戰士、亦た萬人に下らず、曹操の衆、遠く來つて疲弊す、荊州の民、之に附

くもの、心服に非ず、今將軍誠に能く猛將をして、兵數萬を統べ、豫州と協規同力すれば、操の軍を破るや必せり、操の軍、敗るれば、必ず北に還らむ、かくの如くなれば、荆吳の勢強く、鼎立の形成らむ、成敗の機、今日に在り、と、權大に悦ぶ。

周瑜

時に操權に書を遣つて曰く、近ごろ辭を奉じて、罪を伐ち、劉琮手を束ぬ、今、水軍八十萬衆を治め、方に將軍と吳に會獵せむと、權書を群下に示す、色を失はざるなし、張昭、操を迎へむことを勸む、時に、周瑜、使を受けて、番陽に至る、肅權に勸めて、之を召さしむ、瑜、至り、權に謂つて曰く、操、名を漢相に託すと雖も、實は漢賊なり、將軍神武雄才を以て、兼ねて父兄の烈に依つて、江東に割據せり、地方數千里、兵精しく、用足り、英雄業を樂む、當に天下に横行して、國家の爲に殘を除き、穢を去るべし、況んや、操自ら死を送る、而して、之を迎ふべけむや、今北土未だ平かならず、馬超、韓遂、操の後患たり、しかも、鞍馬を捨て、舟楫に依り、吳越と衝を争ふ、又今盛寒、藟草なく、中國の士衆を驅つて、遠く江湖の間を渉る、水土に習はず、必ず疾病を生ぜむ、この敵者は、兵を用ふるの患、而して操皆冒して之を行ふ、將軍、操を禽にする、宜しく今日に在るべし、瑜請ふ、精兵數萬人を得、進んで夏口に往いて保し、將軍の爲に、之

を破らむと。權曰く、老賊漢を廢して、自立せむと欲すること久し、徒に二袁呂布劉表と孤とを忌むのみ、今數雄すてに滅し、唯だ孤尙ほ存す、孤と老賊と、勢兩立せず、君擊つべきを言ふ、甚だ孤と合ふ、これ天、君を以て孤に授くるなりと。因つて刀を抜いて、前奏の案を斫つて曰く、諸將吏、敢て復た操を迎ふべしといふものあらば、この案と同じからむと。權の志すてに決す、南北の運命を判する江上の劇戰は、自ら避くべからざるなり。

赤壁の戰

こゝに於て、遂に三萬人を選び、周瑜程普を以て、左右督となし、劉備と力を并せて、操を逆へしめ、魯肅を以て、贊軍校尉となし、方略を助盡せしめ、進んで操と赤壁(湖北武昌府嘉魚縣西北江濱)に遇ふ。時に操の軍、すてに疾疫あり、はじめ、一たび交戰して、利あらず、引いて江北に次す。瑜等南岸に在り、瑜の將黃蓋曰く、今寇衆く、我寡く、以て持久し難し、操軍方に船艦を連ね、首尾相接す、燒いて走らしむべきなり。と。乃ち蒙衝圓艦十艘を取り、操荻枯柴を載せ、油を其中に灌ぎ、褻むるに、帷幕を以て、上に旌旗を建て、豫め走舸を備へて、其尾に繋ぎ、先づ書を以て操に遣り、詐つて降らむと欲すといふ。時に、東南の風急なり。蓋十艘を以て、最も前に著け、中江帆

を舉げ、餘船次を以て俱に進む。操の軍の吏士、皆營を出て、立つて觀、指して蓋降るといふ。北軍を去ること二里餘、同時に火を發す。火烈しく、風猛なり、船往くこと箭の如く、北船を燒き盡し、延いて岸上の營落に及ぶ。之に頃くして、烟焰天に漲り、人馬燒溺、死者甚だ多し。瑜等輕銳を率ゐて、其後に繼ぎ、雷鼓大に進む。北軍遂に壞る。操軍を引き、華容荊州府監利縣の道より歩いて去る。泥濘道通ぜざるに遇ひ、天又大風、悉く羸兵をして、草を負うて、之を填めしめ、騎乃ち過ぐるを得たるも、蹈藉して死するもの甚だ衆し。劉備周瑜並に進み、追うて南郡に至る。操の軍死するもの大半、乃ち引いて還る。その後、屢ば兵を權に加ふれども、常に志を得ず。乃ち嘆息して曰く、子を生まば孫仲謀の如くなるべし、向きの劉景升の兒子は豚犬のみと。

劉備荊州を領す

こゝに於て、劉備、劉琦を表して、荊州刺史となし、兵を引いて、南、武陵、長沙、桂陽、零陵を徇へしめ、皆之を降す。備、諸葛亮を以て、軍師中郎將となし、諸郡を督し、賦税を以て、軍費に充つ。曹操の北に還るや、曹仁を留めて、江陵を守らしめ、樂進をして襄陽を守らしむ。周瑜進んで南郡に至り、仁と江を隔て、未だ戰はず、甘寧徑に前ん

周瑜の死

て夷陵に據る。仁、兵騎を分遣し、之を圍むこと急なり。瑜、呂蒙の計を用ひ、身蒙と西して寧を救ひ、大に仁の兵を破つて還り、乃ち江を渡り、北岸に屯して、仁を相拒ぐ。こゝに至りて、歳餘、瑜の攻撃殺傷するところ甚だ衆く、仁遂に城を委して走る。會ま劉琦卒す。權、劉備を以て荊州牧を領し、周瑜南岸の地を分ち、以て備に給す。備、營を油口に立て、名を公安と改む。次いで權、妹を以て備に妻はす。

劉表の故の吏士、多く備に屬す。備、周瑜給するところの地、少くして、其衆を容るゝに至らざるを以て、自ら孫權に詣り、荊州に都督たらしむことを求む。瑜、因つて上疏して曰く、劉備、梟雄の姿を以て、關羽、張飛、熊虎の將あり、必ず屈して人の用を爲すものに非ず、宜しく備を徒して、吳に置き、盛に宮室を築き、その美女玩好を多くし、以てその耳目を娛しましめ、而して、羽飛を分ちて、各一方に置き、瑜の如きものをして、挾んで與に攻戰せしむれば、大事定むべきなり。今猥りに土地を割き、資を得て終に地中の物に非ざらむと、權、從はず。瑜、京口(江南鎮江府治)に至り、權を見、權の從弟孫瑜とともに進み、蜀を取り、張魯を并せ、馬超と援を結び、還つて襄陽に據

り、以て操を感せむを請ふ。權之を許す。瑜、還つて裝を治めむとし、道にして病困む。因つて權に牋を與へて、魯肅を進め、己に代らしめ、遂に巴丘に卒す。權、之を聞いて、哀慟して曰く、公瑾、王佐の資あり、今忽ち短命、孤何を頼まむや。と、遂に魯肅を以て奮武、校尉となし、瑜に代つて、兵を領せしむ。肅、權に勧め、荊州を以て劉備に借して、ともに曹操を拒がしむ。權、之に従ふ。劉備、すでに西略の資を得、三國の鼎立、愈よ近からむとす。赤壁の一戰、その結果、實に大なりといふべし。

はじめ、張紘、秣陵山川の形勝を以て孫權に勧め、以て治所となさしむ。劉備、又權に勧め、之に居らしむ。こゝに於て、石頭城を作り、建安十七年、治を秣陵に徙し、號を建業と改む。今の江南江寧府にして、古しへ、楚には、金陵といひ、後、晋には、建康といひ、又、普通、南京といふ。これより先、曹操、赤壁の戰より還るや、銅雀臺を鄴河南彰德府臨漳縣西南に造り、次いで兵を西に出す。はじめ、馬騰、韓遂、結んで異姓の兄弟たり、すてにして、讐敵となる。朝廷使を遣して、之を和解す。後、曹操、騰を徵して、衛尉となし、その子超をして、代つて部曲を領せしむ。こゝに至り、操、鍾繇をして、張魯を

曹操の四伐

曹操の專權

討たしめ、夏侯淵をして、河東より出て、之と關中に會せしむ。諸將疑うて己を襲ふとなし、馬超韓遂等、十部皆反し、その衆十萬屯して潼關、陝西同州府華陰縣東に據る。十六年七月、操自ら將として、之を撃ち、八月その地に至り、超等と關を夾んで軍す。操、潛かに二將をして、蒲阪津、即ち蒲關、山西蒲州府永濟縣西を渡らしめ、河西に據つて、營を爲る。閏月、操、北河を渡り、循つて、甬道を爲つて南す。超等退いて渭江を拒ぐ。操、疑兵を設け、夜、營を渭南に結ぶ。超等、之を攻めて伏の爲に破らる。九月、操、遂に渭を渡る。超等數ば戰を挑めども許さず。すてにして、賈詡の計を用ひ、超、遂を離間し、二人相猜疑す。操乃ち輕兵を以て、之を挑み、戰良久うして、虎騎を縱つて、夾撃し、大に之を破り、超、遂に涼州に走る。操、追うて、安定に至り、北方事あるに會し、兵を留めて還り、馬騰を誅し、その三族を夷す。超、諸戎を率ゐて、郡縣を攻取し、刺史太守を殺し、盡く隴右の兵を兼ねしも、操の守將の爲に破られ、遂に南、漢中に奔る。曹操の威、愈よ盛なり。こゝに於て、十八年、十四州を并せて九州となし、司隸及び幽并涼交の四州を省き、冀豫兗青徐揚荆雍益の九州を存し、冀州は、幽并二州及び司隸の河東河内馮翊扶風の四郡を兼有す。操、なほ冀州牧たり、これ、その統ぶると

ころを廣うし、以て天下を制せむとするの策に外ならず。その五月、自立して魏公となり、九錫を加へ、次いで宗廟社稷を立て、尙書侍中六卿を置き、荀攸を尙書令となし、涼茂を僕射となし、毛玠崔琰常林郭奕何夔を尙書となし、王粲杜襲衛觐和洽を侍中となし、鍾繇を大理となし、王修を大司農となし、袁渙を郎中令となし、御史大夫の事を行はしめ、陳群を御史中丞となす。その翌年、又位を諸侯王の上に進め、殆んど漢祚を篡せり。荀彧、之を喜ばず、遂に藥を飲んで卒す。

劉備

劉備、久しく人に寄食し、流浪して生を聊せず。すてに諸葛亮を得たれども、三分の計、なほ未だ成らず。荆州を借りて、徐に變を待てり。龐統といふものあり、亮を伏龍といふに對し、鳳雛と稱せられ、亦た材器あり。備、之を擧げて、來陽を守らしめ、令治せずして免す。魯肅、備に書を遣つて曰く、士元は百里の才に非ざるなり、治中別駕の任に處らしめば、はじめ、當に驥足を展ぶべきのみと、諸葛亮、亦た之を言ふ。こゝに於て、備、統と談じ、大に之を器とし、遂に用ひて、治中となし、親ら待つこと、亮に亞ぎ、並に軍師中郎將と爲す。

劉備四蜀に入

扶風の人法正、劉璋の軍議校尉たり。璋用ふる能はず、別駕張松、之と善く、前に荆州に使い、曹操の禮するところとならず、因つて、之を恨み、璋に勸め、操と絶つて、備に結ばしめ、正を擧げて、その使たらしむ。正、還つて、松の爲に、備の雄略あるを説き、之を奉戴して、州主となさむを謀る。會々曹操の將鍾繇、漢中に向はむとす。松乃ち璋に説き、劉備を迎へしむ。正、又その使たり。荆州に至り、陰に備に説いて、益州を取らしむ。備疑うて、未だ決せず。龐統曰く、荆州荒殘、人物殫盡、東に孫權あり、北に曹操あり、以て志を得難し。今益州は、戸口百萬、土沃にして、財富、まことに以て資となすを得、大業成すべきなり、と。備曰く、今指吾と水火なるものは、曹操なり、操は急を以てし、吾は寛を以てし、操は暴を以てし、吾は仁を以てし、操は譎を以てし、吾は忠を以てし、毎に操と反す、事乃ち成るべきのみ、今小利を以て、信義を天下に失ふ、奈何、統曰く、亂離の時、固より一道能く定むるところに、非ざるなり、且つ弱を兼ね、味を攻め、逆取して、順守す、古人貴ぶところ、若し事定まるの後、封ずるに、大國を以てせば、何を信に負かむ、今日取らざれば、終に人の爲に利せられむのみ、と。備以て然りとなし。建安十六年の冬、諸葛亮、關羽を留めて、荆州を守らしめ、自ら歩騎數萬を將

ゐて西す。劉璋所在に救し、供奉贈遺、巨億を以て計る。備、北涪に至る。璋、兵三萬を率ゐ、往いて之に會し、款飲百餘日。璋、備に兵を増し、厚く資給を加へ、張魯を撃たしむ。備、北葭萌、四川保寧府廣元縣に至り、厚く恩德を樹て、以て衆心を收む。孫權、備の西上せしを聞き、船を遣し、妹を奪ひ還へす。備の子禪、將に拉し去らむとし、趙雲、兵を勸し、之を救うて還る。

十七年、曹操權を撃つて、濡須(江南廬州府巢縣東南)に至る。權、備を呼んで自ら救ふ。備書を璋に贈つて、守將關羽に萬兵及び資糧を益さむことを求む。璋たゞ兵四千を許し、餘は皆半を給す。備因つて其衆を激怒せしめて曰く、吾、益州の爲に、疆敵を征し、師徒勞瘁す、而かも財を積み、賞を吝む、何を以て士大夫をして死戦せしめむや、と。張松、書を備に與へて曰く、今大事立つに、垂んとす、如何か之を釋て、去るや、と。璋、之を聞いて、松を收斬し、關成に救し、復た備と通ずるなからしむ。備、大に怒り、兵を勸して、直に關頭に至り、其兵を并せ、進んで涪城に據る。

劉璋、乃ち其將吳懿等をして、備を拒がしむ。皆破れて退き、軍に詣つて降る。備遂に諸縣を分定し、進んで涪城(四川成都府漢州)を圍む。こゝに至り、諸葛亮、關羽を留

劉備蜀を平ぐ

めて、荆州を守らしめ、張飛、趙雲と兵に將とし、流を沂つて巴東に克ち、巴郡を破り、太守嚴顔を獲たり。備、洛城を圍み、一年ならむとす。龐統、流矢に中つて死す。法正、書を劉璋に與へ、備が舊心依々、實は薄意なきを云ふ。璋、答へず。すてにして、洛城潰え、備進んで成都を圍む。亮、飛雲、兵を引いて來り會し、馬超、さきに操に破られ、漢中に走り、張魯に依りしが、與に事を計るに足らざるを見、亦た來つて降を請ふ。備、兵を引いて、城北に屯せしむ。城中震怖し、璋遂に城を開いて出て、降る。備之を公安に遷し、盡くその財物を歸し、佩ばしむるに、振威將軍の印綬を以てす。備、成郡に入り、自ら益州牧を領し、諸葛亮を軍師將軍と爲す。璋の舊臣、皆之を處して、顯任し、その器能を盡さしむ。有志の士、競うて勸めざるなく、益州の民、是を以て、大に和ぐ。時に建安十九年なり。こゝに於て、諸葛亮の三分策、殆んど成れるに庶かし。

孫劉荆州を分領す

劉備、すてに益州を得たり。孫權之を聞き、諸葛瑾をして、備に従つて、荆州を求めしむ。備、應ぜず。權、忿り、遂に長沙、零陵、桂陽の長史を置く。關羽之を逐ふ。權、呂蒙を遣し、襲うて三郡を奪ふ。備、兵を引いて、自ら公安に至り、羽を遣して、之を争ふ。孫權乃ち

進んで、陸口に住り、魯肅をして、萬人に將とし、益陽に屯して、羽を拒がしむ。すてにして、曹操將に、漢中を攻めむとするを傳ふ。備、乃ち和を權に求む。權、又瑾をして報命せしめ、遂に荆州を二分し、湘水を以て界となし。長沙、江夏、桂陽以東は孫權に屬し、零陵、武陵以西は備に屬す。瑾は亮の兄なり、骨肉主を異にす。故に瑾の使を奉じて蜀に至るや、亮と但だ公會相見るのみ、退いて私に面することなし。

曹操漢中を取

この秋七月、曹操、張魯を撃つて、陽平(陝西漢中府沔縣西北)に至る。魯、降らむと欲す。その弟衛、肯ぜず。衆を率ゐ、關を拒いて堅守す。操、之を攻むれども、抜く能はず。軍を引いて還らむと欲す。會、前軍、夜迷誤して、張衛の別營に入り、營中大に驚いて退散す。操、兵を進めて、之を攻む。衛等、夜遁れ、魯の衆、巴中に潰奔す。操、南鄭に入り、人をして、魯を慰諭せしめ、漢甯を復して、漢中と爲し、夏侯淵、張郃を留め、之を守らしめて還る。主簿司馬懿、操に言つて曰く、劉備、詐力を以て劉璋を虜にし、蜀人未だ附がず、而して、遠く江陵を争ふ、この機、失ふべからざるなり。今、漢中に克ち、益州震動す。兵を進めて、之に臨まば、勢必ず瓦解せむ。聖人時に違ふ能はず。亦た時を失ふべからざるなり。と、操曰く、人は足るなきに苦しむ。すてに關を得て復た蜀を望むか、



と、遂に還る。この冬、張魯巴中より餘衆を將ゐて降る。操乃ち魯を鎮南將軍に拜し、關中侯に封ず。

### 第四十九章 漢室の滅亡

曹操すでに漢中を取つて、蜀に及ばず、かくの如く兵を用ひ敵を殲すを欲せざりしもの、その志専ら中に在ればなり。これより先、許に都してより以來、獻帝たゞ拱手して位を守るのみ、左右侍御、曹氏の人に非ざるはなし。議郎趙憲、帝の爲に言を陳し、時に操の惡を策す。操、惡んで之を殺す。操、後事を以て入つて殿中に見ゆ。帝その懼に任へず、因つて曰く、君若し能く相輔くれば、厚くせよ。然らざれば、恩を垂れて相捨てよ。と。操色を失ひ、自後復た朝請せず。董承の女、貴人たり。操、承を誅し、貴人を求めて之を殺す。帝、貴人の姓あるを以て請となせしも得ず。伏后懼れ、父完に書を與へ、密かに之を圖らしむ。その謀、泄る。操、人をして節を持し、皇后の璽綬を策收し、宮に入つて后を收む。帝、外殿に在り、后、髮を被り、徒跣して、行々泣いて過ぎ、訣して曰く、復た相活くる能はざるか。帝曰く、我亦た命の何の日に在るを知らず。

伏后の死

遂に后を將ゐて、暴室に下して幽死し、生むところの二皇子、皆之を醜殺し、兄弟及び家族死するもの百餘人。事は張魯を伐つ前一年に在り、次いで、操の女を以て皇后となす。

曹操の驕恣

建安二十一年夏四月、操自ら爵を進めて魏王となり、その翌二十二年、自ら呉を撃ち、その降を納れて歸るや、天子の車服を用ひ、出入に警驛し、冕十二旒、金根車に乗じ、六馬に駕し、五時副車を設く。冬十月、子丕を以て、王太子となす。はじめ、操、丁夫人を娶つて、子なく、妾劉氏、子昂を生み、卞氏四子、丕、彰、植、熊を生む。こゝに於て、丁夫人を出し、卞氏を立て、繼室となす。植、性機警、藝能多く、才藻敏贍、操之を愛す。操、女を以て丁儀に妻はむと欲す。丕、儀の目眇なるを以て、之を止む。儀、是に由つて丕を怨み、遂に弟、廣及び楊修と、數ば植の才を稱し、操に勧め、立て、嗣となさしむ。他日、操人を屏けて、賈詡に問ふ。詡答へず。やゝ久うして曰く、袁本初、劉景升父子を思ふのみと、操大に笑ふ。植、すでに性に任じて行ひ、自ら雕飾せず、丕之を御するに、術を以てし、情を矯めて、自ら飾り、宮人左右、並に之が爲に稱説す。故に遂に定めて太子となす。之に久うして、植、車に乗じて馳道中を行き、司馬門を開いて出づ。操、大に怒

劉備漢中を併す

り、公車坐死せしむ。是に由つて、諸侯の科を重じ、而して、植の寵日に衰ふ。張魯の巴中に走らむとするや、劉備、黃權をして之を迎へしむ。魯、すてに操に降つて及ばず。操、張郃をして、三巴を徇へしむ。巴西太守張飛、郃を撃つて、大に之を破り、郃走つて南鄭に還る。こゝに於て、法正、備に説いて、兵を進めしむ。備、乃ち其言に従ひ、張飛、馬超、吳蘭等をして、下辨、甘肅、階州、成縣に屯せしむ。操、曹洪を遣して、之を拒ぎ、洪、吳蘭を斬る。その翌二十三年、操、備を討たむとして、自ら長安に至る。夏侯淵、張魯の故地漢中を守る。戰數ば勝つと雖も、智畧に乏しく、操かつて之を戒む。こゝに及び、備と相距ぐこと、年を踰ゆ。備、陽平より南して、沔水を渡り、山に緣つて、前營を定軍山、漢中府沔縣東北にすしむ。淵、兵を引いて、之を争ふ。備、討虜將軍黃忠をして、高に乗じて、鼓噪し、之を攻めしむ。淵の軍、大に敗れ、遂に之を斬る。こゝに於て、操、長安より斜谷に出て、遮要に軍し、以て漢中に臨む。備曰く、曹公來ると雖も、能く爲すなきなり、我必ず漢川を有せむと。乃ち衆を斂めて、險を拒ぎ、終に鋒を交へず。操、米を北山の下に運ぶ。黃忠兵を引いて、之を取らむと欲す。期を過ぎて、還らず。趙雲、數十騎を將る。營を出て、之を視る。操、兵を揚げて、大に出づるに値ひ、雲、遂に前ん

て其陣を突き、且つ鬪ひ、且つ却く、魏兵散じて、復た會す。追うて、營下に至る。雲、營に入つて門を開き、旗を偃せて鼓を息む。魏兵雲の伏あるを疑ひ、引いて去る。雲、勁弩を以て、魏兵を射る。魏兵驚駭、自ら相蹂躪し、水に墮ちて、死するもの、甚だ衆し。相守ること積月、魏軍の士、多く亡ぐ。五月、操、兵を引いて、長安に還り、備、遂に漢中を有す。その九月、壇場を沔陽に設け、兵を陳し、衆を列し、群臣陪位、奏して備を以て漢中王となす。讀み訖つて、備、璽綬を拜受し、王冠を御し、子禪を立て、王太子となし、還つて成都に治し、許靖を以て太傅となし、法正を尙書令となし、關羽、張飛、馬超、黃忠をして、皆位を進めしむること差あり。

關羽の戦功

備、さきに孫權と荆州を分ち、關羽之を守る。羽、糜芳をして、江陵を守らしめ、傅士仁をして、公安を守らしめ、自ら衆を率ゐて、曹仁を樊に攻む。仁、于禁、龐德等をして、樊の北に屯せしむ。八月、大に霖雨、漢水平地に溢ること數丈。禁等屯軍皆歿す。諸將高に登つて水を避く。羽、大船に乗じ、就いて之を攻む。禁、窮迫して遂に降る。龐德力戦し、又羽の獲るところとなる。羽、之を殺し、急に樊城を攻む。城多く崩壊し、沒せざ

るもの數版、羽船に乗じて、城に臨み、外内斷絶す。羽、又別將をして、襄陽を圍ましむ。刺史胡修、太守傅方、皆降る。

關羽の敗死

關羽の威、華夏に震ひ、許より以南、徃往遙に應ず。曹操、許都を徙して、其銳を避け、ひを議す。司馬懿、蔣濟曰く、關羽志を得、孫權必ず歡はざるなり、人を遣し、權に勸め、其後を躡み、江南を割き、以て權を封ずるを許せば、樊の圍、自ら解けむ、と。操之に従ふ。はじめ、魯肅、操尙ほ存するを以て、權に勸めて、關羽を撫輯し、之と仇を同うせしむ。呂蒙、肅に代ふるに及び、羽が驍勇にして、兼并の志あるを以て、權に勸めて、羽を取らしむ。權之を善とす。權、かつて、其子の爲に婚を羽に求む。羽、その使を罵つて許さず。權是に由つて怒る。こゝに至り、蒙上書して曰く、羽、樊を討つて、多く備兵を留む。必ず蒙が其後を圖るを恐るゝが故ならむ。蒙、かつて病あり、乞ふ建業に還り、以て疾を治せむ。羽必ず之を撤し、盡く襄陽に赴かむ。然る後、その空虚を襲へば、羽擒にすべきなり、と。遂に疾篤しと稱す。權、露檄、蒙を召し、すてに至るや、代るべき者を問ふ。蒙、陸遜を薦む。遜、陸口に至り、書を爲つて羽に與へ、其功を稱し、深く自ら謙抑す。羽意大に安じ、稍や兵を撤して、樊に附す。遜、具に啓して、狀を陳ず。權、遂に兵を發

し、蒙をして先づ行き、賤を爲つて、操に與へ、羽を討つを以て自ら效さむを請はしむ。時に徐晃、宛に屯し、曹仁、羽と相持す。操、董昭の計を用ひ、乃ち權の書を驛發し、晃に敕し、弩を以て射つて羽に示さしむ。羽猶豫して去る能はず。操、洛陽より南して仁を救ひ、軍を摩陂(河南汝州郟縣東南)に駐む。晃、羽を攻めて、之を破る。羽、圍を撤して退く。然れども、舟船なほ沔水に據る。呂蒙、尋陽に至り、盡く精兵を艤、艤舟中に伏せ、白衣をして櫓を搖かし、商賈人の服を作さしめ、晝夜兼行す。羽の置くところ江邊の屯候、盡く之を收縛し、糜芳、傅士仁、皆降る。蒙、遂に江陵に入り、羽及び將士の家屬を得、皆之を謹撫す。羽、南郡破れしを聞き、即ち南に走つて還る。而して、士卒皆圍心なく、會ち孫權すてに至る。羽西して麥城(安陸府當陽縣東南)を保ち、因つて遁走し、兵馬解散、纒かに十餘騎のみ。權先に璠璋をして、その徑路を斷たしむ。二十四年十二月、羽、瑋郷(當陽縣東北)に至り、その子平と皆害せらる。こゝに於て孫權、すてに荊州を定め、呂蒙を以て南郡太守となし、陸遜を鎮西將軍となし、皆侯に封じ、遜は夷陵に屯して、峽口(湖北宜昌府東湖縣西北)を守らしめ、復た劉璋を以て、益州の牧となす。未だ幾ならずして卒す。呂蒙また未だ封を受くるに及ばず、疾發して死す。

孫權、すでに荊州の故土を復し、乃ち上書して臣を操に稱し、天命を稱説す。操、以て外に示して曰く、この兒、吾が著爐火上に踞せむと欲するか。と、陳群等曰く、漢祚、すでに終る、適ま今日に非ず、殿下功德巍巍、群生注望、故に孫權遠に在つて臣と稱す、これ天人の應、異氣齊聲、殿下宜しく大位を正すべし、復た何をか疑はむや。と、操曰く、若し天命吾に在らば、吾は周の文王とならむ。と。

曹操の死

その翌建安二十五年正月、曹操北に還り、洛陽に至つて卒す。太子丕、鄴に在り、凶問至る。群臣以爲へらく、太子の即位、當に詔命を俟つべし。と、尙書陳矯曰く、王、外に薨じ、愛子側に在り、彼此變を生ずれば、社稷危からむ。と、乃ち官を具し、禮を備へ、一夕にして辨じ、明旦王后の令を以て、太子に策して、王位に即かしむ。帝、又御史大夫華歆をして、詔して、丞相の印綬、魏王の璽綬を授け、冀州牧を領せしむ。次いで、陳群の言に因り、九品官人の法を立て、皆中正を置き、識鑒あるものを擇て、之が爲に人物を區別し、その高下を第せしむ。

その冬十月、左中郎將李伏、太史許芝言ふ、魏當に漢に代るべし、圖緯に見ゆ。と、そ

漢魏の交替

の言に曰く、故の白馬令李雲、上書す、許昌の氣、當塗高に見ゆ。と、當塗高は魏なり、魏に象るものは、兩觀闕、是れなり。道に當つて高大なるは、魏、魏當に漢に代るべく、基許に昌ふ、故に雲の言の如きなり。と、魏の群臣、因つて表して、丕に篡位を勸む。時に丕、方に誰に如いて還る。帝、高廟に告祠し、使を遣し、節を持し、璽綬詔冊を奉じ、位を魏に禪る。魏王丕、上書して三たび讓る。乃ち壇を繁陽、河南許州臨潁縣に爲り、升つて璽綬を受け、皇帝の位に即き、元を黃初と改め、漢帝を奉じて、山陽公となし、漢の正朔を行つて、天子の禮樂を用ひしむ。武王、即ち操を追尊して、武皇帝といひ、廟を太祖と號し、王太后を尊んで、皇太后となし、相國を改めて、司徒となし、御史大夫を司空となし、十二月、洛陽に如いて、宮室を營み、次いで、冀州士卒の家を徙して、河南に實たしむ。丕は、即ち文帝なり。東漢は、光武の中興より、こゝに至るまで、十二帝、百九十六年を経たり。

劉備帝位に即

獻帝、すでに位を篡せらる。時に蜀中傳へて言ふ、漢帝、すでに害に遇ふ。と、漢中王劉備、喪を發し、服を制し、謚して孝愍皇帝といふ。群下競うて王に勸め、尊號を稱せしむ。こゝに於て帝位に成都府城の西北武擔山の南に即き、大赦改元し、諸葛亮を

以て丞相となし、許靖を司徒となし、百官を置き、宗廟を立て、高皇帝以下を給奉す、昭烈皇帝是れなり。その國を漢と稱すること、前の如しと雖も、その地、蜀に在るを以て、後世稱して蜀漢といふ。

魏蜀二國すてに帝と稱す、而して、孫權なほ臣を魏に稱し、九錫を加へられ、王を以て、自ら甘んじ、懼りて帝たらざるもの、爾後六年に及べり。

(六) 三國及び西晋

第五十章 三國の形勢とその強弱

魏蜀正閏の辨

漢の高祖、暴秦を倒して、帝位に上りしより、兩漢を合せて四百年、帝室の恩威、人心に入ること深く、加ふるに武帝の隆昌、光武の中興、ともに文教を奨勵し、漢末名節を尊び、清名の士を出せしを以て、教道よく人心を結び、曹操の權を以てして、敢て臣位を去らず、自ら周の文王に擬し、遂に帝を稱するに及ばず、同姓と稱する劉備、丕の漢室に代るを聞き、はじめて大統を繼ぐの名を正うせり。魏蜀の二國、一は篡逆、一は紹繼、正閏の論、晋より以後紛々たり。司馬光の通鑑、史筆に因り、記述を以てし、初より、別に義例を立てず、故に魏を以て年を記す。朱熹の綱目、春秋の義を取り、以て天下萬世の公論を示す。故に蜀の昭烈を以て獻帝の後を承け、漢の遺統を次ぐとなす。二者各理あり、並び行はれて、相悖らざるが如しと雖も、要するに區々の瑣事論ずるに足らず、予の私見を以てすれば、曹操君を無みし、國を奪ひしと雖

も曹丕は親しく獻帝の禪を受け、後代革命の爲に先例を開きしもの、漢より魏に遷りしといふ、何の不可あらむ。劉備は自ら中山靖王の後と稱すと雖も、亂離の世、何ぞ又その眞否を知らむ。魏蜀正閏の論、殆んど審議を値えざるなり。然れども、今便宜に因り、假りに蜀を以て年を紀すことゝなせり。

三國の比較

若し夫れ、その實力に就いて、之を論ずれば、魏の版圖、最も大、今の直隸、山東、山西、河南、陝西、湖北、即ち古しへの三晋、齊、燕、秦、謂ゆる中原必争の地を領し、約三百八十八萬戸と稱す。吳は之に亞いて、安徽、浙江、江西、福建、廣東、湖南、湖北、長江以南、一帯の地を領し、天塹を以て其固となし、錦繡の江山、約五十餘萬戸あり。蜀は、四川、雲南、貴州、陝西に亘りて、三十萬戸に過ぎず。三國の主、出身の位地と建國の順次とに於て、すでに前後上下の別あり、而して、三國の國風、亦た各異なれり。曹操は權術相取し、劉備は至誠相感じ、孫權は意氣相結ぶと稱し、又魏は天の時を得、吳は地の利を得、蜀は人の和を得たりといはる。ともに各地民情の表現なり。蓋し曹操は一代の雄にして、諸葛亮が之を評して、智計殊絶、兵を用ふる孫吳の勢、踞たりと稱せるもの、決して虚稱に非ず、然れども、むしろ、我、人に負くも、人をして我に負かしめざれといひし如く、専ら權畧を以て他の長を使ひしを以て、その人物の徳器節操を顧みるに暇あらず、その麾下の謀士猛將、多くは皆敵軍の人、巧に之を收納せしが、その臣又之を學び、互に猜忌の念を挟むを免れず。加ふるに自然の勢、恩少きを以て、操丕の後、夙に司馬氏弄權の端を發し、曹氏の滅亡は、その前朝と毫も異なるなかりき。劉備、その人、その本心は知らず、少くとも、至誠を以て人を感ずるを主とし、劉琰に忍びず、劉璋を逐ふに躊躇せしが如き、頗る情弊の處あり、故を以て、關張と兄弟の約を結び、同日に死せむことを願ひ、諸葛亮と水魚の如く、幼孤を輔けて、忠亮の節を致さしめ、後に姜維の如き、國破るゝ後、なほ克復の志を抱けり。孫權の意氣、人と結ぶ、而して其政をなす、魏蜀の間に在り、然れども、惜むべきは、一定の國是なく、常に謀臣に頼り、進んで大計をなすに及ばず、唯だ君臣の間、牢固なる、たとひ蜀に及ばざるも、魏の上敷等に在り、故を以て、最も後れて滅びたり。三國の鼎立、之を一言すれば、風土民情を異にする支那三大地域相互の闘争にして、固より避くべからざる自然の趨勢は、始めて實現されしものに外ならず。

蜀帝を伐つ

諸葛亮の三分策ははじめに益州を領し、鼎立の實を擧げ、天險に據つて、割據の基を固くし、然る後大に成すらむとするものにして、荊州の奄有は魏吳と鋒を争ふに便せしものなれども、關羽の敗に因りて、その策殆んど敗れたり、蜀の章武元年、帝、關羽の没せしを耻ぢ、將に孫權を撃たむとす。將軍趙雲、諫めて曰く、國賊は曹操にして、孫權に非ず、若し先づ魏を滅せば、權自ら服せむ、今操すでに斃ると雖も、その子丕、位を篡す、當に衆心に因つて、早く關中を謀り、河渭の上流に居り、以て逆を討つべし、關東の義士、必ず糧を襄み、馬に策し、以て王師を迎へむと、群臣諫むるもの甚だ衆し、帝、皆聽かず、乃ち諸葛亮を留め、太子を輔けて、成都を守らしめ、自ら諸軍を率ゐて、東下す。孫權、使をして、和を求めしむ、許さず、權、遂に陸遜をして、諸軍を督して、拒守せしむ、この時、張飛亦た死す、飛の雄猛、關羽に亞ぐ、羽は善く卒伍を愛し、士大夫に驕れども、飛は君子に愛禮し、軍人を恤まず、帝、常に之を戒むれども、倭めず、こゝに至りて、萬人を率ゐて、江州に會せむとし、發するに臨み、帳下の人、之を殺し、首を以て孫權に走る、帝、すでに二人を失ひ、怨を吳に積むこと、愈よ、深し。

張飛の死

魏帝の敗

翌年、帝、枳歸より進んで、吳を撃たむとす。黃權曰く、水軍流に沿うて進むは易く、退くこと難し、權請ふ、先驅し、以て寇に當らむ、陛下宜しく後鎮となるべしと、帝、從はず、權を以て江北の諸軍を督せしめ、自ら諸將を率ゐ、江南より山に緣り、嶺を截り、夷道、猇亭、荊州府、宜都縣西に軍す、帝復た岷山、湖北、宜昌府、長陽縣西より、武陵に通じ、馬良をして、金錦を以て、五谿の諸蠻夷に賜はしめ、授くるに、官爵を以てす、之に次いで、巫峽、四川、夔州府、巫山縣、東、建平より、營を連ねて、夷陵の界に至るまで、數十屯を立て、正月より、吳と相距ぎ、六月に至りて、決せず、吳將陸遜、將に進んで、漢軍を攻めむとす、諸將曰く、攻むるは、當に初に在るべく、今、諸要害、皆すでに固守す、之を撃つ、必ず利なからむ、遜曰く、彼事を更むること多く、その軍、始めて集るや、思慮精專、未だ于かすべからず、今住つて、すでに久しく、我が便を得ず、兵疲れて、意沮み、計復た生ぜず、その軍を犄角する、正に今日に在り、乃ち先づ一營を收むれば、利あらず、吾すでに之を破るの術を曉れり、と、乃ち令して、各一把の茅を持せしめ、火を以て攻めて、之を抜き、遂に諸軍を率ゐて、同時に俱に攻めて、四十餘營を破る、帝、馬鞍山(宜昌府、東湖縣西北)に居り、兵を陳して、自ら繞る、遜兵を促して、四面より

之を蹙し、土崩瓦解、死するもの萬數、帝、散兵を收め、船を棄て、步道より白帝に還り、舟械軍資、略ぼ盡く、帝、大に慙悲して曰く、吾乃ち陸遜の折辱するところとなる、豈に天に非ずや、と、將軍傅彤、從事祭酒程畿等、皆之に死す。

昭烈の殂落

帝、成都に歸らず、白帝の永安宮に在り、その翌年四月、疾篤し、諸葛亮、成都より至る、帝、亮に命じ、太子禪を輔けしめ、尙書令李嚴を以て、副となす、帝、亮に謂つて曰く、君の才、曹丞に十倍す、必ず能く國を安んじ、終に大事を定めむ、嗣子輔くべむば、之を輔けよ、もし不可なれば、君自ら取るべし、と、亮、涕泣して曰く、臣、敢て股肱の力を盡し、忠貞の節を効し、之に繼ぐに、死を以てせざらむや、と、帝、又詔して、禪に敕して曰く、惡の小なるを以て之を爲すこと勿れ、善の小なるを以て、爲さざる勿れ、惟だ賢、惟だ德、以て人を服すべし、汝の父德薄く、効ふに足らざるなり、汝、丞相と事に從ひ、之に事ふること、父の如くせよ、と、遂に崩す、亮、喪を奉じて、成都に還る、太子禪、年十七にして即位す、是を帝禪となす、大赦して、元を建興と改め、亮を封じて、武郷侯となし、益州牧を領せしめ、政事咸な決を取る。

魏吳相戦ふ

その前年、魏の文帝、使を遣して、吳の任子至らざるを責め、遂に將軍曹休等に命じ、洞口より出てしめ、曹仁は濡須より出て、曹真等、南郡を圍む、吳、將軍呂範をして、舟師を以て、休を拒がしめ、諸葛瑾等、南郡を救ひ、朱桓、仁を拒ぐ、時に揚越の蠻夷、服せず、内難、弭まざるを以て、辭を卑うして、上書し、自ら改厲し、子登の爲に、婚を求めむことを乞ふ、丕、聽かず、こゝに於て、權、元を黃武と改め、江に臨んで拒守す、丕、許昌より南して、之を伐つ。

曹休、洞口に在り、會ま暴風吹き、呂範の船、纜悉く斷つ、魏軍之に乗じ、頗る斬獲あり、すてにして、吳の救船至り、魏軍敗れ還る、曹仁、歩騎數萬を以て、濡須に向ふ、吳督朱桓、兵纔に五千人、乃ち旗鼓を偃せ、弱を示して、之を誘ふ、仁、その子をして、濡須を攻めしめ、常雕、王雙等を分遣して、桓の部曲妻子の在るところ、中洲を襲はしむ、桓、別將をして、雕等を撃たしめ、自ら泰を拒いて、之を却け、遂に雕を斬り、雙を生虜す、この時、朱然方に、江陵に鎮し、曹真、夏侯尚等、之を圍む、諸葛瑾、之を救はむとして、得ず、城中の兵、腫病多し、眞等、土山を起し、地道を鑿ち、弓矢、雨注、將士皆色を失ふ、然れども、恐るゝ意なく、方に兵を勵して、隙を伺ひ、魏の兩屯を攻破す、魏軍之を圍む



吳蜀相通す

こと六月にして、克つ能はず。會々大疫あり、丕悉く諸軍を召して、洛陽に還る。蜀の昭烈、すでに崩す。尙書鄧芝、丞相亮に言ひ、自ら使となつて、吳に赴き、之を和せむとす。時に吳王孫權、なほ未だ全く魏と絶たず。芝特に見るを請ひ、因つて説いて曰く、大王は命世の英雄、葛亮は一時の傑蜀に重險あり、吳に三江あり、ともに唇齒たり、進んで天下を兼并すべし、退いて鼎定して立つべし。今若し質を魏に委すれば、魏必ず大王の入朝、太子の入侍を望まむ。若し命に従はざれば、辭を奉じて叛を伐たむ。蜀も亦た流に順ひ、可を見て進まむ。かくの如くすれば、江南の地、復た大王の有に非ざるなり。と權默然良や久うして曰く、君の言是なり。と遂に魏を絶ち、専ら漢と連和す。之に因つて、その翌建興二年、魏帝丕、大に軍を興して、吳を伐ち、龍舟に御し、蔡邕に循ひ、淮に浮び、壽春に如き、廣陵に至る。時に江水盛長、丕臨望して嘆じて曰く、魏武騎千群ありと雖も、之を用ふるところなし。未だ圖るべからざるなり。と會々暴風至り、龍舟幾ど覆る。こゝに於て遂に師を旋へす。その翌年、又舟師を以て、譙より渦に循ひ、譙に入り、十月廣陵の故城に如き、江に臨んで、兵を觀る。戎卒十餘萬、旌旗數百里、渡江の志あり。吳人兵を殿にして、固守す。時に大に寒くして

文帝の祖落

冰り、舟、江に入るを得ず。丕波濤の洶湧を見、歎じて曰く、嗟乎、天固より南北を限る所以なり。と遂に歸り、その翌年夏五月終に崩す。平原王叡、太子となり、繼いで立つ。是を明帝となす。叡の母、誅せらる。文帝かつて叡と出で、獵し、子母の鹿を見、すでに其母を射、叡をして其子を射せしむ。叡泣いて曰く、陛下すでに其母を殺す、臣、其子を殺すに忍びず。と帝惻然たり。是に及びて、嗣となりて即位す。中郎將曹真、鎮軍陳群、撫群司馬懿、並に遺詔を受けて、政を輔く。

### 第五十一章 諸葛亮の出師

孟獲の降降

これより先、蜀は昭烈崩後、益州郡の耆帥雍闓、太守を殺して、吳に付き、永昌太守となり。又郡人孟獲を誘ひ、諸夷を誘扇せしめ、牂牁、越嶲、皆叛く。亮新に大喪に遭ひしを以て、撫して討たず。農を務め、穀を殖し、關を閉ぢ、民を息め、人安じ、食足つて後、之を用ひむとす。建興三年に至り、亮遂に自ら師を率ゐて、雍闓を討ち、南中に至り、所在戰捷、越嶲より入つて、雍闓等を斬る。孟獲固より夷漢の服するところたり、餘衆を收めて、亮を拒ぐ。亮、生きながら之を致し、營陳の間を觀せしむ。獲曰く、さきに

虚實を知らず、故に敗る。今祗だ此の如くなれば、勝ち易きのみと、乃ち縦つて、更に戦はしめ、七縱七禽、而して亮なほ獲を遣る。獲止つて去らずして、曰く、公は天威なり、南人復た反せずと、遂に滇池(雲南府晋寧州)に入り、益州永昌將軻越嶲の四郡、皆平ぐ、亮、その渠率に即いて、之を用ふ。こゝに於て、悉くその俊傑を收め、孟獲等、皆官屬となし、その金銀丹漆耕牛戰馬を出し、以て軍用の資に供せしめ、亮の世を終るまで、夷復た反せず。

賈詡の北伐

その後、兵を治め力を養ふこと二年、蜀の建興五年三月に至り、丞相亮自ら諸軍を率ゐて、北漢中に駐り、長史張裔、參軍蔣琬をして府事を統習せしむ。發するに臨んで、上疏す、謂ゆる前出師表、是れなり。亮、沔北陽平の石馬に屯す、魏帝叡、之を聞いて、大に兵を發して迎へ撃たむとせしが、孫資の諫に従つて止む。はじめ、魏夏侯楙を以て、關中に都督たらしむ。蜀の司馬魏延、計を獻じて曰く、楙は主の婿、佞にして謀なし、今延に精兵五千、食糧五千を假さば、直に褒中より出て、秦嶺に循ひ、東子午(谷名)一陝、西安府城南より漢中府洋縣東北に當つて北し、十日に過ぎずして、長安に至るべく、楙、延が奄至せしを聞かば、必ず城を棄て、走

街亭の敗

らむ、東方の合聚する比、尙ほ二十許日、而して、公、斜谷より來らば、亦た以て達するに足る、かくの如くすれば、一舉して、咸陽以西、定むべしと、亮、之を以て危計となして用ひず。聲を揚げて、斜谷を出て、郿を取らむとし、將軍趙雲、鄧芝をして疑軍を爲つて、箕谷(漢中府褒城北)に據らしむ。魏、曹真をして諸軍を督し、郿に軍し、以て之を拒ぐ。亮乃ち大軍を率ゐて、祁山を出て、戎陳整齊、號令明肅、はじめ、魏、昭烈すてに崩ぜしを以て、數歳寂然として、聞くなく、これを以て、略ほ豫備なし、而して、卒かに亮出づるを聞き、朝野恐懼す。こゝに於て、天水、南安、安定、皆軍を擧げて、亮に應じ、關中響震す。魏帝叡、長安に如き、右將軍張郃、步騎五萬を率ゐて、亮を拒ぐ。亮、參軍馬謖をして、諸軍を督し、郿と街亭、甘肅、秦州、秦安縣東北に戦はしむ。謖、亮の節度に違ひ、水を含て、山に上る。郃、その汲道を絶ち、撃つて、大に之を破る。亮乃ち西縣の千餘家を抜いて、漢中に還り、罪を論じて、馬謖を斬り、自ら臨んで祭り、之が爲に涕を流し、その遺孤を撫す。亮、上疏して、自ら三等を貶す、詔して、右將軍を以て、丞相の事を行はしむ。趙雲、亦た箕谷の兵敗れしを以て、坐して貶せらる。亮、こゝに於て、微勞を考へ、壯烈を甄し、咎を引いて、躬を責め、失ふところを境内に布き、兵

吳魏を破る

を屬まし武を講じ、以て後圖を爲し、戎士簡練、民その敗を忘る。これより先、亮、祁山を出づるや、天水の姜維、亮に詣つて降る。亮その膽智を美し、軍事を典らしむ。蜀軍の敗と前後して、吳は鄱陽太守周魴をして、詐つて郡を以て魏に降らしむ。魏の楊州牧曹休、步騎十萬を率ゐ、皖に向つて、之に應じ、司馬懿、江陵に向ひ、賈逵、東關に向ひ、三道ともに進む。八月、吳主權、皖に至り、陸遜を以て大都督となし、朱桓、全琮を以て左右の督となし、各三萬を督せしめ、以て休を撃ち、石亭、江南安慶府潛山縣東北に戦ひ、之を走らしめ、追うて夾石に至り、斬獲萬餘、資仗略ぼ盡く。

蜀魏の交戦

この年十二月、右將軍亮、曹休敗れ、魏兵東下し、關中虛弱なるを聞き、兵を出して、魏を撃たむと欲す。群臣多く以て疑となす。亮乃ち又表を上り、遂に兵數萬を引いて、散關、陝西鳳翔府寶雞縣西南より出て、陳倉を圍みしが、克たず、糧盡きて引いて去る。魏の將軍王雙、之を追ふ。亮撃つて之を斬る。その翌年、春、又出て武都陰平を抜き、功を以て復た丞相に拜せらる。その翌、建興八年七月、魏の曹真、漢人數ば出づるを以て、請うて斜谷より之を伐たむとし、魏帝又司馬懿に詔し、漢水を渡り、西城、陝

南城の捷

西興安府治より、眞と漢中に會せしむ。帝、群議に従ひ、子午の道より遂に行かしむ。丞相亮、魏兵至るを聞き、成固、赤坂、漢中府洋縣龍亭山東に次して之を待ち、李嚴をして、二萬人に將として、漢中に赴かしむ。會ま、天大に雨ふること三十餘日、棧道斷絶せしを以て、魏兵引いて去る。その翌、九年二月、亮、蔣琬を以て長史となし、内に在つて、兵食を供給せしめ、自ら進んで魏を伐ち、祁山を圍む。魏、司馬懿をして、長安に屯し、將軍張郃、郭淮等を督して、漢を禦がしむ。亮、兵を分つて、祁山を攻め、自ら懿と上邽の東に逆ふ。魏將郭淮等、亮を徹む。亮之を破り、因て大に其麥を奪り、遂に懿と遇ふ。懿軍を斂め、險に依り、兵交るを得ず。亮、引いて還る。懿その後を躡み、南城に至り、又山に依り、營を守り、背て戰はず。諸將戰を勸む。賈詡等曰く、公、蜀を畏る虎の如し、天下の笑を奈かむと。乃ち張郃をして、南園を攻めしめ、自ら中道を按じて、亮に向ふ。亮、魏延等をして、逆へ戰はしめ、魏兵大に敗る。懿還つて、營を保つ。亮、糧盡くるを以て、軍を退く。懿、郃をして、之を追はしめ、木門に至り、亮と戰ふ。漢兵高に乗じて、弩を伏せ、郃、飛矢に中つて死す。

これより先、建興七年、吳王權自ら帝と稱し、なほ蜀と結び、天下を中分するを約せしに因り、この冬十月、中郎將孫布をして、詐つて魏に降り、揚州刺史王淩を誘ひ、兵を阜陵、江南、潯州、全椒縣に伏せて、之を待つ。淩、兵を請へども得ず、乃ち一督をして、歩騎七百を將ゐて之を迎へしむ。布、夜掩撃して、之を敗る。その翌年、吳帝權、兵を出して、新城を圍まむとして、その水に遠きを以て、二十餘日を積んで、敢て兵を下さず。魏の征東將軍滿寵、歩騎六千をして、肥水の隱處に伏せしめ、權の岸に上るを候し、撃つて之を敗る。

吳蜀相通じ、魏を伐てども利あらず。建興十二年、魏の山陽公崩じ、漢孝獻皇帝を諡されし前一月、蜀の丞相亮、又魏を討つ。はじめ、亮、農を勸め、武を講じ、木牛、流馬を作り、米を運びて、斜谷に積み、邸閣を治し、民を息め、士を休むこと三年にして、後之を用ふ。こゝに於て、衆十萬を悉し、斜谷より魏を伐ち、使を遣して、吳に約し、同時に大舉せしむ。

亮、進んで、郿に至り、渭水の南に軍す。司馬懿、軍を引いて、渭を渡り、水を背にして、壘を爲り、以て之を拒ぐ。諸將に謂つて曰く、亮、もし武功に出で、山に依つて、東すれば、

五丈原の陣

ば、誠に憂ふべしと爲す。若し西、五丈原、鳳翔府郿縣西南に上らば、諸將事なからむと。亮果して五丈原に軍す。郭淮曰く、亮、もし渭に跨り、原に登り、兵を北山に連ね、關道を隔絶し、民夷を搖蕩すれば、國の利に非ずと。懿、乃ち淮をして、先づ北原に據らしむ。壘、壘未だ成らず。漢兵大に至る。淮、逆へ撃つて、之を卻く。亮、前に數ば出て、皆運糧糈かず、己の志を伸ばすを得ざりしを以て、乃ち兵を分つて屯田し、久駐の基をなし、耕者は渭濱居民の間に雜る、而かも、百姓安堵、軍に私なし。

吳帝權、約に違ひ、之と前後して、兵を起し、居巢湖口に入り、又合肥の新城に向ひ、衆十萬と號す。又別に陸遜、諸葛瑾を遣し、江夏沔口に入つて、襄陽に向はしめ、孫韶、張承をして、淮に入つて、廣陵、淮陰に向はしむ。魏帝、叡諸將をして、堅守せしめ、次いで自ら將として、往いて之を攻めむとす。時に、漢軍方に武功を出づ。吳人謂へらく、魏主必ず遠く出づる能はずと。叡、乃ち秦朗をして、歩騎二萬を督して、司馬懿を助けて、漢を拒がしめ、七月、自ら水軍を率ゐ、龍舟に御して、東す。征東將軍滿寵、壯士を募つて、吳の攻具を焚かしむ。吳の吏士、多く病み、又魏主の自ら至りしを聞き、遂に退き、吳蜀合従の計、遂に合せず、將に功なくして止まむとす。

吳蜀合従の計

この時亮は五丈原の營に在り、數ば戰を挑めども、司馬懿將士を戒めて、遂に出でず。乃ち遺るに、巾幗婦人の服を以てす。懿怒つて上表し、戰を請ふ。魏帝、衛尉辛毗をして節に杖いて、軍師となし、以て之を制せしむ。姜維、亮に謂つて曰く、賊復た出でず。亮曰く、彼本と戰ふの情なし、固く請ふ所以のものは、以て武を兼に示さむとするのみ。將軍に在るや、君命も受けざるころあり、苟くも能く吾を制せむか。豈に千里にして戰を請はむや。と。亮、使者をして、懿の軍に至らしむ。懿、その寢食及び事の繁簡を問うて、戎事に及ばず。使者曰く、諸葛公、夙に興き、夜は寐ね、罰二十以上、皆親ら覽る。噉食するところは、數升に至らず。と。懿人に告げて曰く、孔明食少く事繁し、其れ能く久しからむや。と。次いて亮の病、果して篤し。帝、僕射李福をして省視せしめ、因つて大計を諮ひ、亮と語り、すでに別れて去る。數日、復た還る。亮曰く、孤君の還る意を知る。公の問ふところは、公琰、其れ宜し。と。公琰は蔣琬の字なり。福前に實に失うて、公百年の後、誰か大事を任ずべきものを諮請せざりしが故に、茲に還れりといひ。又その次を請ふ。亮曰く、文偉、可なり。と。文偉は費禕の字なり。又問ふ。亮答へず。大星あり、赤くして芒あり。亮の營中に墜つ。八月終に薨す。亮、人と爲り、忠

亮の節あり、誠心を開き、公道を布き、刑政峻と雖も、怨むものなく、誠治の良才に加ふるに、用兵の術に長じ、自ら稱するところ、管仲、樂毅の流亞たるに負かず。唯だ時勢は天意に在り、一人の力を以て容易に動かし難く、遂に漢室を興復する能はず。出師未だ捷かず、身先づ死せしと雖も、その偉材たるに於て、毫も輕重するところあらず。その後、幾もなくして三國の形勢、忽ち一變せしを見れば、その生死、時局に關すること、固より大なり。

亮、すでに卒す。長史楊儀、軍を整へて出づ。百姓奔つて懿に告ぐ。懿、之を追ふ。姜維、儀をして、旗を反し、鼓を鳴し、將に向はむとする如くせしむ。懿、敢て通らず。こゝに於て、儀、陳を結んで去り、谷に入り、然る後に、喪を發す。百姓之が諺を爲つて曰く、死者諸葛、生ける仲達を走らす。と。懿、之を聞いて、笑つて曰く、吾能く生を料るも、死を料る能はざるが故なり。と。亮かつて、兵法を推演して、八陣圖を作る。こゝに至り、懿、その營壘を案行し、嘆じて曰く、天下の奇才なり。と。追うて、赤崖、漢中府褒城縣北に至つて還る。

はじめ、前軍師魏延、勇猛人に過ぎ、善く士卒を養ひ、毎に兵萬人を請ひ、亮と道を異にして、潼關に會し、韓信の故事の如くせむと欲す。亮許さず、延常に謂ふ、亮怯にして、盡く己の才を用ふる能はずと、楊儀人となり、幹敏、亮軍を行る毎に、儀、分部を規畫し、糧穀を籌度し、咸な辨を取る。延の性、矜高、當時皆之に下る、惟だ儀、假借せず。延、以て至忿となす、亮深く二人の才を惜み、偏廢する能はず、亮の病篤きに及び、退軍の節度を作り、延をして後を斷たしめ、姜維之に次ぐ。延或は從はず、即ち自ら發す。亮の薨ずるや、儀、費禕をして、往いて延の意を揣らしむ。延曰く、丞相亡ぶと雖も、吾自ら是に在り、府親官屬、便ち喪を將ゐて、還り葬るべく、吾自ら當に諸軍を率ゐて、賊を撃つべし、何ぞ一人の事を以て天下の事を廢せむや。且つ魏延何ぞ當に楊儀の爲に斷後の將となるべきかと、儀、乃ち亮の成規を案じ、引いて還らしむ。延、果して大に怒り、儀を擲して、未だ發せず、領するところを率ゐて、先づ歸り、閣道を燒絶す。延、儀、各他の叛逆を表し、一日の中、羽檄交も至る。董允、蔣琬、咸な儀を保して、延を疑ふ。儀等、山に槎して、道を通じ、晝夜兼行、亦た延の後に繼ぐ。延、南谷に據り、儀等を逆へ撃つ。將軍何平、前に於て延を禦ぎ、その先登を叱して曰く、公亡び、身尙ほ未

だ寒からず、汝が輩、何ぞ敢て乃ち爾ると。士卒曲の延に在るを知り、皆散ず。延、逃れて漢中に奔る。儀、將を遣して之を斬らしめ、その三族を夷す。はじめ、延、儀等を殺さむと欲し、時論己を以て諸葛に代らしめ、政を輔けむことを冀ふが故に、北魏に降らず、南儀を撃ち、實に反意なし。こゝに於て、事乃ち平ぐを得たり。

すてにして、諸軍成都に還る。帝、亮に印綬を策贈し、諡して忠武といふ。はじめ、亮、帝に表して曰く、臣、成都に桑八百株、薄田十五頃あり、子弟衣食、自ら餘饒あり、別に生を治め、以て尺寸を長ぜず。臣、死するの日、内に餘帛あり、外に餘財あり、以て陛下に負かしめずと、卒に其言の如し。長水校尉廖立、自ら才名を負ひ、亮の副たるべしとなし、怏怏怨謗せしに由り、亮之を廢して、民となし、汝山に徒す。亮の薨するや、立泣を垂れて曰く、吾終に左袒となると。李平、又かつて罪を以て斥けられ、常に復た收められて自ら補はむことを冀ふ、こゝに至り、後人能はざるを思ひ、遂に疾を發して死す。

時に、新に元帥を喪ひ、遠近危悚す。蔣琬尙書令となり、國事を總統し、吳懿、車騎將軍となり、漢中を督す。琬、抜かれて群僚の右に處り、すてに威容なく、又喜色なく、神

守畢止平日の如きあり、是に由つて衆望漸く服す。次いで、楊儀罪あるを以て廢せられて、漢嘉に徙り、幾もなくして自殺す。

### 第五十二章 司馬氏の纂政

魏國の文物

三國の時、紛争殊に甚しく、軍旅に暇なきを以て、治政文物、觀るべきものあらず。蜀の如きは、漢室の興復を主とし、諸葛亮の治方を以てして、未だ文教を獎勵するに及ばず。唯だ魏は大國にして、他に比して觀るべき多し。武帝は、文彩風流、一世に朝映し、戎馬の間に在ること三十年、手に書を釋かず、赤壁の舟中、槩を横へて詩を賦し、雅懷頗る欽すべきものあり。建安八年、郡國に令して、學校を建てしむ。故を以て鄴都の文物、一時の盛を極め、孔融、陳琳、王粲、徐幹、阮瑀、應瑒、劉楨の徒、相並んで盛名を擅にし、鄴下七子の目あり。その詩を建安體といふ。武帝の子文帝、文學を好み、自ら著作するところあり。その弟陳思、王植の如きは、八斗の才と稱せらる。文帝の世、貢士限年の法を除き、郡國選ぶところ、老幼に拘るなく、儒は經史に通じ、吏は文法に達せば、皆試用するに、到る次いで、また詔して曰く、婦人政に與るは亂の本な

り。今より以後、群臣事を太后に奏するを得ず、公族の家、政を輔け、及び第士を受くるを得ず。後世背違するものは、天下とともに之を誅せよ、と。これ疑もなく、漢室外戚の專恣、その根源をなせしに、鑒みしものなり。次いで、初平以來、學道廢墜せしを以て、こゝに至つて、大學を立て、博士を置き、漢制に依つて、五經課試の法を設く。明帝、文學を好み、大に經術を獎勵し、心を訟獄に用ひ、平望觀を改めて、聽訟觀となし、大事を斷ずる毎に、觀に詣つて之を臨聽し、次いで、尙書衛覬の言に因り、律博士を置き、司空陳群等に詔し、漢法を刪約して、新律十八篇、州郡令四十五篇、尙書官令軍中令百八十餘篇を作り、又諸王及び宗室公侯をして、各適子一人を以て、明年正月に朝するの制を擧め、許昌宮を作り、洛陽宮を治め、昭陽太極殿を起し、總章觀を築き、三祖の廟を制して、萬世不毀となし、洛陽の南、委粟山に營して、園丘を作り、皇皇帝を祀り、曹氏の世系、有虞より出づといふを以て、虞舜を以て之に配し、皇皇后地を北郊方丘に祭り、舜の妃伊氏を以て配し、天地を祀り、武帝及び其后を以て配せり。之に次いで、長安の鐘虞、橐駝、銅人、承露盤を洛陽に徙す。盤、拆けて、聲數十里に聞こゆ。銅人、重くして、致すべからず、霸城に留め、大に銅を發し、銅人二を鑄り、號して

翁仲といひ、司馬門外に列坐せしめ、又黃龍鳳凰を鑄つて、内殿の前に置き、土山を芳林園に起し、公卿をして、皆土を負はしめ、雜木善草を樹ふ、禽獸を捕へて、其中に致さしむ。又吏部尚書盧毓の言を納れ、散騎常侍劉劭をして、都官考課法七十二條を作り、百官に下して、議せしめしが、之に久うして、事行はれず、魏の一國之を内にして、典章、頗る觀るべきものあり、之を外にして、征伐、又その功をなせり。

はじめ、公孫度、董卓の爲に擧げられて、遼東太守となり、東、高句麗を伐ち、西、烏桓を撃ち、自ら平州牧と爲し、子康に傳ふ。康、漢末の亂に當り、遼東の地を守り、兵戈を受けず、獨立して、其土を管せり。すてにして、康、卒し、子晃、淵皆幼、衆その弟恭を立つ。之に久うして、恭病み、淵遂に其位を奪ふ。魏、淵を拜して、揚烈將軍、遼東太守となす。淵、陰に疑惑を懷き、南、吳と通ず。蜀の建興十年、吳帝權、周賀等をして、海に乗じて、遼東に之かきしめ、その翌年、淵、使をして表を奉じて、吳に臣を稱せしむ。權大に悦び、張彌、許晏等をして、兵萬人を將ふ。金寶珍貨九錫を以て物を備へ、海に乗じ、淵に授け、封じて、燕王となす。吳の諸臣、淵の未だ信ずべからざるを言ひ、之を諫むれども、聽かず。吳使、遼東に至る。淵、吳遠くして、恃み難きを知り、乃ち張彌等を斬り、その首を

公孫氏の反覆

魏に傳送す。魏、淵を拜して、大司馬となし、樂浪公に封ず。吳帝權、大に怒り、自ら之を征せむとせしも、陸遜の諫に因つて止む。

後數年、蜀の延熙元年に至り、淵遂に兵を發し、魏將母邱儉を遼隧(奉天府海城縣)に迎へて、之を破り、自立して、燕王となり、元を改め、漢に紹いて、百官を置き、鮮卑を誘ひ、以て北方を擾さしむ。こゝに至り、魏帝叡、司馬懿を長安に召し、兵四萬を將ゐて、遼東を撃たしむ。淵、之を聞き、復た使を遣し、臣を稱し、救を吳に求む。吳帝權、兵を勒し、其使に謂つて曰く、請ふ、後問を俟つて、當に簡書に従ふべし、と。

公孫氏の滅亡

その六月、司馬懿の軍、遼東に至る。淵、その將、卑衍等をして、步騎數萬を率ゐて、遼隧に屯し、壘を圍むこと二十餘里。懿、乃ち多く旗幟を張り、その南に出で、むと欲す。衍等、銳を盡して、之に趣く。懿、潛かに水を濟つて、其北に出で、直に襄平に趣き、途に衍等を敗り、遂に之を圍む。秋、大霖、遼水暴漲、雨月餘にして、止まず。平地水數尺。懿、乃ち土山地道、楯櫓鉤衝を作り、晝夜之を攻め、矢石雨の如し。淵、窘急、糧盡き、人相食み、死者甚だ衆く、その將士皆降る。すてにして、城潰え、淵、その子と數百騎を將ゐ、圍を突いて走る。懿、撃つて、之を斬り、その首を洛陽に傳ふ。こゝに於て、遼東、帶方、樂浪、玄



菟の四郡皆平く、公孫度、漢の中平六年、遼東に據つてより、こゝに至るまで、三世凡そ五十年にして滅ぶ、魏の威、すでに朝鮮の境に及び、内治外攻、ともに成功し、唯だ此際を以て最も盛なりとす。而して是れ亦た、泰極つて否に赴くの時なり。

明帝の殂落

その翌年、魏の明帝、病篤し、司馬懿、洛陽に至り、入つて見る。帝曰く、吾、後事を以て君に屬す。君、曹爽と小子を輔けよ。死乃ち忍ぶべし。吾死を忍んで、君を待つ、相見るを得て恨なしと。乃ち二王を召して、懿に示し、別に齊王芳を指して曰く、これはなり。君之を誦視して、誤るなかれと。又芳に教へ、懿の項を抱かしむ。懿頓首流涕、こゝに於て、芳即日立つて太子となる。時に年八歳。尋いて明帝崩じて位に即く。是を廢帝、邵陵厲公となす。爽、懿並に侍中都督中外諸軍、錄尚書事を加へ、諸の興作するところ、皆詔を以て之を罷む。

明帝の孤を司馬懿に屬する、なほ昭烈が後主を諸葛亮に托せしが如し。而して、亮は忠貞の節を以て身を軍旅の間に亡ぼせしに反して、懿は篡國の計をなし、遂に魏室を傾覆せしめたり。曹操權術を以て人を馭し、國を起せしの際、こゝに至り

三國の頽勢

て見るべし。曹爽、懿と相並ぶと雖も、懿の年位、素より高きを以て、常に之に父事し、毎事諮訪、敢て専ら行はず。次いで、懿、太傅となり、司馬懿の權、愈よ重し。その翌年、蜀延熙四年、吳帝權、魏を伐ち、全琮に命じて、淮南を略して、芍陂を決せしめ、朱然をして樊を圍ましめ、諸葛瑾をして、柵中を攻めしむ。魏の將軍王凌、琮と戰つて之を敗り、司馬懿自ら將として、樊を救ひ、吳軍皆遁れて功なし。

後三年を經、蜀の延熙七年、曹爽、長安に至り、卒、十餘萬を發し、姑の子征西將軍夏侯元と、駱谷より漢中に入る。漢中の兵、三萬に滿たず、蜀の諸將、皆恐れ、城を守つて出でず。以て涪の兵を待たむと欲す。王平、聽かず。護軍劉敏をして、輿執に據り、多く旗幟を張らしめ、彌亘百餘里。閏月、帝、費禕をして、之を救はしむ。魏兵、輿執に距いて、進むを得ず。關中及び氐羌、轉輸供する能はず。牛畜多く死し、民夷道路に號泣す。司馬懿、書を之に遺つて、之を責む。元懼れて、爽に言ひ、遂に軍を引いて還る。費禕、進んで二嶺に據り、以て爽を截つ。爽、險を争うて苦戰し、僅に乃ち過るを得。失亡甚だ多く、關中之が爲に虚耗す。こゝに至りて、三國戰に倦みし觀あり、軍旅日に少く、國力殆んど均衡せり。

これより先蜀の將琬大司馬となり、請うて涪城に屯せしが、魏兵退きし翌年を以て卒し、尙書令董允又卒せしを以て、帝はじめて國事を親らす。宦人黃皓、便辟佞慝を以て寵あり、允數ば之を責む。皓を畏れて、敢て非を爲さず。允の世を終るまで位、黃門丞に過ぎず。こゝに至り、費禕、選曹郎陳祗を以て、允に代つて侍中たらしむ。祗、技藝多くして、智數を挟む。禕、以て賢なりとし、次を越えて、之を用ふ。祗、皓と相表裏し、皓はじめて政に預り、中常侍に遷り、威柄を操弄す。この時、名將良臣、すべてに凋謝し、國に人なく、佞奸却つて位に在り、覆亡の因、すべてに成れり。吳の陸遜亦た尋いて卒し、吳帝權太子和を廢して、魯王霸及び將軍朱據を殺し、子亮を立て、太子となし、亦た國亂の漸をなせり。而して、大禍は、先づ魏國より始まれり。

曹爽の誅除

曹爽驕奢度なく、飲食衣服、乘輿に擬し、兄弟數ば俱に出で、遊ぶ。この月、魏主芳高平陵に謁す。爽、弟義訓、彦と皆從ふ。懿、その子師昭と謀り、皇太后の令を以て、諸城門を閉ぢ、兵を勸して、武庫に據り、司徒高柔、太僕王觀を召して、爽、義の營に分據せしめ、爽が顧命を背棄し、國典を敗亂し、僭擬專權、君を無みする志あるを奏す。皇太

后、爽兄弟の吏兵を罷めしむ。爽奏を得て、窘迫爲すところを知らず、懿、その所親をして、爽に説き、早く自ら罪に歸し、唯だ官を免じて、罷むべきを言はしむ。爽、乃ち懿に通じ、奏請して、己の官を免ぜしめ、駕を奉じ、兄弟とともに家に歸る。懿、吏卒を發して、之を圍守せしむ。有司奏して、云ふ、黃門張當、私に擇ぶところの才人を以て、爽に與ふ。疑ふ、らくは、姦あらむと、廷尉に附して、考實せしめ、爽、何晏、鄧颺、丁謐、畢軌、李勝等と逆を謀るといひ、終に爽、義等を收めて、之を殺し、桓範、張當ともに、三族を夷せらる。曹爽は、全く司馬氏に賈られしものなり。時に蜀の延熈十二年なり。

こゝに至つて、懿、自ら丞相となり、九錫を加へられしが、辭して受けず。夏侯霸は、淵の子にして、曹爽の厚うするところなり。その父、かつて蜀に死せしが、故に常に切齒して、報讐の志あり。征蜀護軍となり、征西に統屬す。征西將軍夏侯元は、霸の從子にして、爽の外弟なり。こゝに至り、司馬懿、元を召して、京師に治らしむ。霸、爽すでに誅せられ、元又徵されしを以て、禍の及ぶを恐れ、遂に蜀に奔る。衛將軍姜維、之に問うて曰く、懿、すでに政を得たり、復た征伐の志あるべきや、否や。霸曰く、彼、方に家門を營立し、未だ外事に過らず、鍾會、字を士季といふものあり、その人、少しと雖も、

若し朝政を管せば、吳蜀の憂なりと、維以て意となさず。その秋、兵を出して魏の雍州を攻め、麴山に依つて二城を築き、守將を派し、羌胡の質任を聚めて、諸軍を侵侮せしむ。魏の郭淮、刺史陳泰をして、兵を進めて、之を圍ましめ、その運道及び城外の流水を斷つ。維之を救ふずてにして、還路を截られむを懼れ、終に通れ走る。

王凌の變

その翌十四年、魏の王凌、その甥令狐愚と、甥舅並に重兵を典り、淮南の任を專にし、魏王璽臣に制せらるゝを以て、陰かに謀つて、楚王彪を立てむとす。すてにして、愚死し、凌、謀を以て、黃華に告ぐ。華之を司馬懿に白す。こゝに於て、懿、中軍に將して、之を撃ち、凌勢窮り、面縛して降る。魏、その縛を解き、京師に詣らしめしが、道にして、藥を飲んで死せり。すてにして、懿、洛陽に至り、その事を窮治し、諸の相連るもの、悉く三族を夷し、凌、愚の家を發き、棺を剖し、尸を暴し、楚王に死を賜ひ、盡く諸公王を録して、鄴に置き、有司をして之を察し、人と交關するを得ざらしむ。その秋、司馬懿卒し、その子師自ら撫軍大將軍、錄尚書事となる。

諸葛恪の敗

その冬、吳帝權、諸葛恪を以て、太子太傅となし、國事を總督せしめ、翌年夏、病篤き

に及び、恪及び太常滕胤、將軍呂據、侍中孫峻を召し、屬すに後事を以てし、終に逝く。諡して大皇帝といふ。太子亮、位に即き、恪を以て太傅となし、胤を衛將軍となし、呂岱を大司馬となす。恪乃ち命じて、視聽を罷め、校官を息め、逋責を原し、關稅を除き、恩澤を崇うし、衆悦ばざるなし。この年、恪、孫權が築きし東興堤(江南和州含山縣)を修治して、更に大堤を作り、左右山峽に結び、兩城を築く。魏の諸葛誕、司馬師に説き、之を攻めしむ。恪、之を救ひ、東關に至り、遂に魏軍を敗り、その還るや、功あるを以て、荆揚二州の牧を加へ、中外諸軍事を督せしむ。恪、遂に敵を輕ずるの心あり。翌年二月、大に州郡二十萬衆を發して、魏を伐つて、淮南に入る。時に蜀の姜維、又兵を出して、狄道を圍む。司馬師、二方皆急にして、諸將皆沮むを以て、虞松に問ひ、郭淮、陳泰をして、狄道の圍を解かしめ、母邱儉等に勅し、兵を按して、自ら守り、新城を以て吳に委せしむ。姜維糧盡きて、引いて還る。新城の守將張特、吳人を詐き、降を約す。吳人之を聽き、夜、諸屋材柵を撤し、其關を補うて二重となす。明日、吳人に謂つて曰く、我但だ國に死せむのみと、吳人大に怒り、進んで之を攻むれども、抜く能はず。大暑に會し、吳軍病者大半、死傷地に塗れ、恪乃ち引いて去る。

諸葛恪の死

恪すてに建業に還り、愈よ威嚴を治め、罪責するところ多く、復た兵を嚴にして、青徐に向はむと欲す。孫峻、因つて、恪を吳帝亮に構へ、變を爲さむと欲すといひ、遂に亮と謀り、酒を置き、兵を伏せて、之を殺し、併せて三族を夷す。こゝに於て、吳の群臣、峻を表して、丞相大將軍都督中外諸軍事となす。峻、驕矜淫暴、國人目を側つ。これより先、蜀の大將軍費禕、魏の降將郭循の殺すところとなる。吳蜀二國、すてに忠貞の臣を失ひ、内治愈よ非、兵力亦た振はず。魏は司馬氏權を專にし、三國同時に衰頽に赴けり。

司馬師の廢立

十七年、魏帝芳、司馬師が先に李豐、夏后元、張緝を殺し、張皇后を廢せしを以て、意殊に平かならず、先づ師の弟司馬昭を許昌より召し、之を以て、姜維の入寇を禦がしむ。昭、兵を領し入つて見る。芳、平樂觀に幸して、軍に臨む。すてにして、師、太后の令を以て、群臣を召して、議し、芳が荒淫度なく、倡優を褻近し、以て天緒を承くべからざるをいひ、乃ち奏して、璽綬を收め、藩に齊に歸らしむ。師、文帝の子彭城王據を立てむとす。太后可かず。文帝の長孫、明帝の弟の子、高貴郷公髦を立てしむ。是を廢帝となす。時に年十四。

母儉、師、文欽、兵を起す

揚州司馬母儉、刺史文欽等、自ら安んぜず。太后の詔を矯めて、兵を壽春に起し、檄を州郡に移して、司馬師を討つ。儉、五六萬の衆を將ひ、淮を渡つて、項に至つて、堅守し、欽をして、外に在つて、游兵たらしむ。時に、師、新に目瘤を割き、創甚し、或は自ら行くべからずといふものあり。王肅、傅瑗、鍾會等、勸めて、自ら行かしむ。乃ち弟昭を以て、中領事を兼ね、洛陽に留鎮せしめ、荊州刺史王基、行監軍となり、先づ淮南に臨む。儉等亦た往くを争ひしが、基の到るを聞き、還つて、項を保つ。時に、吳の孫峻、又兵を率ひて、壽春を圍む。師、諸軍に命じ、壁を深くし、以て來軍の集るを待たしむ。諸將項を攻めむを請ふものあり。師可かず。諸葛誕をして、壽春に向ひ、胡遵をして、儉等の歸路を絶たしむ。儉、欽、計窮つて、出づるところを知らず。將士の家、北に在り、降者相屬す。欽の軍敗る。儉、恐懼して、夜走り、壽春亦た潰ゆ。欽、孤軍繼なく、自立する能はざるを以て、遂に峻に詣つて、吳に降る。儉、殺されて、首を京師に傳へ、その三族を夷し、吳軍亦た去る。すてにして、師の病篤く、許昌に還り、昭、洛陽より往いて、之を省す。師命じて、諸軍を總督せしむ。幾もなくして卒するや、詔して、昭を以て、大將軍錄尚

諸葛誕兵を起す

書事となす。

その翌年、司馬昭はじめて、袞冕赤舄を服す。諸葛誕、素と夏侯元等を友とし、善し。元等すでに死し、王凌母印儉、相繼いで誅滅し、誕内自ら安んぜず、その功を以て揚州に都督たるや、乃ち帑を傾けて賑施し、曲げて有罪を赦し、以て衆心を收め、輕俠數千人を養うて死士と爲し、請うて兵を増し、城を築き、以て吳寇に備ふといひ、その意、淮南を保有せむと欲す。翌年五月、詔して誕を徵して司空となす。こゝに於て誕遂に揚州刺史樂琳を殺し、屯田兵十餘萬及び新附四五萬人を歛め、一年の糧を聚めて自守の計をなし、長史吳綱をして、少子胤を將ゐて、吳に至り、臣と稱して、救を請はしむ。司馬昭、魏帝髦及び太后を奉じて、之を討つ。吳將軍全、惲、全、端、唐、咨等を請はしむ。同じく、誕を救はしむ。六月、昭、諸軍二十六萬を督し、進んで、邱頭(陳州府沈邱縣)に至り、將軍王基、陳、審をして、壽春を圍ましむ。會、吳の朱異、三萬人を率ゐて、安豐に屯し、欽の外勢を爲す。基、四面合圍、欽、異を撃ち、皆之を破走す。吳の孫、俊、すでに死し、その弟、緄、大に卒を發し、出て、鏝里に屯し、復た異等をして、壽春の圍を解かしむ。魏人又撃つて、之を破る。異走つて、緄に歸す。緄、之をして、死戦せしむ。

食乏しきを以て従はず。緄、怒つて之を斬る。緄、すでに誕を抜き出づる能はず、而して、士衆を喪敗し、自ら名將を戮し、吳人咸な怨む。全、惲の兄の子輝、罪を得つて、魏に奔る。昭、僞つて其書を作り、惲等に告げ、緄諸將を殺さむと欲すと言はしむ。惲等恐れ、遂に衆を率ゐて出て、下る。

その翌、蜀の景耀元年、文欽、諸葛誕をして、圍を決して出でしむ。克たずして、又城中に還り、食盡て降者日に衆し。欽、北方の人を出し、その食を省き、吳人と堅守せむと欲す。誕、聽かず。是に由て、爭恨し、遂に欽を殺す。欽の子鶯虎、城を踰えて魏に歸す。昭、之を内れ、數百騎を將ゐ、城を巡つて、呼ばしめて曰く、文欽の子、猶ほ殺されず、その餘、何ぞ懼れむ。又表して將軍となし、爵關内侯を賜はむ。と、城中皆喜ぶ。昭、因つて軍を進めて、之に克ち、誕を斬り、三族を夷す。その麾下數百人、皆手を拱し、列を爲して降らず、一人を斬る毎に、之を降らしむ。卒に變せず、以て盡くるに至る。吳軍すでに功なく、緄引いて還り、蜀の姜維、又兵を出せしも、魏將鄧艾、長城(西安府藍屋縣)に據り、之を拒ぎ、數ば戰を挑めども、應ぜずして止む。

孫綝の廢立

吳の孫綝、すでに國に還る。その主亮、政を親し、數ば中書に出て、大帝の時の舊事を視る。性聰慧なり。綝、難問するところ多きを以て、疾と稱して、朝せず。弟據をして、入つて宿衛せしむ。亮、全公主將軍劉丞と謀り、之を誅せむとす。九月、綝兵を以て、全尙を襲うて、之を執へ、劉丞を殺し、遂に宮を圍ひ、亮、大に怒り、馬に上り、鞭を帶び、戈を執つて出て、ひと欲す。曰く、孤は大皇帝の嫡子、位に在る、すでに五年、誰か我に従はざるものぞと。近臣ともに之を率止して出づるを得ざらしむ。

綝、光孫勳孟宗をして、太廟に告げ、亮を廢して會稽王となし、其罪を以て遠近に班告し、遂に瑯琊王休を會稽に迎へ、亮を遣はして國に之かしましむ。十月、休至り、群臣璽符を奉上し、三たび讓つて、之を受く。綝、草莽の臣と稱して、闕に詣り、印綬節鉞を上り、賢を避くるの路を求む。休、之を慰諭し、以て丞相荊州牧となし、又兄の子皓を封じて烏桓侯となす。

孫綝の死

綝、かつて手酒を奉じて、休に詣る。休、受けず、齋して左將軍張布に詣り、酒酣にして、怨言を出して曰く、帝、我に非ざれば立たず、今禮を上つて、拒まる、これ凡臣と異なるなし、當に復た改めて圖るべきのみと。布、以て休に告ぐ。休、之を銜み、その變あるを恐れ、數ば賞賜を加ふ。或は綝の反を告ぐ。休、執へて綝に附す。綝之を殺す。是に由て大に懼れ、出て、武昌に屯するを求め、凡そ請求するところ、一も違ふものなし。將軍魏延等、之を誅せむを請ふ。十二月、臘、綝疾と稱す。休、強いて之を起たしめ、宮に入るや、左右に命じ、縛して之を斬らしめ、その同謀者を赦す。

魏帝曹芳試せらる

吳國の内亂、かくの如く、魏に於て、更に甚しきものあり。後二年、蜀の景耀三年、魏帝髦、威權日に去るを見、その忿に堪へず、侍中王沈、尙書王經、散騎常侍王業を召し、謂つて曰く、司馬昭の心、路人も知るところなり。吾、坐して廢辱を受くる能はず、今日卿と自ら出で、之を誅すべしと。こゝに於て、入つて太后に白す。沈、業走つて告ぐ。經、ひとり従はず。すでににして、髦、遂に劍を抜いて、登に昇り、殿中の宿衛蒼頭官僮を率ゐ、鼓譟して出づ。中監軍賈充、入つて與に南闕の下に戰ふ。髦、自ら劍を用ふ。衆退かむと欲す。太子舍人成濟、曰く、事急なり、如何すべき。充曰く、司馬公、汝等を育養す。正に今日の爲なり、今日の事、問ふところ無きなりと。濟、即ち戈を抽き、前んで髦を刺して、車下に殞す。昭之を聞いて、大に驚き、自ら地に投ず。すでにして殿中に入

り、群臣を召して會議し、太公の令を以て髦を罪狀し、廢して庶人となし、葬るに民禮を以てせむとす。請ふものあり、因つて王禮を用ふ。昭成濟を言うて、大逆不道となし、併せてその三族を夷し、常道郷公瓚を迎へ立つ。是を元皇帝となす。瓚は燕王宇の子にして操の孫なり、時に年十五、名を奐と改む。

### 第五十三章 三國の滅亡

姜維の北伐

吳蜀二國、重臣權を恣にし、内訌頻りに起り、廢立相繼ぐの間、蜀の一國は、黃皓中人を以て權を弄すと雖も、之を二國に比すれば、固より甚しと爲さず。蜀帝劉禪、因つて苟安を偷み、姜維ひとり才武を恃み、費禕死せし後は、専ら兵權を握り、征伐連年、止むことなし。延熹十六年、吳の諸葛恪、淮南に入りしとき、維は狄道を圍みしも、志を得ず。その翌十七年、隴西より出て、魏將徐質と戦つて之を敗り、河間(甘肅河州)狄道臨洮の三縣を拔き、その民を遷して歸り、その翌十八年、魏兵を洮水の西に敗り、遂に狄道を圍みしも、克たず。その翌十九年秋、祁山より出て、鄧艾の備あるを聞き、回つて南安に趨き、ともに段谷(秦州清水縣)に戰つて、大に敗れ、死者甚だ衆く、遂

蜀の疲弊

に國人の怨を買へり、然れども、なほ懲りず、その翌二十年、長城に艾と相距ぎしと、前に述べしが如し。維、數ば兵を出し、遂に功を爲さず、國力疲弊甚しく、蜀人皆愁苦す。譙周、仇國論を作つて之を諷す。維可かず。

時に巧佞を以て寵を得たる陳祗、すでに死し、黃皓事を用ひ、董厥、亮の子諸葛瞻とともに將軍となり、能く匡矯するなく、尙書令樊建、皓と往來せずと雖も、又革正する能はず。蜀人、諸葛亮を追思し、因つて威な膽を愛し、朝廷一善政ある毎に、たとひ膽の建造するところに非ずと雖も、皆傳へて相告げ、一に葛侯の爲すところといふ。これを以て、美聲溢譽、或は其實に過ぐるものあり。蜀の内治、日に非なり。吳使薛翽來聘して還り、吳帝、漢政の得失を問ふ。對へて曰く、主闇くしてその過を知らず、臣下身を容れ、以てその罪を免れむを求め、其朝に入つて直言を聞かず、其野を経れば、民皆菜色あり。臣聞く、燕雀堂に處り、子母相樂しむ、突決棟、焚けて怡然知らず、禍の將に及ばむとする、其れ是を之れ謂ふかと。

景耀五年、維、又軍を出さむとす。車騎將軍廖化曰く、兵戢めず、必ず自ら焚く、伯約の謂なり、智敵に出でず、而かも、力寇より少し、之を用ひて厭くなく、何を以て自ら

姜維と黃皓

存せむと、維、遂に魏を伐ち、洮陽(鞏昌府洮州)を攻む。鄧艾與に侯和に戦ひ、之を破る。時に黃皓事を川ふ。維、帝に啓して、之を殺さむを請ふ。帝曰く、皓は趨走の小臣のみ、さきに董允毎に切齒、吾之を恨む、君何ぞ意に介するに足らむと。維、皓が枝葉接するを見、遜辭して出づ。帝、皓に勅し、維に詣つて陳謝せしむ。維、是に由つて疑懼し、洮陽より還り、麥を沓中に種ゆるを求め、敢て成都に歸らず。

魏の征蜀

魏の司馬昭、維が數ば北伐するを患ひ、大舉して、漢を撃たむと欲す。朝臣多く以て不可となし、ひとり鍾會之を勸む。昭、乃ち衆に諭し、會を以て鎮西將軍となし、關中を督せしむ。鄧艾、蜀未だ罅隙あらざるを以て、屢ば異議を陳す。昭、人をして之を諭さしむ。艾、乃ち命を奉ず。姜維、乃ち表し、車騎將軍張翼、廖化をして、諸軍を督し、陽安關口(漢中府鞏州西北)及び陰平橋頭を分護せしめ、以て未然を防ぐ。黃皓、巫鬼を信じ、謂へらく、敵終に自ら致す能はずと。帝に啓して、その事を廢めしむ、而かも群臣知るなし。

その翌、炎興元年、魏、鄧艾を遣し、三萬餘人を督し、狄道より甘松沓中に趣き、以て姜維を綴せしめ、雍州刺史諸葛緒、三萬餘人を督し、祁山より武街橋頭に趣き、維の

歸路を絶つ。鍾會十萬餘の衆を統べ、分つて斜谷駱谷子午谷より漢中に赴き、衛瑾を以て、節を持し、軍事を監し、鎮西軍司を行はしむ。八月、諸軍洛陽を發す。漢、廖化を遣し、姜維の繼後となし、張翼、董厥、陽安關口に詣り、諸圍の外助と爲し、大赦改元。諸圍に救して、戦ふを得ず、退いて漢樂二城を保たしむ。會、王行、漢中に至り、兵をして二城を圍み、徑に陽安口に趣き、人を遣して、諸葛亮の墓を祭らしめ、護軍胡烈を前鋒となし、關口を攻めしむ。守將傅僉、拒守す。その下、蔣舒、衆を率ゐて迎へ降る。烈、虛に乗じて、城を襲ふ。僉、格闘して死す。會、遂に長驅して前み、大に藏庫積穀を得たり。維、會すでに漢中に入るを聞き、兵を引いて還る。艾、兵を遣して、壘川口に追躡せしめ、大に戦ひ、維、敗走し、還つて陰平谷に至り、衆を合し、關城に赴かむと欲し、そのすてに破れしを聞き、化翼、廖化等に遇ひ、兵を合して、劍閣を守り、以て會を拒ぐ。こゝに於て、使を遣して、急を吳に告ぐ。吳、大將軍丁奉をして、壽春に向ひ、丁封、孫異をして、沔中に向ひ、漢を救はしむ。

鄧艾の奇兵

鄧艾進んで陰平に至り、諸葛緒と江油(四川龍安府江油縣)より成都に趨かむと欲す。緒、西行本詔に非ざるを以て、遂に兵を引いて鍾會と合す。會、軍勢を專にせむ



諸葛瞻父子の戦死

を欲し、密に緒が畏懼進まざるを白し、檻車徹し還し、その軍悉く會に屬す。姜維營を列して、險を守る。會之を攻むれども、克つ能はず、引いて還らむと欲す。艾、蜀すてに摧折、宜しく遂に之に乗ずべきを言ひ、乃ち陰平より無人の地を行くこと七百里、山を鑿し、道を通じ、橋閣を造作す。山高く谷深く、又糧運將に匿しからむとして、危殆に瀕す。艾、匪を以て、自ら衰み、推轉して下り、將士皆木を攀ぢ、崖に緣り、魚貫して進む。先登江油に至る。守將馬邈降る。諸葛瞻、諸軍を督して、涪に至る。尙書郎黃崇之に勸めて、速に行いて險に據り、敵をして平地に入るを得るなからしむ。瞻猶豫して、未だ納れず。艾、遂に長驅して前む。瞻、退いて綿竹に往く。艾、書を以て、瞻を誘うて曰く、もし降らば、表して瑯琊王となさむと。瞻、その使を斬り、陳を列し、以て待つ。艾、大に戦つて之を破り、瞻及び崇を斬る。瞻の子尙曰く、父子國の重恩を荷ふ、早く黃皓を斬らず、國を破り、民を殄せしむ、生きて何をか爲さむと。馬に策ち、陳を冒して死す。

鄧艾進んで成都に薄る。漢はじめ魏兵卒かに至るを意はざるを以て、城守調度を爲さず。艾すてに平地に入るを聞き、俄に群臣を召して會議し、乃ち譙周の策を

北地王劉譙

蜀の滅亡

用ひ、使を遣し、璽綬を奉じ、艾に詣つて降る。北地王譙、怒つて曰く、もし理窮り、力屈し、禍敗將に及ばむとすれば、便ち父子君臣、城に背いて、一戦し、同じく社稷に死し、以て先帝を見る可なり、奈何ぞ降らむやと。帝、聽かず。譙、昭烈の廟に哭し、先づ妻子を殺して後に自殺す。帝、群臣を率ゐて、面縛し、輿襯軍門に至る。艾、節を持して、縛を解き、梶を焚いて延見し、將士を禁じて虜掠を得るなからしめ、輒ち鄧禹の故事に因り、制を承けて、漢帝以下の官を拜す。姜維及び諸郡縣の圍守、救を得、仗を放ち、鍾會に詣つて降る。將士咸な怒り、刀を抜いて石を斫る。昭烈徳を以て、士を懷つけたるの効、こゝに於て見るべし。會、厚く維等を待ち、皆權りに、その印綬節蓋を還へす。吳軍漢亡びしを聞き、乃ち兵を罷めて去る。夏侯霸の言、こゝに於て驗あり。蜀は昭烈の即位より、こゝに至るまで凡そ二世四十四年。

蜀地すてに平ぐと雖も、鄧艾、鍾會二將相善からざるを以て、こゝに直に一大變を惹起せり。これより先、司馬昭累りに進位爵賜を辭せしが、蜀捷交も至るや、詔して復た之に授け、はじめて相國晉公と稱して、九錫を受く。鄧艾、成都に在り、頗る自

ら於伐書を以て晋公昭に言ひ、請うて平蜀の勢に因り、以て吳に乗じ、隴右及び蜀の兵を留め、鹽を煮、治を興し、並に舟船を作り、豫め順流の事を爲し、且つ劉禪を王とし、以て歸命の寵を顯はし、吳人をして威に畏れ、德に懐き、風を望んで従はしめむとす。昭、衛瑾をして、艾に諭し、事當に報を須つべく、宜しく輒ち行ふべからざらしむ。艾曰く、春秋の義、大夫疆を出て、社稷を安じ、國家を利すべきものあらば、之を專にして可なり。今、吳人未だ賓せず、勢蜀と連る、常に拘つて、以て事を失ふべからず。と、鍾會異志あり、姜維之を知り、擾亂を構成し、以て克復を圖らむと欲す。乃ち會に説き、之を激して曰く、君、淮南より以來、算に遺策なく、今復た蜀を定め、威德世に振ふ、此を以て安くにか歸せむと欲するか、何を陶朱公に法り、舟を泛べて跡を絶ち、功を全うし身を保たざる。會曰く、君の言遠し、我行ふ能はず。維曰く、その他は、君の智力の能くするところ、老夫を煩すなし。と、是に由つて、情好懼甚し。會、艾が制を承けて事を專にするに因り、乃ち瑾とともに、密かに艾の反狀あるを白す。詔して、檻車を以て、艾を徵す。昭、艾が命に従はざるを恐れ、會に救して、軍を成都に進めしめ、又賈充を遣し、兵を將ゐて、斜谷に入らしめ、昭自ら大軍を將ゐ、魏主に従つて長

安に赴く。會、瑾を遣し、先づ成都に至り、艾を收めし、因つて艾をして、先づ瑾を殺さしめ、并せて艾の罪となさむと欲す。瑾之を知り、乃ち夜を以て成都に至り、艾の統ぶるところの諸將に檄して、艾を收めしめ、その餘は、一も問ふところなく、平旦、瑾使者の車に乗じて、徑に艾の臥内に入り、その父子を執へ、之を檻車に置く。次いで會至り、艾を送つて、京師に赴かしむ。會の憚るところは、惟だ艾、艾すでに擒に就く乃ち遂に意を決して、反を謀り、姜維をして、前驅たらしめ、自ら其後に隨はむと欲す。時に郭太后卒す。會乃ち悉く諸將を召し、太后の爲に喪を發し、遺詔を稱し、兵を起し、司馬昭を廢せむとし、更に親信をして代つて、諸軍を領せしめ、召すところの群臣、悉く之を背屋中に閉ざす。瑾詐つて、疾篤しと稱し、出て、外廡に就く。會之を信じ、復た憚るところなし。維、會をして、盡く北來諸將を殺さしめ、己因つて會を殺し、復た故の漢帝を立てむと欲す。乃ち密書を帝に與へて曰く、願くは、陛下、數日の辱を忍べ、臣、社稷を危うして復た安からしめ、日月幽にして復た明ならしめむ。と、會諸將を誅せむと欲す、猶豫して未だ決せず。護軍胡烈の親兵、出て、飲食を取る、烈給いて親兵及び其子淵に語つて曰く、會、すでに大坑を作り、白梃數千、悉く外兵

姜維の死

を呼び、倍殺して坑中に内れむとす。一夜相告げて、皆徧ねし。淵遂に其父の兵を率ゐて、門を出て諸軍鼓譟し、先を争うて城に赴く。閉ざれしところの諸人、各屋に縁つて出で、その軍士とも、に會及び維を斬る。維死せし時に、割かる。膽大なること斗の如し。こゝに於て、衛瑾諸將を分部し、數日にして定る。艾の本營の將士、追うて艾を檻車より出す。瑾自ら會とともに艾を陥れしを以て、その變をなさむことを恐れ、乃ち兵を遣して、艾父子を綿竹の西に襲うて之を斬る。創業の功臣、往々にして國を篡するは、古しへ數ば觀るところ。司馬氏の魏に於ける、すでに然り。司馬昭早くより、篡國の志あり、故に豫め功臣を殲除し、之をして遺類なからしむ。その謀るところ、まことに慘苦なりといふべし。はじめ、魏軍の洛陽を發する、或は參相國軍事劉寔に問うて曰く、鍾鄒其れ蜀を平ぐるか。寔曰く、蜀を破るや必せり。然れども、皆還らずと。客その故を問ふ。寔笑つて答へず。こゝに及て、二人皆誅せられ、果して寔の言の如し。時に魏の咸熙元年正月なり。

魏晉の交替

その三月、魏、晉公昭に詔し、爵を進めて王となす。翌年八月、昭卒し、諡して文王といふ。長子炎嗣ぐ。その十二月、魏帝位を晉に禪り、出で、金墉城(河南府洛陽縣東北)

武帝の治

に舍す。魏は文帝漢を篡してより、凡そ五世、合せて四十六年。太傅司馬孚、流涕歎歎、自ら勝えずして曰く、臣死する日、固より大魏の純臣たらむとす。すでににして、晉王炎、皇帝の位に即く、西晉の武皇帝、是れなり。魏王を奉じて陳留王となし、乃ち遷つて鄴に宮せしむ。魏氏の諸王、皆降して侯となす。これより先故の蜀主劉禪、家を擧げて洛陽に還る。大臣従つて行くものなく、惟だ祕魯令郤正及び殿中督張通、妻子を捨て、單身徒行す。正相導いて宜適、舉動闕くなし。禪乃ち慨然歎息、正を知るの晩きを恨む。魏亡ぶるの前一年、吳帝休崩ず、子璽あり、然れども、吳人蜀はじめ亡びしを以て恐懼し、長君を得むと欲す。こゝに於て、烏桓侯皓、才識明斷あり、之に加ふるに學を好み、法度を奉遵すといふを以て、迎へらる。そのはじめて立つや、優詔を發して、士民を恤み、倉廩を開いて、貧困を賑し、當時明主と稱す。然れども、漸く志を得るに及び、粗暴驕盈、忌諱多くして、酒色を好み、多く舊臣を殺す。吳國これより振はず。

晉帝炎、すでに立ち、魏氏孤立の弊に懲り、大に宗室を封じ、授くるに職任を以てし、又諸王に詔して、皆自ら國中の長吏を選ぶを得せしむ。魏は、曹操權謀を以て下

を馭し宗室を禁防すると甚だ峻、又諸劉を禁錮して、皆仕進を得ず、その諸將征伐及び長吏州郡に仕ふるもの、俱に質任を京師に留む。帝恩惠を敷くを主とし、悉く之を除罷す。次いで諫官を置く、はじめ前漢に諫大夫あり、後漢には諫議大夫といひ、魏に至りて復た置かず。こゝに於て、散騎常侍拾遺補闕を以て其職に當らしむ。之に次いで、七廟を立て、郊祀五帝の座を除き、星氣讖緯の官を禁ず。又賈充等に命じ、法律を正さしめ、泰始四年刊修するところの律令を上る。漢律九章に就いて、十一篇を増して、二十篇となし、凡そ六百二十條、その律に入らざるものは、悉く以て令となし、合せて二千九百二十六條。晋帝親しく自ら臨講す。中書侍郎張華、死罪の條目を抄し、懸けて民に示さむを請ひ、之に従ふ。又河南尹杜預に詔して、黜陟の課を爲りしも、事竟に行はれず。濟南太守文立言ふ、故の蜀の名臣の子孫、宜しく才を量つて叙用し、以て巴蜀の心を慰め、吳人の望を傾くべしと。帝之に従ふ。こゝに於て、諸葛亮の孫京宜は、吏に署せられ、傅僉の子没せられて、奚官に入りしもの、免ぜられて庶人となる。晋室新昌の勢に乗じ、務めて民心を收攬すること、かくの如く、吳遂に敵せず、僅に餘喘を江南半壁の地に保つのみ。

羊祜

王濬攻吳の舟を造る

晋帝固より吳を滅ぼすの志あり、泰始五年、羊祜を擧げて、荊州に都督とし、襄陽に鎮せしむ。祜遠近を綏懐し、甚だ江漢の心を得、吳人と開布し、大に信あり。降者去らむと欲せば、皆之を聽き、成邇の卒を減じ、墾田八百餘頃を以てす。その始めて軍に至るや、百日の糧なく、季年に及びて、十年の積あり。祜の軍に在るや、常に輕裘緩帶、身甲を被らず、殿閣の下侍衛十餘人に過ぎず。吳の左丞相陸凱心を公家に竭し、忠貞を以て稱せらる。吳帝の昭明宮を造るや、諫むれども聽かれず。又都尉何定専ら事を以て威福をなすを叱責せしも、之を逐ふ能はず。その死むとするや、賀邵張悌及び族弟抗等を擧ぐ、吳帝皆用ふる能はず。抗は陸遜の子なり、次いで、諸軍に都督とし、樂郷(荊州府松滋縣)に治せしむ。抗、吳主政事闕多きを以て、上書して時宜十七條を陳す、吳主納れず。

王濬といふものあり、羊祜の參軍たり、祜深く之を知る。或は曰く、濬の人と爲り、志大にして奢侈専ら任ずべからずと。祜曰く、濬大才あり、將に以て其欲するところを濟さむとす、必ず用ふべきなりと。泰始八年、濬益州の亂を平げしに由り、廣漢太守より、進んで益州刺史となる。これより先、汝山、白馬の諸羌胡相侵掠す、濬の至

るに及び、明かに威信を立て、蠻夷歸附し、俄に大司農に遷る。時に晋帝羊祜と吳を伐たむと謀る。祜以爲へらく、宜しく上流の勢を藉かるべしと。密に表して、游を留め、龍驤將軍を加へ、梁益の軍を監せしめ、詔して、屯田の兵を罷め、大に舟艦を作らしむ。その大なるものは、長さ百二十歩、工千餘人を受け、木を以て城となし、樓櫓を起し、四出門を開き、その上馬を馳せて往來すべし。時に木柵江を蔽うて下る。吳の建平太守吾彥、之を取つて、吳帝に白して曰く、晋必ず吳を伐つ、計あらむ、宜しく、建平の兵を増し、以て其衝を塞ぐべしと。吳帝從はず。彥乃ち鐵鎖を爲り、江路を横斷す。之に次いで、步闡西陵に據つて、晋に降る。吳の邊警漸く迫る。

步闡の反

陸抗、闡の反を聞き、急に吾彥を達して、之を討たしむ。晋、荊州刺史揚肇をして、闡を迎へしめ、羊祜江陵を出て、之を救ふ。抗、西陵の諸軍に敕し、嚴關を築き、内は以て闡を圍ましめ、外は晋兵を禦ぎ、自ら師を帥ゐて之に赴く。すてにして、肇、西陵に至り、抗の爲に破られて遁れ、祜、之を聞き、軍を引いて還る。抗、遂に西陵を拔き、闡を誅し、三族を夷す。吳、主すてに西陵に克ち、志益す。張大、術士尙廣をして、天下を取るを策せしむ。曰く、吉庚子歲、青蓋當に洛陽に入るべしと。吳帝大に喜び、德政を修め

羊祜と陸抗

ず、専ら兼併の計をなす。

祜の江陵より還るや、務めて德信を修し、以て吳人を懐く。兵を交ぬる毎に、日を刻し、戰に方つて掩撃の計を爲さず。將帥譎計を進めむと欲するものあれば、輒ち飲ましむるに醇酒を以てし、言ふを得ざらしむ。軍、吳境に行き、殺を刈つて糧となす。皆侵すところを計り、絹を送つて之を償ひ、遊獵する毎に、常に晋地に止り、得るところの禽獸、或は先に吳人の爲に傷けられしもの、皆之を送り還へす。こゝに於て、吳の邊人皆悦服す。祜、陸抗と境を對し、使命常に通ず。抗、かつて祜に酒を遣る。祜之を飲んで疑はず。抗、疾むとき、祜之に成藥を與ふ。抗之を服す。人多く諫む。抗曰く、豈に人を醜するの羊叔子あらむやと。抗、その邊戍に告げて曰く、彼専ら德をなし、我専ら暴を爲す。これ戰はずして自ら服す。各分界を保たむのみ。細利を求むこと勿れと。吳帝聞いて、之を惡む。抗曰く、一邑一郷、以て信なかるべからず。況んや、大國をや。臣かくの如くならざれば、適ま彼の德を彰はすに足る。祜に於て傷むなきなりと。晋の泰始十年、抗疾病す、乃ち上疏して曰く、西陵、建平は國の藩表、すてに上流

に處り、敵を二境に受く。若し敵舟を泛べ、流に順つて星奔電邁すれば、援を恃むべきに非ず。他部以て倒懸を救ふ、これ乃ち社稷安危の機なり。臣死するの後、乞ふ西方を以て屬となせと。卒するに及び、吳主その子晏、景玄機雲をして、分つて其兵に將たらしむ。機雲皆善く文を屬し、その名世に重し。

羊祜討吳の略

陸抗死するの後二年を經、咸寧二年、羊祜に征南大將軍を加ふ。祜上疏して、吳を伐たむを請うて曰く、江淮の險は、劍閣に如かず。孫皓の暴は、劉禪に過ぎ、吳人の困は、巴蜀よりも甚しく、而して、大晉の兵力、往時より盛なり。もし、梁益の兵を引いて、水陸ともに下らば、荆楚の衆、進んで江陵に臨まむ。平南豫州、直に夏口を指し、徐揚青兗、並に秣陵に會し、一隅の吳を以て、天下の衆に當る。勢分れ、形散じ、備ふるところ皆急、一處傾壞すれば、上下震蕩せむ。智者ありと雖も、吳の爲に謀る能はずと。晉帝深く之を納る。時に議者多く同じからざるあり。賈充、荀勗、馮統、尤も以て不可と爲す。祜嘆じて曰く、天下意の如くならざる事、十常に八九に居る。天の與ふる、取らず。豈に事を更ふるもの、時に後るゝを恨むに非ずやと。唯だ杜預、張華、晉帝と意合して、その計を贊成す。その翌年六月、祜病を以て入朝を求む。すでに至るや、吳を伐

つの計を面陳す。晉帝之を善とす。祜の病數ば入るに宜しからざるを以て、更に張華を遣し、就いて籌策を問はしむ。祜曰く、孫皓暴虐、すでに甚し。今に於て戰はずして克つべし。若し皓没し、更めて令王を立つれば、百萬の衆ありと雖も、長江未だ窺ふべからざるなりと。華深く之を然りとす。祜曰く、吾が志を成すものは子なりと。晉帝祜をして、臥して諸軍を護せしめむと欲す。祜曰く、吳を取る、臣の行を必せず。すでに平ぐるの後、當に聖慮を勞すべきのみと。冬十一月、祜疾篤く、杜預を擧げて、自ら代らしむ。預乃ち鎮南大將軍都督荊州諸軍事となる。祜卒す。晉帝之を哭する。甚だ哀し。南州の民、之を聞くや、市を罷めて巷に哭し、吳の守邊の將士、亦た之が爲に泣く。祜好んで峴山に遊ぶ。襄陽の人、その地に於て碑を建て、廟を立て、歲時祭祀す。その碑を望むもの、流涕せざるなし。因つて之を墮淚碑といふ。

咸寧五年、益州刺史王濬、上疏して曰く、孫皓荒淫兇逆、宜しく速に征伐すべし。臣船を作つて七年、且つ、朽敗あり。臣年七十、死亡日なし。願くは陛下事機を失ふ勿れ。と。この時、吳主暴虐驕淫、殊に甚しく。群臣を宴する毎に、咸な沈醉せしめ、又黃門郎

十人を置いて司過となし、宴罷むの後、その闕失を奏す。或は人面を削ぎ、或は人眼を鑿す。是に於て、晉帝意を決して、吳を伐つ。會ま王渾上奏して、孫皓北上せむと欲し、邊戍皆戒嚴するを言ひしに由り、更めて明年の出師を許す。杜預次いて表を上り、明年の計及ぶなきを言ひ、之を再す。晉帝方に張華と恭を圍む。預の表、適ま至る。華、秤を推し、手を歛めて曰く、陛下垂武、國富み、兵強く、吳王淫虐、賢能を誅殺す。今之を討つ、勞せずして定むべし。願くは、以て疑となす勿れと。晉帝乃ち之を許す。十一月、將軍瑯琊王伷及び王渾、王戎、胡奮、杜預、王濬、唐彬等を遣し、道を分つて吳を伐たしむ。

その翌、太康元年正月、王渾、橫江浦に出で、吳の鎮成を攻む。向ふところ、皆克つ。二月、王濬、唐彬、丹陽を攻めて、之を破る。吳人江積要害の處に於て、並に鐵鎖を以て、之を横截し、又鐵錐長さ丈餘なるものを作り、暗に水中に置き、逆へて舟艦を防ぐ。濬、大筏數十を作る。方百餘歩、水に善きものをして、筏を以て、先づ行かしめ、鐵錐に遇ふ。錐輒ち筏に着いて去る。又た炬を作る。長さ十餘丈、大さ數十圍、灌ぐに麻油を以てし、船前に在り、鎖に遇へば炬を燃して、之を燒く。須臾にして、融液斷絶。こゝに於

王渾江を降る

て、船礙るところなく、遂に西陵、荆門、夷道に克つ。杜預、江陵に向ひ、牙門、周旨等をして、夜、江を濟つて、樂郷を襲はしめ、多く旗幟を張り、火を巴山に放つ。吳の都督孫歆懼れて曰く、北來諸軍乃ち江を飛渡するなりと。旨等兵を伏せて、之を虜にす。預、遂に進んで、江陵に克つ。こゝに於て、沅湘以南、州郡風を望んで、印綬を送る。預、節に依り、詔を稱して、之を綏撫す。會ま詔あり、濬と胡奮、王戎とをして、ともに夏口、武昌を平げしむ。預、零桂を鎮靜し、衡陽を懷輯するに當る。預乃ち兵を分つて、濬に益し、武昌を攻めて、之を下す。預、衆軍と會議し、遂に方略を指授し、徑に建業に詣る。吳の丞相張悌、督沈瑩、諸葛靚等、三萬の衆を率ゐ、江を渡つて、迎へて戦ひ、大に敗る。靚は走り、悌及び瑩等皆殺さる。はじめ、詔書、王濬をして、建平に下り、杜預の節度を受けしめ、建業に至り、王渾の節度を受けしむ。預、濬が流に順つて長驅し、威名すてに表はれ、制を受くべからざるを以て、遂に書を與へて曰く、足下すてにその西藩を摧く、便ち徑に建業を取り、累世の逋寇を討ち、吳人の塗炭を釋くべし。振旅して都に還る。亦た曠世の一事たりと。濬大に悦び、表して預の書を呈す。張悌すてに敗死するに及び、濬、武昌より流に順つて下る。吳、將軍張象を遣し、舟師萬人を帥ゐて、之を拒

吳の滅亡

がしむ旗を望んで降る。吳人大に懼る。時に瑯琊王伉亦た近境に臨む。吳帝使者を分遣し、書を渾濬に奉じて降を請ひ、爾綬を伉に送らしむ。濬の舟師三山を過ぐ、渾濬を遣し、與に事を論ぜしむ。渾濬軍を擧げ、直に建業を指し、報じて曰く、風利なり、泊するを得ざるなりと。この日、濬の戎卒八萬、方舟百里、鼓噪して石頭に入る。吳帝孫皓、面縛し、輿視軍門に至つて降る。渾濬縛を解き、觀を焚き、延請して相見る。吳は、太帝元を建て、黃武といひ、はじめ帝と稱せしより、皓の亡ぶに至るまで、凡そ四世とも、五十九年、瑯琊王伉皓すてに印綬を己に致せしを以て、使をして、皓を洛陽に送らしむ。朝廷吳すてに平ぎしを聞き、群臣皆賀して壽を上る。帝、爵を執り、流涕して曰く、これ羊太傅の功なりと。驃騎將軍孫秀は、吳の大帝の母弟匡の孫、はじめ吳の夏口の督となり、皓に疑はれて、晋に奔りしものなり。ひとり賀せず。流涕して曰く、ひかし逆を討ち、一校尉を以て業を創む。今後王江南を擧げて、之を棄つ。悠悠たる蒼天、これ何人ぞやと。孫皓すてに洛陽に至る、賜ふに衣服車乘を以てし、歸命侯に爵し、その子弟を拜して郎となし、吳の舊望、才に隨つて擢叙す。

平吳の功を論ず

これに次いで、平吳の功臣を封ず。王濬ひとり先づ建業に入り、最も功あり、王渾

魏兵の調

一日を後れて、相及ばず、意甚だ愧忿す。こゝに於て、その功を校し、渾濬を上功となし、邑八千戸を増し、爵を進めて公となし、濬を中功となし、輔國大將軍となし、杜預、王戎と皆縣侯に封じ、諸將賞賜、差あり、時に濬の功重くして、報輕きを以て、之が爲に憤邑するものあり、乃ち遷して、鎮軍大將軍となす。

その歲、司隸統ぶるところを以て、郡に司州を置く。凡そ州十九、郡國百七十三、戸二百四十五萬九千八百四十、乃ち詔を下して曰く、漢末より四海分裂、刺史内は民事を親み、外は兵馬を領す。今天下一となる、當に干戈を輯戢し、刺史分職、皆漢家の故事の如くすべしと。悉く州郡の兵を去り、大郡には武吏百人を置き、小郡には五十人を置く。交州、牧、陶璜、州兵未だ宜しく約損して、單虛を示すべからざるを上言す。山濤亦た州郡の武備去るべからざるを言ふ。帝聽かず。後永寧の際に及び、盜賊群起、州郡制する能はず、天下遂に大に亂る、果して濬の言の如し。然かも、その後、刺史復た兵民の政を兼ね、州鎮愈よ重し。これより先、漢魏以來、羌胡鮮卑の降るもの多く、塞内諸郡に處る。郭欽上疏して謂ふ、平吳の威に及んで、漸く内地の雜胡を邊地に徙し、四夷出入の防を峻にし、先王荒服の制を明かにすべしと。帝又聽かず。之



を要するに武帝志弛み、治政前の如くならず、遂に翻つて禍亂の因をなせり。

### 第五十四章 武帝の末年

司馬氏は、司馬印の後なり、印、楚漢の間に在りて、殷王となり、河内に都せり。その死するや、漢その地を以て郡となし、子孫因つて家し、印より十三世にして懿に至り、懿の孫炎は、晋の世祖にして、遂に魏に代つて帝と稱し、蜀を平げ、吳を并せ、こゝに天下を一にせり。

三國の分争、すてに百年に半し、蒼生塗炭に苦しむこと久しく、支那本部は、こゝに始めて、一帝を戴き、大に勢威を張り、再び炎漢中葉の偉蹟を見るべかりしが、その然らざりしもの、武帝の荒淫、乃ち然るのみ。武帝は、魏の名儒王肅の外孫なり。家本と禮を傳ふ、故に郊廟の禮、多く肅の説に従ひ、その文帝及び王太后を喪する、素冠疏食、以て三年を終へ、また宗室を優遇し、務めて禮意を存せり。之に加ふるに、即位の始、江南に吳國あり、天下統一の望、正に殷なるを以て、自ら抑損して、大に政治を勵み、かつて雞頭裘を太極殿前に焼き、以て儉を示せしと雖も、すてに吳を平げ

淫武帝晩年の荒

山公の啓事

し後は、頗る遊宴を事として、聲色に耽るに至れり。これより先帝近世多く内寵に由りて、后に登ぼし、尊卑の席を亂るを以て、詔して妾媵を以て正嫡となすを得ざるの制を定めしも、之と前後して、又詔して、公卿以下の女を選びて、六宮に備へしめ、蔽匿あるもの、不敬を以て論じ、采擇未だ畢らざる間は、天下の嫁娶を禁ぜり。次いで、良家の女及び小將吏の女五千餘人を取つて、宮に入れて、之を選び、母子宮中に號泣し、聲外に聞こえしといふ。こゝに至り、すてに吳を滅ぼすや、その伎妾五千人を選びて、宮に入れ、掖庭殆んど萬人ならむとす。帝、かつて羊車に乗じ、その之くところを恣にし、至れば、便ち寢寐す。羊、竹葉を嗜み、鹽を喜ぶ、こゝに於て、宮人競うて竹葉を以て、戸に挿み、鹽汁地に灑ぎ、以て帝車を引く。后の父楊駿及び弟、洵、濟は、じめて事を用ひ、勢内外を傾く、時人之を三楊といふ。舊臣多く疎ぜらる。吏部尚書山濤、數ば規諷するところあり、帝知ると雖も、改むる能はず。濤、典選十餘年、一官缺くる毎に、輒ち才資爲すべきものを選び、啓して、數人を擬し、詔旨向ふところを得。然る後に、之を顯奏す、晋帝の用ふるところ、或は舉首に非ず、衆濤の輕重、意に任すを以て言と爲す。帝、益す之を親愛す。濤、人物を甄拔し、各題目を爲つて、之を奏し、時

武帝の失政

に山公の啓事といふ。晋初人才を任ずる濔の功多きに居る。然れども、今や漸くにして用ひられず、朝臣その人を得ざるもの、愈よ多からむとす。

三年春正月朔、帝親ら南郊に禱る。禮畢るや、司隸校尉劉毅に問うて曰く、朕は漢の何の王に方ぶべき。曰く、桓靈。帝曰く、何ぞ此に至る。毅曰く、桓靈官を賣つて、錢、官庫に入る。陛下官を賣つて、錢、私門に入る。此を以て之を言へば、殆んど如かざるなり。帝大に笑つて曰く、桓靈この言を聞かず、朕直臣あり、固より之に勝れりと爲すと。時弊すてに此の如きものあり。毅又人材の登庸、未だ法を得ざるを論じ、中正を廢せむを請ふ。帝、その言を善しとすと雖も、終に改む能はず。幾もなくして、毅卒す。齊王攸、德望日に隆なり、荀勗、馮紇、楊珧、之を惡み、大司馬となし、外に出して、都督青州軍事となす。攸、憤怨病を發し、血を嘔いて卒す。尙書張華、文學材識を以て、名一時に重く、論者皆三公となすべきを言ふ。華かつて攸を稱す、こゝに至つて、又退けられ、督幽州軍事となる。

在朝の重臣、漸く黜けられ、諫諍その人なし。帝意を聲色に極め、遂に疾を成すに

諸王の分封

至る、太康十年、后の父楊駿、皇弟汝南王亮を忌み、以て大司馬督豫州軍事となし、許昌に鎮せしむ。同時に諸王を分遣し、皇子南陽王柬を徙して秦王となし、關中に都督たらしめ、瑋を楚王となし、荊州に都督たらしめ、允を淮南王となし、揚州に都督たらしめ、並に假節、國に之かしむ。又王子乂を立て、長沙王となし、穎を成都王となし、晏を吳王となし、熾を豫章王となし、演を代王となし、皇孫適を廣陵王となす。帝、太子衷の不才を知る。然れども、適の明慧を恃み、故に廢立の志なく、復た王紘の謀を用ひ、太子の母弟東瑗、允をして、要害を分鎮せしめしこと、上に述べたるが如く、又楊氏の偏を恐れ、紘を以て北軍中候となし、禁兵を典らしむ。帝の謀るところは、曹魏骨肉相食むの慘禍を避け、帝室孤立の弊を防ぎ、漢初の諸侯王、呂氏の亂を戡定せしを學ばむと欲せしものなり。然れども、この遠圖は却つて豫想外の結果を生じ、八王の亂を惹起して、晋室衰微の因を爲し、兼ねて諸夷南下大陸分崩の傍因をなせり。その故、他なし、諸侯と相當り相制すべき重臣宿將、すてに其人を缺き、加ふるに嗣帝の暗愚、天下に君臨するに足らざればなり。

すてにして、帝疾篤し、楊駿ひとり禁中に侍し、大臣皆左右に在るを得ず。駿、因つ

武帝の遺落

て私意を以て、要近を改易し、その心腹を樹つ。會文帝少間色を正うして謂つて曰く、何を便ち爾を得むと。時に汝南王亮、尙ほ未だ發せず、乃ち詔を作り、亮を以て駿と同じく政を輔けしめ、且つ朝士聞望あるものを選び、之を佐けしめむと欲す。會文帝復た迷亂す、皇后奏して、その父駿をして、政を輔けしむ、帝之を領す。后華靡、何邵を召して、詔を作らしめ、駿に太尉都督中外諸軍事を授け、仍つて亮を趣して、鎮に赴かしむ。帝復た小間、汝南王來るや未だしやを問ふ、左右言ふ、未だ至らずと。遂に崩ず。太子衷、位に即く、是を孝惠皇帝となす。駿入つて太極殿に居り、虎賁百人を以て自ら衛る。亮敢て喪に臨まず、大司馬門外に哭し、表して葬を過ぎて行かむことを求む。或は亮に告げて、駿を討たむと欲す。駿密かに兵を遣して之を圖る。亮夜馳せて許昌に赴き、乃ち免る。

第五十五章 八王の亂

楊駿の輔政

惠帝すでに位に即き、楊駿外家の威に頼つて政を輔く、而かも自ら素より美望なきを知るや、普ねく封爵を進め、以て媚を衆に求めむと欲し、中外群臣、位を増し、

爵を賜ふこと差あり、ずてにして、駿、太傅大都督となり、黃鉞を假りて朝政を録し、百官己を總べて、以て聽かしむ。外戚の禍、將に成らむとす。將軍傅咸、數ば駿に告げて、其正を持せしむ。從はず。駿、賈后險悍にして、權略多きを以て、之を忌み、その甥段廣をして、機密を瀆し、張邵をして、禁兵を典らしめ、凡そ詔命あれば、帝の省し、訖るや、入つて太后に呈し、然る後に之を行ふ。馮翊太守孫楚、駿に謂つて曰く、公、外戚を以て、伊霍の任に居り、宗室とともに萬機に參せず、禍至る日なからむと。駿、從はず。すてにして、此言果して驗あり。

賈皇后は賈充の女、はじめ太子の妃たり、常に妬を以て、數人を手殺し、又戰を以て、孕妾に擲ち、子、刃に隨つて墮つ。武帝大に怒り、將に之を廢せむとす。楊后曰く、賈公、間社稷に大勳あり、豈に其女の妬を以て、之を忘るべけむやと。妃因つて廢されざるを得たり。后、數ば妃を厲ます。妃、その己を助くるを知らず、反つて以て恨と爲す。こゝに至つて、婦道を以て、太后に事へず、又政に預からむと欲し、楊駿の抑ふるところと爲る。殿中中郎孟觀、李肇、皆駿の禮せざるところなり。賈后、黃門董猛をして、觀、肇と謀り、駿を誅して、太后を廢せむと欲し、又楚王瑋に報せしむ。瑋、之を許す。

賈后楊氏を除く

乃ち入朝を求めずてに入るや、觀肇帝に啓し、夜詔を作り、駿の謀反を誣む。東安公  
繇に命じ、殿中四百人を帥ゐて之を討たしむ。璋、司馬門に屯す。皇太后、帛に題して、  
書を爲り、城外に射つて曰く、太傅を救ふものは、賞あらむと。賈后、因つて太后同じ  
く反すと宣言す。尋いて、殿中の兵出て、駿の府を焼き、之を殺し、遂に璉、濟及び張  
邵、段、廣等を收め、皆三族を夷す。賈后、詔を矯めて、太后を永寧宮に送り、復た群公を  
誣して、奏せしむ。中書監張華、議して云ふ、皇太后、罪を先帝に得るに非ず。今その親  
うするところに黨し、不母を聖朝に爲す、宜しく、漢、趙太后を廢するの故事に依り、  
武皇后と稱し、異宮に居り、以て終始を全うすべしと。有司奏し、請ひ、太后を廢して  
庶人となし、金墉城に眞く、時に元康元年三月なり。

楊駿等、すてに除かる。こゝに於て、汝南王亮を徵して、太宰となし、太保衛瑾と政  
に參せしむ。亮、衆を悦ばさむと欲し、駿を誅するの功を論じ、督將侯たるもの千八  
百十一人、亮頗る權勢を專にす。御史中丞傅咸、また數ば諫むれども、從はず。賈后の  
族兄、模、從舅郭彰、女弟の子賈謐、楚王璋、東安王繇と並に政に預る。賈后、暴戾日に甚

し。繇、密に后を廢せむを謀る。繇の兄澹、素より繇と惡しく、屢ば亮に譖す。詔して、繇  
の官を免じ、潯陽に徙らしむ。こゝに於て、謐の權勢、愈よ盛なり。

汝南王亮と楚  
王璋

太宰亮、太保瑾、北軍を以て中候たり。楚王璋、剛復にして、殺を好むに因つて、その  
兵權を奪ひ、裴楷をして之に代らしめむと欲す。璋、楷を怒つて、敢て拜せず。復た謀  
つて、璋をして國に之かしむ。璋乃ち自ら、賈后に昵す。后、璋を留めて、太子少傅を領  
せしむ。璋、因つて亮瑾を賈后に譖し、將に廢立を謀らむとするを誣め。后、素より、瑾  
を怨み、且つ二公政を乗り、己れ專恣を得ざるを患ふ。こゝに於て、帝をして手詔を  
作つて、璋に賜はしむ。璋、此に因つて、私怨を復せむと欲し、遂に、本軍を勸し、復た詔  
を矯めて、三十六軍を召し、その長史公孫宏、將軍李肇等を遣し、兵を以て、亮の府  
を圍み、清河王遐をして、瑾を收めしめ、皆之を殺す。璋の舍人岐盛、因つて、璋に説き、  
賈后を誅して、王室を正さしむ。璋、未だ決せず。會々天明なり。張華、董猛をして、賈后  
に説かしめて曰く、楚王、すてに二公を誅すれば、威權盡く之に歸せむ。人主何を以  
て自ら安からむ。宜しく專殺の罪を以て之を誅すべしと。乃ち殿中將軍をして、驢  
虞幡を齎し、衆を麾かしめて曰く、楚王、詔を矯む、聽く勿れと。衆皆仗を釋く。遂に、璋

を執へて、之を斬り、宏盛は三族を夷す。

張華と張劭

賈后又朝を專にし、模を以て散騎常侍となし、侍中を加ふ。謚、后と謀り、張華庶姓、逼上の嫌なく、而かも儒雅にして籌略あり、衆望の依るところたるを以て、叙して侍中、中書監となし、裴頤を侍中となし、裴楷を中書令となし、侍中を加へ、右僕射王戎と並に機要を管せしむ。華、忠を帝室に盡し、遺闕を彌縫す、后兇險と雖も、猶ほ敬重すを知る。模、頤と心を同らし、政を輔く。故に數年の間、闇主朝に在りと雖も、而かも朝野安靜なり。

賈後の暴恣

賈後の暴戾、なほ止まず、二年春二月、故の皇太后楊氏を金墉城に弑す。時に太后尙ほ侍御十餘人あり、賈后悉く之を奪ひ、膳を絶つこと、八日にして卒す。賈后、その靈あらむことを恐れ、覆して之を殯し、仍つて諸の厭術を施す。すてにして、淫虐日に甚しく、遂に太醫令程據等と私す。裴頤、賈模及び張華と議し、后を廢し、太子の母謝淑妃を立てむとす。模、華曰く、主上自ら廢黜の意なく、而して、吾等之を專行し、もし上の心、以て然らずと爲せば、將に之を奈何せむとす。且つ諸王方に、疆、朋黨各異

恐らくは、一旦禍起り、身死して國危く、社稷に益なからむと。因つて數ば禍福の戒を陳して、之を矯正せしむ。模、旦夕、その從母廣城君に説き、賈后を戒諭し、太子に親厚ならしむ。模、亦た數ば之を言ふ、后反つて、模を以て己を毀るとなし、之を疎んず。模、憂憤して死す。頤は、後の親屬なりと雖も、雅望素より隆、四海唯だ、その權位に居らざるを恐る、すてにして、尙書僕射に拜し、又詔して、門下事に專任せしむ。頤、表を上つて固辭す。或は謂つて曰く、君以て言ふべく、ひば當に言を中宮に盡すべし、言うて從はざれば、當に遠く引いて、去るべし。もし二者立たざれば、十表ありと雖も、以て免れ難からむと。頤、從ふ能はず。

惠帝の昏愚と朝臣の腐敗

帝、人と爲り懸疎、その太子たりしとき、術、權かつて武帝に侍し、陽つて醉ひ、前に跪き、手を以て床を撫して曰く、この座、惜むべしと。武帝悟り、尙書の疑事を密封し、太子をして、之を決せしむ。賈氏大に懼れ、外人を倩ひ、草を具して代り對へ、太子をして自ら寫さしめ、因つて廢せられざるを得たり。即位の後、常に華林園に在り、蝦蟇を聞く、左右に謂つて曰く、この鳴くものは、官の爲にするか、私の爲にするかと。

時に天下荒饑、百姓餓死す。帝之を聞いて曰く、何ぞ肉糜を食はざる。是に由つて、權群下に在り、政の出づる、多門勢位の家、更も相薦托し、互市の如きあり、賈郭恣横、貨賂公行、南陽の魯褒、錢神論を作つて、之を譏る。又朝臣務めて苛察を以て、相高らし、疑議ある毎に、各私意を立て、刑法一ならず、獄訟繁滋、尙書劉頌、上疏して極言す、乃ち詔を郎令史に下し、復た法を出し、案を駁するもの、事に随つて以聞す、然れども亦た革む能はざるなり。頌、平陽の韋忠を張華に薦め、華之を辟す。忠、疾と稱し、辭して起たず。人その故を問ふ、曰く、張茂先、華にして實ならず、裴逸民、欲にして厭くなく、典禮を棄て、賊后に附く、これ豈に大丈夫の爲すところならむや。常に恐る、その深淵に溺れて、餘波我に及ばむことを、况んや袋を棄けて、之に就くをや。と、關内侯索靖、天下の將に亂れむとするを知り、洛陽宮門の銅駝を指し、嘆じて曰く、必ず汝が荆棘の中に在るを見るべきのみと。

太子通の廢位

太子通は、賈后の出に非ず。はじめ、帝太子たりしとき、武帝、才人謝玖を以て、之に賜うて通を生む。宮中、かつて、夜、火を失す。帝、樓に登つて、之を望む。通、年五歳、帝の標を牽いて、閣中に入つて曰く、暮夜倉猝、宜しく、非常に備ふべく、人主を照見せしむべからずと、帝之を奇とし、かつて之を稱して、宣帝に似たりといひ、天下咸な之を歸仰す。惠帝の痴騷を以て、幸に繼嗣を廢せられざりしもの、實に通の明慧。武帝必ず次を以て之に傳へむと欲したればなり。故に惠帝の位に即くや、直に立てられて、太子となり、母謝氏を淑妃となす。賈公常に謝氏を別室に置き、太子と相見るを聽さず。皇后の母、廣城君郭槐、后に子なきを以て、常に勸めて、太子を慈愛せしめ、韓壽の女を以て、太子の妃となさむと欲し、太子亦た之を欲す。壽の妻、賈午及び后皆聽かず。因つて、爲に王衍の少女を聘す。太子、衍の長女美にして、后、賈謐の爲に之を聘せしを聞き、心平かなる能はず。頗る以て言となす。廣城君、すでに死し、賈后、趙粲、賈午と太子を害せむを謀る。九年十二月、后詐つて、帝の不豫と稱し、太子を召して、入朝せしめ、すてに至るや、別室に置き、婢をして、舞を陳じ、帝命を以て酒卮を賜ひ、逼つて盡く之を飲ましめ、遂に大に酔ふ。后、黃門侍郎潘岳をして、書を作らしめ、詔と稱して、之を書せしむ。その文に曰く、陛下宜しく自ら了るべし、自ら了らざれば、吾當に入つて之を了らしむべし。中宮又宜しく、速かに自ら了るべし、自ら了らざれば、吾當に手づから之を了らしむべし。并せて謝妃とともに、刻期を要し、兩つな

がら廢して患害を掃除せむと太子醉迷遂に之を寫す字半にして成らず后之を補成し以て帝に呈す帝式乾殿に幸し公卿を召して入らしめ太子の書を以て之に示して曰く遙の書かくの如く死を賜はむと諸王公言ふものあるなく張華裴頠之を諫め日西するに至つて決せず后事の變ぜむことを懼れ乃して表し太子を免じて庶人と爲す詔して之を許しその子寤威尙を以て皆金墪城に幽す王衍自ら表して離婚す又謝淑妃を殺し寤亦た尋いて卒す賈后猶ほ足れりとせずその翌永康元年正月黃門をして自首し太子と逆を爲さむと欲すといはしめ遂に千兵を遣して太子を衛り之を許昌に幽し三月太醫令程據をして毒藥を調せしめ黃門孫慮を遣して許昌に至らしめ太子に逼つて之を殺す

はじめ太子の廢せらるゝや衆情忿怒す衛督司馬雅東宮に給事し殿中郎士琦と賈后を廢して太子を復せむとし張華裴頠常に安んじて位を保ちともに行ひ難く權右軍將軍趙王倫兵柄を執り性貪賈假りて事を濟すべきを以て孫秀に説き因つて倫に結ぶ然れども倫素より賈后に黨せしを以て太子必ず之を徳とせ

趙王倫の變

ざるを料り賈后をして太子を害せしめ然る後后を廢して太子の爲に警を報じ以て大に志を得むとし人をして反問を行はしむ太子の鳩殺實に此に因るその四月趙王倫孫秀司馬雅をして張華に告げて黨に入らしむ華之を拒む雅怒つて曰く乃將に頭に加はらむとす猶ほ此言を爲すかと顧みずして出づ倫乃ち詔を矯めて三部司馬に敕して曰く中宮賈謐等と太子を殺す今車騎をして入つて中宮を廢せしむ汝等命に従へば爵關内侯を賜ひ従はざれば三族を誅せむと衆皆之に従ひ門を開いて夜入る齊王冏を遣し百人を將る閤を排し帝を迎へて東堂に幸せしめ賈謐を召して之を斬り遂に后を廢して庶人となし趙粲賈午を收め竟に八座以上を召し皆夜殿に入らしむ倫陰かに秀と位を篡せむことを謀り先づ朝望を除き且つ宿怨を報むと欲し乃ち張華裴頠解系等を殿前に召し遂に皆之を斬り三族を夷す倫賈庶人を金墪城に送り董猛孫慮程據等を誅し自ら都督中外諸軍事となり侍中孫秀等並に兵權に據り文武侯に封ぜらるゝもの數千人詔して故の太子遙の位號を復し謚して愍懷といひその子威を立て臨淮王となし翌月皇太孫となすすてにして倫詔を矯め使をして金屑酒を齎して金墪

賈后の死

淮南王允の死

城に至らしめ、賈后に死を賜ふ。

允、淮南王允を以て、驃騎將軍領中護軍となす。允、性沈毅、宿衛將士皆之に畏服す。允、倫秀の異志あるを知り、之を討たむを謀る。倫秀、允を轉じて太尉となし、外、優崇を示し、實はその兵權を奪ふ。允、病と稱して拜せず。秋八月、遂に國兵數百人を率ひ、直に出で大呼して曰く、趙王反す、我之を討つ、從ふものは左袒せよ、と。從者甚だ衆く、遂に相府を圍む。倫與に戰つて屢ば敗れ、死するもの千餘人。允、陳を承華門に結ぶ。前中書令陳淮、允に應ぜむと欲し、帝に言ひ、伏胤を遣し、白虎幡を持し、以て圍を解かしむ。倫の子汝陰王虔、門下省に在り、陰かに胤と誓つて曰く、富貴當に之を共にすべし、と。胤乃ち詐つて、詔あり、淮南王を助くと言ひ、允之を覺らず、陳を開いて詔を受く。胤因つて之を殺し、坐して夷滅せらるもの數千人。

すてにして、孫秀議し、倫に九錫を加ふ。吏部尚書劉頌、之を諫むれども聽かず。張林之を殺さむと欲す。秀曰く、張表を殺して、すてに時望を傷く、復た頌を殺すべからず、と。乃ち止む。遂に詔を下して、倫に九錫を加ふ。倫及び諸子、頑鄙にして讒なく、秀、狡黠貪淫、ともに事を共にするもの、皆邪佞の士、惟だ營利を競うて、深謀遠略な

く、志輒ち乖異し、互に相憎疾す。秀の子會、形貌短陋、奴僕の下なるもの、如し。秀、之をして帝の女河東公主を尙せしむ。賈后すてに廢死せしを以て、孫秀の黨、尙書郎羊元之の女を立て、皇后となす。

西邊の騷擾

趙王倫、すてに政を專にし、自ら九錫を加へ、時事愈よ非、叛亂將に生ぜむとす。詔して益州刺史趙廆を以て、大長秋となし、成都内史耿滕を以て、之に代らしむ。廆は賈后の姻親なり。徵さるゝを聞いて、甚だ懼れ、且つ晋室衰亂せるを以て、陰かに蜀に據るの志あり、乃ち倉廩を傾けて、流民を賑はし、厚く李特兄弟を遇し、以て爪牙となす。特等勢を恃み、衆を聚めて、盜をなす。耿滕すてに州に至る、文武千餘人、之を迎ふ。廆、兵を遣して、逆へ戰ひ、滕敗死し、復た西夷校尉陳總を殺す。廆遂に自ら益州牧と稱し、僚屬を置き、守令を易ふ。李庠等四千騎を以て、廆に歸す。廆委して、以て心替となし、六郡の壯勇萬人を指令せしめ、以て北道を斷つ。その翌、永寧元年、散騎常侍張軌、時に難多きを以て、陰かに河西を保據するの志あり、求めて涼州の刺史となる。時に盜賊縱橫、鮮卑寇を爲す、軌悉く討つて、之を破り、その威、西土に著はる。張氏涼土に保據する、此に始まる。



趙王倫の篡位

西邊の騷擾すてに此の如く、趙王篡奪の志愈々盛なりすてにして、逼つて、璽綬を奪ひ、法駕を備へ、宮に入つて即位す。帝出て、金墪城に居る、尊んで太上皇となし、皇太孫を廢して濮陽王となし、次いで之を殺す。孫秀を以て侍中中書監となし、その餘の黨與、皆卿將となり、奴卒亦た爵位を加へ、朝會する毎に貂蟬坐に盈つ、時人之が諂を爲つて曰く、貂足らず、狗尾續く、と。この歲天下舉ぐるところの賢良秀才、孝廉皆試みず、郡國計吏及び大學生年十六以上のもの、皆吏守令に署し、赦日職に在るもの、皆侯に封じ、郡守綱紀、並に孝廉廉吏となる。府庫の儲以て賜與に供するに足らず、侯たるべきもの、多く印を鑄つて及ばず、或は白版を以て之を封ず。

趙王兵を起す

齊王冏、はじめ功を以て遊擊將軍に遷されしが、その意頗る滿たず、孫秀之を覺り、且つその内に在るを憚り、平東將軍となし、先に出して許昌に鎮せしむ。三月、冏使を遣し、成都王穎、河間王顒、常山王乂及び新野公歆に告げしめ、檄を征鎮に移し、稱して曰く、逆臣孫秀、趙王を迷誤す、當に共に之を討つべし、命に従はざるものは、誅三族に及ばむ、と。倫、秀兵起りしを聞き、大に懼れ、孫輔、張泓、司馬雅を遣し、冏を拒がしめ、秀の子會及び士猗許起をして兵を率ゐて、穎を拒がしむ。

趙王倫の死

四月、張泓等、齊王冏と穎上に戦ひ、屢ば之を取る。泓、冏の營を攻む、冏、兵を出して、その別將を擊破し、泓等乃ち退く。成都王穎の前鋒、朝歌の西、黃橋に至り、孫會等の爲に敗らる。穎退かひと欲す。盧志曰く、今我が軍利を失ひ、敵我を輕ずるの心あり、若かず、更に精兵を選び、星行道を倍し、敵の不意に出てむには、これ用兵の奇なり、と。穎之に従ふ。倫、すてに黃橋の功を賞し、その將、皆節を持ち、軍政一ならず、又勝を恃んで、備を設けず、穎之を澳水に擊ち、大に敗り、勝に乘じ、長驅して、河を渡る。冏の兵を起してより、百官軍士、皆倫秀を殺さむと欲す。河北の軍、敗るゝに及び、左衛將軍王輿、營兵を率ゐて宮に入り、三部司馬、内應をなし、孫秀を斬り、黃門をして倫を將ゐて第に還らしめ、帝を金墪城に迎へ、端門より入り、殿に居る。群臣頓首して罪を謝し、使者を分遣して、三王を慰勞し、倫に死を賜ひ、その子を收めて、之を誅し、凡そ百官倫の爲に拜されしもの、皆斥免し、臺省府衛、僅に存するものあり。穎、穎皆洛陽に至る。兵を興してより、六十日、戦闘して死するもの、十萬人に近し。

齊王冏、洛陽に入る、甲士數十萬、咸京師に震ふ、詔して、大司馬となし、九錫を加へ、

備物典策、宣景文武輔政の故事の如し、成都王穎を將軍都督中外諸軍事、假黃鉞、錄尚書事となし、九錫を加へ、河間王頤を侍中太尉となし、常山王父を撫軍大將軍となし、新野公歆の爵を進めて王となす。歆、頤に説いて、穎の兵權を奪はしむ。父亦た穎に勸めて、頤を圖らしむ。聞くもの憂懼す。盧志、穎に謂つて曰く、大王徑に前んで河を濟る、功與に二なし、然れども、兩雄は俱に立たず、宜しく太妃の微疾に因つて、還つて定省するを求め、重を齊王に委し、以て四海の心を收むべし、と。穎之に従ひ、表して、頤の功德、宜しく委するに萬機を以てすべきを稱し、即ち辭して鄴に歸る。是に由つて、士民の譽、皆穎に歸す。

齊王頤の死

齊王頤、久しく政を專にせむと欲し、帝の子孫ともに盡き、大將軍穎、次いで立つの勢あるを以て、武帝の孫清、河王暉を立て、太子となす。時に年八歳、頤を以て太子太師となす。時に泰安元年五月なり。その九月、齊王頤亦た難を免れず。頤、すてに權を擅にして、驕奢、中外望を失ふ。頤、河間王頤、本と趙王倫に附きしを以て、之を恨む。頤の長史李含、頤に説いて曰く、齊王親を越えて政を專にし、朝廷目を側つ、今長沙王に檄して、齊を討たしめば、齊王必ず長沙を誅せむ。吾、因つて齊の罪を鳴して、

之を討ち、成都王を立て、逼を除いて、親を建て、以て社稷を安ぜば、大勳なり、と。頤之に従ひ、表して、頤の罪を陳し、長沙王父に請ひ、頤を廢し、穎を以て政を輔けしめむ。といひ、遂に兵を起し、李含、張方等をして、洛陽に趣かしむ。十二月、頤の表、至る。頤大に懼る。すてにして、李含、陰盤、西安府臨潼縣に屯し、張方の軍、新安に軍し、父に檄して、頤を討たしむ。父、左右百餘人を將ひ、馳せて宮に入り、諸門を閉ぢて、天子を奉じ、大司馬府を攻め、城内に大戦す。帝、上東門に幸す。矢、御前に集り、群臣死するもの相枕し、連戰三日、頤の衆、大に敗れ、遂に頤を執へて、之を斬り、同黨皆三族を夷す。含等兵を引いて、長安に還る。父、朝廷に在りと雖も、事巨細となく、皆鄴に就いて、穎に咨る。河間王頤、はじめ、李含の計を用ひ、齊王頤をして、長沙王父を殺さしめ、その後、之を討ち、遂に帝を廢し、成都王穎を立て、己れ相たらむと欲す。すてにして、謀るところの如くならず、穎亦た功を恃んで、驕奢、百度廢弛し、父の内、に在るが故に、其欲を逞うするを得ざるを嫌ひ、頤とともに父を攻めむと欲す。盧志、諫むれども、聽かず。翌二年八月、穎、頤とともに、父、功を論じて、平ならず、僕射羊元之、將軍皇甫商と専ら朝政を擅にするを表し、父を遣して、國に還らしめむを請ふ。詔して曰く、穎、頤、敢て兵

河間成都兩王の反

を擧げて、關に向はゞ吾將に親ら六軍を帥ゐて、之を討たむとす。こゝに於て、父を以て太尉都督中外諸軍事となす。九月、頤、張方を以て都督となし、精兵七萬を將ゐて、東洛陽に趨かしむ。頤亦た兵を引いて、朝歌に屯し、陸機を以て、前鋒都督となし、王粹、牽秀、石超等、軍二十餘萬、洛陽に向ふ。帝、十三橋に如く、父、皇甫商をして、萬餘人を將ゐて、張方を宜陽に拒がしむ。方襲うて、之を敗る。帝、芒山に軍す。羊元之、憂懼して卒す。遂に、族氏に幸し、牽秀を撃つて、之を走らす。遂にして、張方早く京城に入つて、大に掠め、死者萬計。十月、帝、族氏より宮に還らむとす。頤、將軍馬咸をして、陸機を助けしむ。父、帝を奉じて、機と建春門に戰ふ。父の司馬王瑚、數千騎をして、戟を馬に繋がしめ、以て、咸の陣を突く。咸の軍亂る。執へて、之を斬る。機、軍大に敗れ、七里淵に赴く。死者積むが如く、水之が爲に流れず。機これに因つて、人の爲に隣せられ、その弟雲等とともに殺さる。

十一月、長沙王、父、帝を奉じて、張方を攻む。方の兵、乘輿を望み見て、皆退き走り、遂に大に敗る。衆懼れて、夜遁れむと欲す。方曰く、勝負は、兵家の常、善く兵を用ふるものは、能く敗に因つて、成を爲す。今我更に前んで、壘を作り、その不意に出づ。これ奇

策なりと。乃ち夜潜かに進んで、洛城に逼ること七里、壘を築くこと數里、外廩穀を引き、以て軍食を足らす。父、遂に戰勝ち、以爲へらく、方、憂ふるに足らずと。方の壘成るを聞き、之を攻むれども、利あらず。頤、進んで、京師に逼る。公私窮乏、米石に萬錢、詔して、行くとこゝろ一城に命ずるのみ。劉沈、雍州刺史たり、驃騎主簿祖述曰く、劉沈忠義果毅、雍州の兵力、河間を制するに足る。宜しく啓上し。沈に詔し、兵を發して、頤を襲ふべし。頤、窮窘すれば、必ず張方を召し、以て自ら救はむ。これ良策なりと。沈、詔を奉じて、七郡の衆を合す。凡そ萬餘人、長安に赴く。

その翌永興元年、父、屢ば頤の兵を破り、而して、未だ奉上の禮を虧かず。城中糧食日に窘すれども、士卒離心なし。張方、以爲へらく、洛陽、未だ克つべからずと。乃ち長安に還らむと欲す。東海王、越事の濟らざるを慮り、潜かに殿中の諸將と、夜、父を收めむとし、帝に啓して、詔を下さしめ、父の官を免じて、金墉城に置き、大赦改元す。城、すてに開く。將士外兵盛ならざるを見て、之を悔む。更に刳して、父を出し、以て頤を拒がむを謀る。越懼れ、人をして、密に張方に告げしむ。方、遂に父を弑殺す。頤、京師に入り、復た還つて、鄴に鎮す。詔して、頤を以て丞相となし、越をして、尙書令を守らし

長沙王父の死

ひ、穎、石超等をして兵を帥ゐて屯し、十二城門殿中に宿せしめ、忌むところの者皆之を殺し、悉く宿衛の兵を代へ去らしむ。

頤軍を鄭に屯し、東軍の聲援をなす。劉沈、すてに兵を起せしを聞き、急に張方を召す。方、洛中の官私奴婢萬餘人を掠めて、西す。沈、渭を渡つて軍し、頤と戦つて屢ば之を敗る。沈、衛博、皇甫濬をして、精甲五千を以て、長安を襲はしめ、其門に入つて力戦し、頤の帳下に至る。沈の兵來ること遅く、頤の黨張輔、その繼ぐなきを見、博及び濬を殺す。沈、南に走つて獲らる。頤に謂つて曰く、知己の惠輕く、君臣の義重し。沈、天子の詔に違ひ、強弱を量り、以て苟も全うすべからず、袂を投ずるの日期するに、必死を以てす。蒞、隨の戮、その甘きこと、養の如し、と、頤、怒つて之を斬る。

東海王越の敗

長沙王、父雍州刺史劉沈、すてに殺され、頤、帝を擁して專恣なり。二月、頤、皇后羊氏及び皇太子覃を廢し、次いで、頤、頤を奉じて皇太弟となし、自ら太宰雍州牧となる。すてにして、頤、僭侈日に甚しく、嬖倖事を用ひ、大に衆望を失ふ。東海王越、右將軍陳珍と兵を勸して、雲龍門に入る。詔して三公百僚を召して戒嚴し、頤を討つ。石超、鄴

に走る。是に於て、皇后羊氏及び太子覃を復す。越、帝を奉じて北征し、前侍中嵇紹を召して、行在に至らしめ、又撤して四方の兵を召す。安陽(河南彰德府治)に至る。比、衆十餘萬。穎、群僚を會して、計を問ふ。東安王繇曰く、天子親征、宜しく甲を釋き、縞素出で、迎へ、罪を請ふべし、と。穎、從はず。石超を遣し、衆を率ゐて、拒ぎ戰はしむ。乘輿蕩陰(彰德府湯陰縣)に敗績す。帝の頰、三矢を中つ。百官侍御皆散ず。嵇紹、朝服、輦に登り、身を以て帝を衛る。兵入つて紹を引いて、之を斫る。帝曰く、忠臣なり、殺す勿れ。對へて曰く、太弟の命なり、惟だ陛下一人を犯さざるのみ、と。遂に紹を殺し、血、帝の衣に濺ぐ。穎、帝を迎へて鄴に入り、建武と改元す。左右帝の衣を洗はむと欲す。帝曰く、嵇侍中の血、洗ふこと勿れ、と。陳、陳、上、官、已、太子覃を奉じて、洛陽を守り、越、功成らざるを以て、復た東海に歸り、孫惠の言に從ひ、藩方に結び、同じく王室に盡さむと欲す。穎、東安王繇の前議を怨んで、之を殺す。繇の兄の子瑯琊王睿、沈敏にして度量あり、左將軍となり、東海參軍王導と善し、導、朝廷多故なるを以て、毎に睿に勸めて、國に之かしましむ。繇の死するに及び、睿、帝に從つて鄴に在り、禍の及ばむを恐れ、將に逃れ歸らむとす。穎、先づ關津に敕して、貴人を出だすを得るなからしむ。睿、河陽に至

り津吏の止むるところとなる。従者宋典、後より來り、鞭を以て窘を拂ひ、笑つて曰く、長官を舍し、貴人を禁ず。汝亦た拘へらるゝか。と。吏乃ち聽過す。洛陽に來り、大妃夏侯氏を迎へて國に歸る。

王浚兵を起す

はじめ、三王の趙王倫を討つや、幽州都督王浚衆を擁し、兩端を挟み、所部の士民を禁じて、三王の召募に赴くを得ざらしむ。顯、陰かに之を圖れども、克たず。こゝに於て、詔を稱して、之を徵す。浚遂に鮮卑の段務目塵、烏桓の羯末及び并州刺史東海公騰と同じく、兵を起して、顯を討つ。顯、石超を遣して、之を討たしむ。

すてにして、王浚等、幽并の兵を合して、石超を平棘に破り、勝に乗じて、軍を進め、鄴中奔潰す。顯數千騎を將り、帝を奉じ、轎車に御して南奔す。時に、兪卒齋らすものなく、中、黃門被囊中、錢二千あり、詔して、之を貸り、道中に於て、飲食を買ふに、瓦盆を以てす。溫に至つて、將に陵に謁せむとす。帝、履を喪ふ。従者の履を納れ、下拜して流涕す。張方帝を迎へて宮に還る。奔散するもの、漸く還り、百官稍や備はる。浚等鄴に入つて、暴掠し、復た薊に還る。

長安の遷駕

張方洛に在ること、すてに久しく、剽掠殆んど竭く。乃ち兵を引いて、殿に入り、乘るところの車を以て、帝を迎へ、逼つて車に上らしむ。帝涕を垂れて、之に従ひ、方をして、車を具し、宮人寶物を載せしむ。軍人因つて後宮を肆掠し、府藏を分爭し、流蘇武帳を割いて、馬帳となし、魏晉の積蓄地を掃うて餘すなし。方、帝及び顯、豫章王熾等を擁して、長安に趨く。顯、これを薊上に迎へ、征西府を以て宮となす。惟だ僕射荀藩及び司隸劉暉等、洛陽に在つて留臺となり、制を承けて事を行ふ。これより先、張方重ねて京城に入るや、皇后及び太子を廢せり。こゝに至りて、羊后を復し、次いで太子を定めむを議す。帝の兄弟二十五人、時に存するもの、惟だ顯、熾及び吳王晏のみ。晏は材庸下、熾は冲素學を好む。故に顯、遂に皇太子顯を廢し、詔して、第に還らしめ、遂に熾を立て、顯を以て中外に都督たらしめ、又東海王越を以て太傅となし、顯とともに帝室を夾輔せしめ、王戎は朝政を參録し、王衍は左僕射となり、張方は中領軍、錄尚書事となり、州郡に令して、苛政を蠲除せしめ、民を愛し、本を務め、清通の後、當に東京に還るべしといふ。當時四方乖離、禍難已まざるを以て、この詔を下して、之を和解し、少安を獲むを冀ふのみ。然れども、時すてに晚く、四方の叛亂、愈よ甚

張方の專恣

張方專恣禁ぜず、永興二年四月、復た羊后を廢せり。その七月、東海中尉劉洽、張方  
かつて車駕を劫遷せしを以て、東海王越に命じて、之を討たしむ。越、檄を山東に傳  
へ、義旅を糾率し、天子を迎へて、舊都に還らむとす。徐州長史王修、刺史東平王楙に  
説き、州を以て之に授く。越乃ち司空を以て、徐州都督を領し、楙自ら兗州刺史とな  
る。こゝに於て、范陽王越及び幽州都督王浚等、ともに越を推して盟主となす。越、輒  
ち刺史以下を選置し、朝士多く之に赴く。

八月、東海王越、瑯琊王睿を留めて、下邳を守らしめ、范陽王越、許より蒙陽に屯せ  
むとす。豫州刺史劉喬、之を拒ぎ、因つて兵を引いて、越を許に收め、その子祐をして  
越を靈壁に拒がしむ。東平王楙、兗州に在り、徵求已まず、郡縣命に堪へず。越、荀暉を  
して、兗州に還り、楙を青州に徙さしむ。楙、命を受けず。遂に劉喬に令す。暉、山東の兵  
起るを聞いて、甚だ懼れ、成都王穎を表して、河北諸軍事に都督たらしめ、復た鄴に  
鎮し、越等に詔して、各國に就かしむ。越等従はず。こゝに於て、張方を都督となしと

張方の死

もに許昌に會せしめ、穎をして石超等と河陽に據つて、喬の繼援たらしむ。すてに  
して、越等の軍敗れて河北に走る。

はじめ、越の兵を起すや、人をして太宰順に説き、帝を奉じて洛に還らしめ、約し  
て、與に陝を分つて、伯たらむとす。順、之に従はむと欲す。張方、自ら罪重くして、誅せ  
られむことを懼れ、因つて、順に謂つて、曰く、今形勝の地に據り、國富み兵彊く、天子  
を挟み、以て號令す。誰か敢て従はざらむ。奈何ぞ、拱手して、制を人に受けむと。順乃  
ち止む。劉喬、すてに越を敗り、進んで、陽武に屯するに及び、王浚、その將祁弘を遣し、  
突騎鮮卑烏桓を以て、越の先驅たらしむ。順懼れて、兵を罷めむと欲し、方の従はざ  
るを恐れ、光熙元年正月、帳下に誘うて、之を殺し、首を越に送り、以て和を請ふ。越、許  
さず。祁弘等をして、鮮卑を帥ゐて、西、車駕を迎へしむ。成都王穎、さきに洛陽に據り  
しが、宋胄等進み、逼りしに因り、長安に奔る。

夏四月、太宰順、兵を遣して、祁弘等を湖に拒ぐ。弘擊つて、之を破り、遂に西、關に入  
り、又その兵を霸水に破る。順、單馬逃れて、太白山に隱る。弘等、長安に入る。所部の鮮  
卑、大に掠め、百官奔散す。弘等、帝を奉じ、牛車に乗じて、東に還らしむ。こゝに於て、關

成都王頴の死

中皆東海王に服し、頴は城を保つのみ、その八月、越を以て、太傅錄尚書事となし、范陽王虓を司空となし、鄴都に鎮す。  
邾弘の關に入るや、成都王頴、武關より新野に奔る。會、主荆州郡督新城公劉弘卒し、その司馬郭勣、亂を作し、頴を奉じて、主となさむと欲し、克たずして、誅せらる。頴遂に北河を降り、故の將士を收め、公師藩に赴かむと欲す。頓邱太守馮嵩、執へて鄴に送る。范陽王虓、之を幽し、荀晞亦た撃つて藩を斬る。十月、虓卒す。長史劉輿、頴素より鄴人の附くところたるを以て、復た亂を爲さむことを恐れ、僞つて詔を稱して、死を賜ふ。

十一月、帝麴を食ひ、毒に中つて崩す。或は曰く、太傅越之を鳩すと、羊后自ら太弟に於て、嫂たるを以て、太后たるを得ざるを恐れ、將に故の太子清河王覃を立てむとす。侍中華混、露版馳せて太傅越に告げ、太弟熾を召して、宮に入れ位に即かしむ之を懷帝となす。羊后を尊んで、惠皇后といひ、弘訓宮に居らしむ。その翌月、太傅越詔を以て、河間王頤を徵して、司徒となす。南陽王模、許昌より將を遣し、邀へて之を殺す。

晋室の衰微

惠帝の人となり、痴騷黠愚、殊に甚しく、すでに至尊の位に在り、却つて制を人に受け、たとへば、嬰兒股掌の上に弄せらるゝ如く、東せむと欲すれば、東し、西せむと欲せば、西し、適として主たるなし。是を以て、始に母后を保せず、次に妻子を保せず、終に其身を保せず、まことに憫むべきなり。その初、賈后事を用ひ、妬淫の性、暴虐をなして、より、亮、瑋、倫、頤、父、頴、阿、越の八王、背離相争ひ、骨肉殺害し、武帝が皇孫、適を立てむとせし、夙願、遂に空しく、騷亂愈々甚しく、帝がかつて意を用ひて、輕重の勢を制せしと、確信せし、藩屬も、殆んど寸功なきのみならず、愈々大紛亂を醸成し、遂に胡騎南下の禍を成さしめき。

顧みれば、西晋は三國を滅して、支那本部を統一せしも、治平の實は、武帝の末年十歳に過ぎず、次いで來れる五胡十六國の騷擾は、ひとり支那本部中の争亂に止らず、蠻族の侵入、その因をなせしものにして、前に比して、更に甚しきあり。こゝに肥述の便を圖りて、悉く次卷に譲りしも、惠帝の當時、すでに其亂を發生せしことを忘却すべからず。その後、懷愍の二帝を経て、晋は一旦滅亡し、僅に江南半壁の地を保ち、東晋と稱せしも、中興の目、固より虚號のみ、されば、惠帝の世、晋社すでに殆

んど滅亡せしといふも、殆んど不可なし。予はこゝに本巻を終り、次に五朝十六國の起原と、晋室の南渡とに筆を著け、東亞大陸の大混亂に就いて、新に叙述を試みむとす。而して、その前、特に一章を設けて略論すべきは、漢末より以後、一般民情の考察、即ち是れなり。予は常に外部に起伏する事實を述ぶるとともに、内部の精神的な生活、即ち社會事象の根本的基礎に就いて、出來べくむば、常に考究を怠らざらむを期すればなり。

### 第五十六章 魏晋以後士風の頹廢

さきに、漢代思想界の趨勢を考察せしき、予が提供せし結論は實に下の如くなり。武帝が儒教を表章せし後、北方思想は政治上に於て、絶對の威力を逞うするを得しも、南方思想は、決して、その爲に浪滅せず、社會上に於て常にその勢力を逞うし、その根柢を深く人心の奥底に托したりと、かくの如くして、兩教並立し、後者は、むしろ潛勢力を蓄積するの機會を得、早晚必ず爆發せずむば止まざるの狀態を成せり。換言すれば、春秋戰國の際に迸生せし厭世思想は、漢の中葉以前、文景

伏南方思想の起

の豊富、武帝の盛治に際し、物質的饒富を以て、殆んど一時鎮壓されしと雖も、こゝに至りて、再び其勢を鼓せむとせり。而して、之を激勢せし、理因一にして止まらず。漢家外戚の禍、黨錮の變、莽操の篡奪、就中その多くは崇儒の餘弊なり。こゝに於て、自然の反動として、愈よ黄老の盛行を見るに至れり。

然れども、魏晋以後の厭世思想に對して、至大の關係を有するものは、三國の時勢と當時の強國たりし魏室の少恩とに歸せざるべからず。黄巾叛亂、爭亂相踵ぎ、炎運すてに振はず、その極、遂に三國の分争となる。當時混亂の世、尙ぶところは攻城野戰、權謀術數の士に在り、學問技藝は、不急の閑事にして、學者は殆んど當世に用なし。而して、學者は、大抵世間的勇氣に乏しきものにして、尋常一様政治的大運動の軌道を外にし、當時の天下に於て、一身の安全を求むべきに非ざるを以て、自然の勢、厭世に趨向したり。その次に、魏室の少恩に至りては、愈よ甚しきものあり。曹操すてに權謀を以て下を馭し、到底慘虐、虐少きの嫌なき能はず。苟或の如きは、一時の人才、曹操の爲に盡せしもの少からず、而して、或の志ざすところは、實に漢室の復興に在り、故に操が篡奪の志あるを見るや、快々として樂まず、遂に藥を飲

三國の時勢と魏室の少恩



んで死せり疑もなく、或は操の爲に使役され、自ら其身を誤りしものなり。君臣すてに志を異にし、互に之に頼つて、富貴利達を得むことを圖る。その間、毫も徳義相慈むものなきなり。かくの如くして、その子孫、亦た多くは刻薄にして、骨肉を殘害し、又外戚に信任せず。陳思王曹植、操の愛を得、一時殆んど位を得むとせしも、その人、固より簡易、必ずしも兄を凌ぐの意あるに非ず、而して、文帝は之に逼迫して、七歩の吟あるに至らしむ。植の如きは、強いて文學を事とし、僅に自ら慰めむとせしものにして、當世に對しては、頗る冷眼なり。こゝに於てか、自ら老莊に向はざるを得ず。故にかつて自ら曰く、我が身位、我が躬を累す、竊かに古人の志ざすところを慕ひ、老莊の遺風を仰ぐと以て、當時の趨向を見るべきなり。

以上述べるところは、直接間接の別あるも、均しく外部の理因に過ぎず、而して、之と相伴うて到底離るべからざる關係を有する内部の理因は、實に佛教の流布に在り。佛教は、その始、道教の助を借りしこと少からざりしと雖も、今や却つて老莊の哲學一時の盛を促がすに對して、頗る有力なりき。兩教の特質、自ら共通の點あり、彼此相補ふところありて然ること、こゝに於てか、愈よ見るべきなり。

佛道二教の相輔相助

佛道の二教、その所説、頗る相似たりと雖も、厭世思想を促進するに對しては、佛教の勢力、むしろ遙かに大なるものあるを疑はず。他なし、佛教は之を道教に比し、その究極の理想及び所説の方法に於て、ともに現世を超越したればなり。佛教は、要するに宗教的特性を以て稱せらるゝ、印度人の産出に係り、その教理の深邃にして有力なる。到底道教の比に非ず。魏晋の厭世思想は、道之を煽し、佛之を鼓せしものといふを得べし。

支那に於て、政治上の紛亂最も甚しく、従つて道義最も廢弛せし時代を求むれば、之を上にして春秋、戰國あり、之を下にして魏晋六朝あり。この間、子父を弑するあり、臣君を幽するあり、小人上に跳梁し、君子下に屏息し、破倫失序の事實、一一之を擧ぐるの煩たるに堪へず。かくの如くして、榮枯盛衰の甚しき眞に轉瞬の間に起り、輪奐の美を極めし宮闕も、忽にして黍離麥秀、亡國の遺墟となり、深殿垂拱萬乘の天子も、衝卒叱咤の孤囚となり、遂に慘禍を免れず。而して、當時政を執るもの、器宇偏狹、權威を弄し、猜疑構陷、これ事とす。その最も甚しきに至りては、一言の失、一笑の謔、以て其身を殺すに足る。この時に方り、自ら進んで禍亂紛争の盤渦に投

魏晉以後の社會狀勢

ずるもの、多くは是れ風雲の會を悦ぶ亂世の梟雄のみ、而して學者詞人等に在りては、前に述べしが如く、世間的勇氣に乏しく、自ら紛亂の世を厭忌するものにして、固より當代に満足せず、すてに通俗の韻なきものは唯だ山林あるのみ、權勢富貴等、外物全く據るに足らざるを知るや、自ら内部の根柢を求む、その相率ゐて、超然高踏、世と相背くを期せしもの、蓋し止むを得ざればなり。

彼等は、すてに現世を嫌忌せり、故を以て、その衷情の最奥底には、多少の憤念ありしならむと雖も、唯だ夫れ、慘禍眼前に在り、決して熱罵冷嘲の語を發するを得ず、かの永久の社會狀勢を慮り、故らに當今を蹂躪する如きは、絶對的に不可能なりき、かの徒の多くが、老莊を嗜好せしは、元と斯世と遠ざかるの意に出で、その厭世の趣味、偶ま自己と一致し、且つ佛教に比して、なほ一層近接して存在したればなり。六朝以後は、佛却つて盛なり、その根本的理因は、毫も異ならず、唯だその普及の程度如何によりて然るのみ。

漢末より晋初に至るまで、學者詞人の遭遇如何を見れば、士の當世を處すること頗る難く、到底世を避くるの止むを得ざる所以を悟るべし。漢末の文士、蔡邕、孔融

を以て、その最となす。邕は曠世の逸才を以て稱せられ、而して、董卓の誅せらるゝや、坐して獄中に死す。融は名家の後、漢臣たる所以を以て、曹操の爲に殺さる。その他、楊修の如き、禰衡の如き、皆その終を全うせず、三國の時、何晏あり、劉楨あり、晋に入りては、張華あり、嵇康あり、陸機兄弟あり、詞名重望、偶ま其累をなし、皆厄に罹り、甚しきは戮せらる。而して、偶ま身を全うしたるもの、多くは世を避れ、俗に背きし老莊の徒に外ならず。

儒學の衰頹

魏晋老莊の盛行は、儒教の衰微によりて、反照的に證明さるべし。漢末の慘禍は、儒教に對する一大打撃なり。魏の漢室に繼ぐや、大學の制を立てたりと雖も、朝に篡弒の事を行ひ、夕に科擧の法を行ふ、德教幸に存するも、形骸のみ、王肅、何晏、王弼の徒、儒を以て稱せらるゝと雖も、訓詁章句の流に過ぎず、晏の説くところ、却つて清談家の俑を作れり。魏、すてに儒學なし、兩晋南北朝に至りては、愈よ甚し。天下亂離に苦むの時、人は其生を聊せず、百年の志を懐いて、名節を研くもの、絶無、儒教は毫も人心を繋ぐ能はざるなり。

竹林の七賢

如上の時代精神を最も明晰に表現したるものを謂ゆる清談家の一團體となす。魏の末より晋に至るの間、竹林の七賢あり。阮籍、嵇康、その最たり、之に次ぐものは王戎、山濤、阮咸、向秀、劉伶なり。籍字は嗣宗、容貌瓌傑、志氣宏放、性に任かして不羈、或は戸を閉ぢて、書を讀み、累月出でず、或は山水に登臨し、日を経て歸るを忘る。時人多く之を癡といふ。籍本と濟世の志あり、魏晋の際、天下多故、名士全きを得るもの少きを見て、遂に世事に與らず、常に酣飲を以て事となす。鍾會素より籍を惡み、數ば時事を以て籍に問ひ、その可否に因つて之を罪せむと欲す。皆酣醉を以て免るゝを得たり。又かつて歩兵の厨營人、善く酒を醸し、三百斛を貯ふるものありと聞くや、求めて歩兵校尉となり、職を去ると雖も、恒に府内に遊び、必ず朝宴に與かれりといふ。かくの如くして、狂態百出、或は風前に犢鼻褌を褌して、上巳の彩旗に代へ、或は醉酣六十日、人言を聞かず、又常に青白眼をなし、禮俗の士に對する時は、白眼を以てし、同氣の人に逢うては青眼をなす。類唐自放の趣、こゝに至つて極まれり。籍かつて廣武の古戰場に上り、楚漢の戰跡を觀、嘆じて曰く、時に英雄なく、豎子をして名を成さしむと。その材器、固より凡ならず、而かも、之を驅り、矯激背世、兒

戲に類するの事をなさしめしもの、一に是れ時務の罪のみ。嵇康は身の長七尺八寸、風儀あり、形骸を土木にし、自ら藻飾せず、人以て龍章鳳姿、天質自然なるが如しとなす。資性恬靜にして欲寡く、大量あり、學は師受するところなければ、博覽にして該通せざるなし。後、魏の宗室と婚して、中散大夫に拜せらる。康固より老莊を好み、籍等と交り、その人と爲り全く相似たりと雖も、鍾會を禮せざりしに因り、爲に譖せられて、獄に繋がる。その將に東市に刑せられむとするや、大學生三千人、請うて師となさむとせしも、許されず。遂に勉めて世に背いて自ら持し、而かも重望あること、かくの如くして、刑戮を免れず、まことに嘆惋の極といふべし。籍に大人先生傳あり、康に養生論あり、ともに其志を見るに足る。劉伶、亦た酒徳の頌を著はす。その狂籍と相若く、他の諸輩、多くは此類。たゞ山濤、仍ほ意を世事に留め、數ば時弊を匡救せむとせしこと、前に述べたるが如し。王戎の如きは、時と浮沈し、匡救するところなく、性復た貪吝、田園天下に遍ねく、牙籌を執つて、晝夜會計す。家に好李あり、人その種を得むことを恐れ、常に其核に鑽す。凡そ賞拔するところ、専ら虚名を事とす。阮咸の子瞻、戎に見ゆ、戎問うて曰く、聖人は名教を貴び、老莊は自然を

七賢の人物

明かにす、その旨同じきか、瞻曰く、將た同じきなからむやと、戎咨嗟良久しく、遂に之を辟す、時に之を三語椽といふ。

七賢の人となり、大抵かくの如し之を論ずるものは曰く、史に七賢の放達を贖る、禮法を輕蔑し、世事を遺落するに至りては、固より鄙むべし、然れども、此れ特にその竹林會飲の時、則ち然るを言ふのみ、若し乃ち地、竹林に非ず、時、會飲に非ざれば、その法を執つて、世事を慎むもの、少からざるなり、かつて、山濤母に事ふるの孝を竭し、廉官の節を守り、阮籍曹爽の名を辭し、晋武の婚を卻け、嵇康養生の道を悟り、選部の擧を絶つを觀るに、これ皆名教の係るところ、概するに、醉客を以て、之を忽にすべからざるなり、阮咸、向秀、劉伶、録するに足るなしと雖も、而かも、當に皆飲に託し、以て自ら全うせしなるべく、智士たるを失はず、ひとり怪しむ、王戎の利を好む、而かも、顧みて亦た放達と稱す、認れるかなと、然れども、王戎又何ぞ故らに利を好む爲し、以て世人に度外視さるゝを欲せしに非ざるを知らむや、之を要するに、七賢の徒、いづれも、材器あるに係らず、時世の非なるが爲に、意識的に酒に隠れしのみ。

七賢以後の清談家

惠帝在位中、王戎朝に在り、時に王衍、樂廣、皆清談を善くす、衍、神清明秀、その少き時、山濤之を見て曰く、何物の老嫗か、寧馨兒を生む、然れども、天下の蒼生を瞶るもの、未だ必ず此人に非ずむばあらずと、後に其言果して驗あり、衍の弟澄、阮咸咸の從子、修、胡毋輔之、謝鯤、畢卓等、皆任放を以て達となし、醉裸以て非となさず、七賢に次いで清談の一團體たる觀あり、比舍の郎、釀熟す、卓夜、甕間に至つて、盜み、飲み、守者の縛するところとなり、且に之を視れば、畢吏部なり、樂廣之を聞いて笑つて曰く、名教の中、自ら樂地あり、何ぞ必ず乃ち爾ると。

清談家の人世

はじめ、魏の何晏、才名あり、老莊の書を好み、六經を謂うて、聖人の糟粕となし、因つて論を立て、曰く、天地萬物、皆無を以て本となす、と、衍等之を愛重し、因つて一家の人生觀を爲せり、謂へらく、すでに天地萬物を以て本となす、人生何を獨り無ならざらむやと、こゝに於て、實踐的方面に於て、自ら道德を重ぜず、この世に在る間、本能の發動に任かせ、大害を被らざる限り、十分の快樂を求め得むことを期せり、之を一概して、清談者流の爲すところは、毫も名節を修めず、談笑無事、以て身を

傅玄と裴頠

處せむことを勉め、縱酒酣飲、禮法を蔑視し、口を老莊虛無の旨に藉り、この五十年を擧げて醉生夢死の間に送らせむと欲せしものなり。賢士に在りては、實に止むを得ざるに出づと雖も、天下一般に亘るに及びては、その弊言ふに勝ふべからず。國力の伸張、豈に望むべけむや。塞外諸胡の侵入、固より其故なきに非ざるなり。武帝かつて舊來因襲せる星氣讖緯の學を禁せしと雖も、終に這般新生せる老莊思想の腐敗を防遏する能はず。傅玄はじめて諫官となるや、魏末の士風頹敗せるを慨し、上疏して之を言ふ。その略に曰く、臣聞く、先王の天下を御すや、教化上に際にして、清議下に行はると。近ごろ魏武法術を好んで、天下刑名を貴び、魏文通達を慕うて、天下守節を賤しむ。その後、綱維攝せず、放誕朝に盈ち、遂に天下をして復た清議なからしむ。陛下龍興、禪を受け、未だ清遠有禮の臣を擧げ、以て風節を教くせず。未だ虛鄙の士を退け、以て不恪を懲さず。臣、是を以て言ありと。帝之を嘉納し、玄をして、詔を草し、以て進めしむ。然れども、亦た革む能はず。玄の言ふところ、善く時弊を穿てり。然れども、其果を論じて、其因を究めず。その矯正方法の如き、恐らくは、其正を得たものに非ざりしならむ。之に次いて、惠帝の世、裴頠、崇有論を著して

曰く、利慾は節制すべきも、絶えて去るべからず。人事は節すべきも、全く無なること能はず。今や談者有形の累を恐れ、盛に空無の美を稱し、終に綜世の務を薄じ、内利の用を賤み、吉凶の禮に悖り、容止の表を忽にし、長幼の序を瀆し、貴賤の級を混じ、至らざるところなし。夫れ萬物の生は有を以て分となす。心は事にあらず。事を制する、必ず心に由る。心を謂うて無となすべからざるなり。匠は器にあらず。器を制する、必ず匠を須つ。匠を有に非ずといふべからざるなり。是に由つて之を觀れば、有を濟ふは皆有なり。人類すてに有、虛無何を益あらむやと。その意、剴切ならざるに非ず。然れども、單に常識を以て之を言ふものにして、未だ老莊哲理の基礎たる無を打破するに足らず。蓋し何晏の論は無に見はれ、遂に虛を以て宗となし。形而下の者を遺失し、裴頠の論は有に見はれ、遂に形器を以て執となし。形而上の者を遺失す。皆理を知らざるの言、有無紛々、兩極を分つも、ともに盡くせりとなさず。細石水を障り、水愈よ激し、勺水火に注いて、火却つて盛なるは、常に見るところ。時勢は毫も之に關せざるを奈かむともするなかりき。

清談は、老莊哲學の變形にして、幾分批判的精神を鼓吹する機會を附與し、比較

神仙説

六朝佛教盛行  
の因

的高尙なれども、その卑陋なるものは、神仙説にして、鍊丹修形、以て仙化せむことを求むる迷信者の一群となれり。秦漢の間、仙薬を海に求むるものあれども、自ら仙薬を製し得べしとなすに至りては、その妄誕不稽、更に一步を踏過せしなり。その祖を葛洪となし、その著抱朴子二卷、仙薬調劑の法を論ずる、最も詳かなり。之を概言するに、魏晉以後の思想界は、全く南方思想の横流に任せしものにして、時勢の究迫は、偶々其弊を激成し、因果聯關、その勢、頗る盛にして、殆んど救ふべからざるに至れり。然れども、道教は到底真正の宗教に非ざるを以て、實に寸効を認めず、こゝに於て、その初相配相助をなせし佛教は、必然の結果、代つて其處を占むるに至り、深遠高尙なる大乘教理は、將に一般に普及し、後に支那化して、愈よ其勢を鼓し、輕浮膚淺の虛無主義は、自ら消滅するの止むを得ざるに至り、道教中の或者は、時に佛者と爭論を試みしも、全く失敗せり。

魏晉以後の士風、上に述べたるが如く、人は其生を聊ずるに汲々として、國家を憂ふるの暇あらず、八王の亂後、十六年、五胡中原に入り、遂に司馬氏をして、南渡の止むを得ざるに至らしめ、東西半面の大陸は、華夷紛雜、邦土分崩、忽ち風塵の區となり、之を春秋戰國に比し、むしろ過ぎたるものありき。

▲東洋通史第五卷目次▼ (續刊)

第二篇 中古期—漢族繁榮時代

(七) 五胡十六國の世

- 第五十七章 五胡の起原及び諸僭國の勃興
- 第五十八章 東晉元帝の即位
- 第五十九章 劉石二氏と前後兩趙
- 第六〇章 王敦蘇峻の亂
- 第六一章 桓溫の功業及び陰謀
- 第六二章 苻秦の極盛及び兼併
- 第六三章 肥水の戰
- 第六四章 中原の大紛亂と九國の併立
- 第六五章 桓玄の亂
- 第六六章 姚秦の盛衰
- 第六七章 劉裕の篡奪
- 第六八章 南北分立の趨勢と諸僭國の滅亡

(八) 南北朝

- 第六九章 南北國力の比較
- 第七〇章 太武四方の經略
- 第七一章 南宋の滅亡
- 第七二章 北魏の極盛
- 第七三章 齊梁の交替
- 第七四章 東西兩魏の分裂
- 第七五章 梁武の治世及び侯景の亂
- 第七六章 周齊の治
- 第七七章 塞外の形勢と柔然突厥の隆替
- 第七八章 北齊の滅亡
- 第七九章 周隋の交替
- 第八〇章 隨の統一

明治卅六年十一月八日印刷  
 明治卅六年十一月十一日發行

隔月一回出版 全部二夕年ニテ完成ス  
 全部十二冊和本綴 總紙數三千六百頁  
 定價一冊金五拾錢 六冊前金貳圓七拾錢  
 全部十二冊前金五圓 郵稅一冊八錢



著者 久保得二

發行者 大橋新太郎

印刷者 石川金太郎

印刷所 東京市京橋區西紺屋町二十六七番地  
 株式會社 秀英舎

發兌元 東京市日本橋區本町三丁目 博文館



文學士 漢文專攻 久保天隨先生編述

四書新釋

全部六冊大判和本綴  
 總紙數二千五百五十餘頁  
 全部割引金貳圓貳拾錢

新釋 四書 大學

全一冊 正價金拾五錢  
 郵稅四錢

新釋 四書 中庸

全一冊 正價金貳拾錢  
 郵稅六錢

新釋 四書 論語

全三冊 正價各四拾錢  
 郵稅各八錢

新釋 四書 孟子

全三冊 正價各六拾錢  
 郵稅各拾錢

文章軌範精義

正編全部三冊大判和本綴  
 總紙數一千百七十頁  
 全部正價金壹圓貳拾錢

▲正編上、中、下三冊 一冊正價金四拾錢 郵稅八錢宛

文章軌範の世に行はるるや、既に久しく、子弟之を誦習せざる者あらず、本朝は元と、彼土科擧に應ずる者の爲に、特に評選せしむるに、其の比に足らざるを、而して古今の註釋、紛然出、其多きに至るまで、文章風格變遷の大略を領知し得べく、千古に傳へて不評なるもの、撰述を先にせらる、是なり、天隨先生の註釋、紛然出、其多きに至るまで、文章風格變遷の大略を領知し得べく、千古に傳へて不評なるもの、固より論なく、凡そ文を學ばんとするもの、必ず一本を机上に備へざるべからず。



明治卅六年十一月八日印刷  
明治卅六年十一月十一日發行

隔月一回出版 全部二ヶ年ニテ完成ス  
全部十二冊和本綴 總紙數三千六百頁  
定價一冊金五拾錢 六冊前金貳圓七拾錢  
全部十二冊前金五圓 郵稅一冊八錢



著者 久保得二

發行者 大橋新太郎

印刷者 石川金太郎

印刷所 東京市京橋區西紺屋町二十六七番地  
株式會社 秀英舎

發兌元 東京市日本橋區本町三丁目 博文館



# 文學士漢文專攻 久保天隨先生編述

## 四書新釋

全部六冊大判和本綴  
總紙數二千五百五十餘頁  
全部割引金貳圓貳拾錢

先秦時代の聖經傳古今の註疏紛然雜出その多きに堪へざるも絶て當時の社會狀態を詳にせず今を以て古を律し遂に原始の意義を失ふを憾らず私見を逞ふし新説を出さん力をむるも其の本領は更に支那古文學の研究にあり本書は氏が如上の見を以て聖門第一の現時的急務なり天隨先生之を以て世に稱せらるゝと雖も其の本領は更に支那古文學の研究にあり本書は氏が如上の見を以て聖門第一の現時的急務なる四書に就て之れが新釋を試みられし者にして引證該博論周匝其要を掲げ其玄を鉤す其衆勳たりといふべく其勞多しといふべし

新四書 大學

全一冊 正價金拾五錢 郵稅四錢

新四書 中庸

全一冊 正價金貳拾錢 郵稅六錢

新四書 論語

全三冊 正價各四拾錢 郵稅各八錢

新四書 孟子

全三冊 正價各六拾錢 郵稅各拾錢

## 文章軌範精義

正編全部三冊大判和本綴  
總紙數一千百七十頁  
全部正價金壹圓貳拾錢

▲正編上、中、下三冊 一冊正價金四拾錢 郵稅八錢宛

文章軌範の世に行はるゝや、既に久しく、子弟之を講習せざる者あらず、本書は元と、彼士科舉に無する者の爲に、特に評選せしに過ぎざれども、之れを通讀すれば、戰國の末より、宋末に至るまで、文章風格變遷の大略を領知し得べく、千古に傳へて不朽なるもの亦た怪しむに足らず、而して古今の註釋、紛然雜出、其多きに堪へず、と雖も、拙に無用なる文法を説いて、其他に及ばず、因襲の餘に出でしもの比々として、是なり、天隨氏は四書新釋を著はし、次に、大に、諸子に及ばむとせしが、如下の時勢に感ずるところあり、特に此書の撰述を先にとせらるゝ、全編を通じ平易流暢なる百文一致體を以て之を叙述し、周匝明白、一字を増減すべからず、就中、字義の解釋と故事の闡明とは、最も其意を致されしところにして、且つ、編中處々に、之を叙述し、諸家の評論とは、氏にして始めて施すべきものなり、初學者は固より論なく、凡そ文を學ばんとするもの、必ず一本を机上に備へざるべからず

大學科井上文學博士序文 木村鷹太郎先生著 (下卷近刊)

# 東洋倫理學史

全洋裝大判背皮金字入  
二上卷正價貳圓八拾錢  
冊小包送四五百

東洋倫理學史の著者は世界上古書を以て嚆矢とす、此書は著者數年間苦心研究の餘に成れるものにして、敘述詳密、引用正確、著眼卓絕、抑む所の評論は鋭利にして議論は大膽、而も條理整然たり、今其上卷の梗概を舉ぐれば先づ緒言——倫理學に對する各方面の觀察及解説、支那之部には——○伏羲より周公に至る迄の諸聖賢○天に就ての觀念○周末倫理學說○管子を初め傳、學說——社會及道德、人姓論、德行の能量、政治と道德、八觀、サラストウ教に對比す、結論、老子、孔子、子思、墨子、揚子、列子、莊子、孟子、荀子、韓非子、李斯及秦始皇帝等の傳記及學說を掲げ其主義、方法、當時の事情、各説の反目乖離等を布衍解剖して精敘論其遺奧を極め○易の倫理學思想なる標榜の下に「模範的法則」の客觀的存在「倫理の根本」人倫の起點「實利主義」善惡應報の度量「提要」に別ちて其本體を抉出品讀し○附録として「倫理學は實踐學に非ず」等、章を分つ十有五、目を立つる無慮數百、反復精讀を極む。

在大學院文學士專攻阪本健一先生著

# 世界史

全洋裝大判背皮金字入美本  
二上卷四版出來下卷既製  
冊總紙數二千五百餘頁

▲上卷正價金壹圓六拾錢小包送四百餘頁 下卷正價金貳圓小包送六百餘頁  
世界史上の幾江流は宛轉曲折茲に數千載軌近に至りて悉く會滙し怒濤狂瀾今や天下を捲く是れ豈古來未曾有の大史局にあらずや此時に當り天下の極東に國して新に振興の運に際會せる國民は東西古今の往史に鑑みて世界潮勢の來路を研めざるを得ず此書上下兩卷通して三千頁撰んで精述べて密世界東西の隆否を通叙して餘蘊なし世の史學に想を傾くるの士は邦文世界史中に其精細なる編著を求めば必ず先づ本書を採らざるべからざるなり

文學士幸田成友君著 (三版)

# 東洋歷史

洋裝大判並製  
正價參拾五錢  
郵稅八錢

▲特製本洋布上製 正價五拾錢 郵稅拾錢  
歷史に古今の區別無し過去を知るにあらざるば安ぞ能く現在を知るを得ん四方東漸の由來する所深きを明め併せて今日の日本が世界の日本として東亞に於ける地位の多難多苦なるを知らんと欲せば須らく本書を一讀せよ本書は古來東洋の天地に行動せし諸人種の興亡盛衰を叙述せる一新好著にして識見廣博考證精嚴東洋史を研究するに最も完全なる無比の良著と謂ふべし

文學士吉國藤吉君著 (四版)

# 西洋歷史

洋裝大判並製  
正價參拾五錢  
郵稅八錢

▲特製本洋布上製 正價五拾錢 郵稅拾錢  
現今の時勢を知らんと欲せば必ず先づ過去の事實を了せざるべからず歴史を研究するの所以茲に在て存す而して紛亂錯雜其真相を知るに難きもの實に現界文明の根原たる西洋歴史に有りとし云ふべし著者は大學に在り斯學を專攻すること數年今や本書を著せし世に公す乃ち時期を分ちて上世史中世史近世史最近代史となし上は羅馬時代下は佛蘭西明等朝も史上の事實は一切網羅せり議論確證秩序整然史家坐右の要冊と云ふべし

文學博士高山林次郎君著 (八版)

# 世界文明史

洋裝大判並製  
正價參拾五錢  
郵稅八錢

▲特製本洋布上製 正價五拾錢 郵稅拾錢  
文明史は人類生活の統一の歴史なり歴史的發展の精神は是れによりて始めて轉了するを得べし從來本邦學者の手に來れる歴史の多くは單に事實を羅列して是を年度と方處に繋けたるもの讀者は固有名詞の送迎に忙殺せられて遂に史的発展の眞精神を會得するに由なし。著者の此書あるは實に是を欠陥を補充せむが爲めなり即ち餘を有史以前の民族に起し佛蘭西大革命に至るまで哲學宗教文學及び政治の上より東西歴史の隱微を描破せむと擬す眞正の歴史あることを知らむと欲する者は請ふ本書を讀め

白河文學士國府種徳君共著

# 支那文明史

洋裝大判並製  
正價參拾五錢  
郵稅八錢

▲特製本洋布上製 正價五拾錢 郵稅拾錢  
支那文明を調査するに例へ支那の學者が古來浩瀚の書史を備へて往々其問題に解釋を加ふる如き時になきにあらざるも皆一定の系統組織を立て、解釋を試むるものに非ざるが故に却つて歐羅巴の文明を説明するよりも更に困難を感ずる所著者の苦心知るべきなり而して本書は古今東西の學者が未だ道破せざる所又未だ思慮の及ばざる所を指摘して天下の支那學者を驚倒せしむるに足るもの多し蓋し支那調査に於て裨益する所少なからざるべし

故西村茂樹先生序文  
文學博士萩野由之先生著

中等 日本歷史

(版一卅)

(文部省檢定済)

著者の我國史學に精通すると世界  
の地形建國の躰裁、政治の變遷  
に起し進みて太古史近古史に及  
び遂に廿七八年役臺灣鎮定に終  
る而して各史編末に附するに制  
度風俗の沿革を以てし卷尾に諸  
國封建沿革圖を附載す文辭明  
快敘事實論中等教育を受けつ  
ある者は勿論何人と雖も一本を  
座右に備ふべきの寶典なり。

全二冊洋裝中判背皮特製本  
正價一冊五拾五錢郵稅各八錢

文學士木寺柳次郎君著(九版)

日本歷史

大判洋裝  
紙數約三  
百八十頁  
特製  
正價五拾  
五錢  
並製  
郵稅八錢

我國の紀元は二千五百六十餘年、歷代の皇統連續すること實に百二十一代、金匱無瑕純其精  
美、君賢に臣忠に、誠道一貫を以て大義名分を明にす、是れ宇内萬邦に對峙して國威の隆盛を  
め、旭旗の鮮明を示し、外邦をして均しく美仰けく能はざらしむる所以なり、著者帝國大學に在  
りて久しく本邦の歴史を專攻し、精搜明察、具さに歷代の史籍を究む、今も教壇に立つて生徒を  
提訓せらるるに方り、其史の闡如たるを遺憾とし、多年蒐羅の秘蔵を解き世人の爲め遂に本書を  
著はされぬ、行文流暢にして事實精確を究め、章節細釋紙數三百數十頁の多きに及ぶ實に是れ本  
邦歷史中現時稀に見るの寶書と謂ふべきなり

柏軒 松井廣吉君著(再版)

新撰大日本帝國史

全一冊洋裝  
大判並製紙  
數約六百頁  
正價四拾  
錢  
郵稅拾一錢

- 目一 ●總論 ●一編上古史(上) ●二編上古史(下) ●三編中古史(上) ●四編中古史(中) ●五編中古史(下) ●六編近世史(一) ●七編近世史(二) ●八編近世史(三) ●九編近世史(四) ●十編近世史(五) ●十一編近代史(上) ●十二編近代史(下) ●十三編現代史(下)

日本歷史中最も多く賣れ行きたるは實に本書なり、今や又大に訂正を加へて益々完備のもの  
とし、且つ空前の偉業として帝國歷史の一大盛觀たる征清戰役の頭末を叙し、開戦の原因海陸の  
踏戦、講和、凱旋、行賞、臺灣平定に至るまでを、綱を提げ要を擧げ、簡潔の文を以て之を記  
し、以て大日本帝國の歴史を完ふせり

野津陸軍大將序文 藤野房次郎君著

洋布上綴八百頁  
實價七拾錢  
郵稅拾八錢

紫山 川崎三郎君著  
增訂西南戰史

全一冊洋布上綴 實價八拾錢  
大判一三五〇頁 小包送六百元

平壤は八道第一の堅城にして、東洋無比の天險なり。加ふるに清軍亦精銳を盡して死守す、歐米の人士皆以て期年を支ふべしとなせるもの、固より難にあらざりしならん、然るに何ぞ討つむ。我軍一擊之を陥る、神算鬼謀に是れ依ると雖も、將軍の剛猛絶倫なるを以てせざれば安んず能く如斯なるを得へき、隨てその戰國攻伐の壯快勇烈、天地を驚動するの壯觀見るべし、本書は當時從軍記者中録々の名ありし、筑秋散史藤野房次郎君が身親しく見る所により、更に攻城の諸將に質して作述せるものなれば、一讀さながら電光石火の間に身を置くの感あるべし

伊東海軍大將題辭 平田勝馬君著

黃海大海戰

洋布八五〇頁  
正價九拾錢  
郵稅二拾錢

征清の一役、陸軍に於ける平壤包圍攻撃と對峙して最も壯快の觀を極めたるを、黃海大海戰とす。平壤包圍攻撃は既に編述出版して、江湖の大喝采を博したり、今また本書上梓の運に遭ふ。篇中記する處一として當時戰に臨みし將校の直話に出でざる無く其電報電報の狀、雲湧潮翻の態、眞に讀者をして汗を握らしむ。顧みれば前後殆ど二年有半に渉る征清役中に於て其將を斬り鬘を屠るの快戦勝けて歎ふべからずと雖も、日清勝敗の大勢を一決して終に我をして優勝の位置に立たしめたる所以のものは一に黃海の大戦に我の能く全勝を占めたるに歸す是故に後世征清の事蹟を知らむと欲せば必ず本書を讀て其海軍の消息を知るべし

經營、精確なる幾多の材料に據り、且當時の士  
の目擊耳聞を参照して本書を著す。  
西南戰史始めて完書ありと云ふ可し。曩に一  
部十二巻として出版したるを、今敵架の便を  
計り増訂して壹巻とせり、讀者一たび眼を暴  
らさば、當時天下の大勢、對外の趨勢及び幾  
多世間未知の奇事等隨知として紙上に顯は  
れ、拍案快談を大呼せん

史戰大三發館文博

館文博町本京東元兌發

本館纂に世界の形勢を一括して世界國勢要覽と稱し、昨年亦之れを訂正して好評を博せり。國勢の變化それ急なり。本年更に亦大訂正を加へて太陽臨時増刊とす。全部を日本、東洋、西洋の三箇に分ち、日本内及び東洋諸國は、特に全部を新に編成せり。東洋多事の今日、其形勢に通ぜんと欲する者は、先づ本書を精加ざるべからず。これ外國統計諸類の反譯に非ずして、編者が苦心修繕して蒐集せる材料を基とせるが故に、世界無比の良書たりといふも、敢て不當の言にあらざるなり。西洋の諸國亦新材料によりて全部を訂正せり。口輪には西洋諸國の風景風俗を始め、東洋の狀況を知るに足るべき寫眞十數個の外に、露清陸上交通圖、東清鐵道地圖、京釜鐵道地圖等、總て最近の調査に於けるものなり。斯くの如き廉價にて全世界の現形勢を窺ひ得るの書覓むるも亦得べからず。

太陽臨時増刊 世界國勢要覽

四六二倍 洋裝並製 透紙數 正價參拾錢 價可 二六〇頁 郵玩參錢 省可

目 概

- 大日本帝國** 國體、皇國、地理、氣象、戶口、政治、財政、外交、軍事、司法、宗教、教育、産業、商業、貿易、交通、通信
- 亞細亞洲** 波斯、オスマン、韓國、ネパール、ブータン、阿富汗斯坦、清國、暹羅、各國の國體、地理行政組織其他
- 歐羅巴洲** 伊太利、英吉利、露西亞、葡萄牙、白耳義、國連帝國、土耳其、ルクセンブルグ、ルーマニア、和蘭、澳太利、匈牙利、佛蘭西、丁抹、希臘、モナコ、モンテネグロ、
- 北亞米利加洲** セルツイア、墨西哥、海地、及諸國、西班牙、ハイチ、ドミニカ、グアテマラ、北米合衆國、ホンズラス、クアテマラ、コスタリカ、サルバドル、墨西哥各共和國
- 南亞米利加洲** パラグアイ、ボリビア、ペル、智利、ウルグアイ、ヴェネチアズラ、エクアドル、伯刺西、コロンビヤ、アルゼンチン各共和國
- 亞弗利加洲** リベリア合衆國、コンゴ獨立國、アビシニア帝國、モロッコ帝國

